

君の傷になって死にたい

サイ non

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

虎杖悠仁の親友には二つの秘密がある。

一つは転生者だと言うこと。もう一つは、己の欲求に忠実すぎること。

表紙イメージ：

*

曇らせ勢が良質な虎杖曇らせのためにひたすら体を張る話です。不快な表現を含むのでご注意ください。救済要素はありません。

ボーイズラブタグは念のためつけておいてます。
p i x i v にも投稿してます。

目次

1.	夢見心地	1
2.	改過自新	9
3.	愚者一得	18
4.	權謀術數	26
5.	形代變轉	35
6.	呪胎戴天	43
7.	熱願冷諦	54
8.	肝胆相照	65
9.	一意奮闘	76
10.	寸善尺魔	87
11.	偏袒扼腕	102
12.	前途有望	113

番外編	今昔之感	127
13.	暗雲低迷	132
14.	咄咄怪事	145
15.	同床異夢	153
16.	竜虎相搏	162
17.	得魚忘筌	178
18.	背信棄義	190
19.	主客顛倒	201
20.	一簣之功	216
21.	渋谷事變	230
22.	因果応報	241

1. 夢見心地

虎杖悠仁には親友がいる。

あまさがかがいり
天坂快里とは小学校からの仲だ。なぜか初めて会う前から虎杖のことを知っていたように、隣の席になったとき満面の笑みで手を差し出した。

「はじめまして、悠仁。俺、天坂快里。友達になろう！」

名前の通り、快活な笑顔が似合う男の子だった。「いいよ」と答えて目の前の手を握り返せば照れたように、くすぐったそうに笑う。友達になっただけでこんなにも喜ばれて悪い気はしなかった。

その日から虎杖の日常には天坂が加わった。

朝一緒に登校して、給食を食べて、休み時間はドッジボールで戦い、放課後は泥だらけになったまま小石をどちらが長く蹴って帰れるか勝負しながら帰路に着く。

優しい日々だった。

中学に上がり、虎杖の祖父が入院して、一緒にいる時間が減つても天坂は変わらなかつた。

学校でジャンプを読みながら笑い、数学の問題に頭を悩ませ、好きなグラドルの話に

花を咲かせる。

くだらない冗談で笑っていられるのが幸せだった。

時折、こちらを氣遣った表情で「無理してないか？自分の時間ちゃんと作れてるか？」と聞いてくれることがありがたかった。

そんな穏やかな関係は高校生になった今でも続いている。

「快里さあ、彼女とかいねーの？」

「いたらこうして昼飯一緒に食ってないだろ」

いつもと変わらず一つの机に二つの椅子を突き合わせて、各々の食事を広げる。

今日は購買の争奪戦に見事勝利したので、いつもより豪勢なパンが並んでいる。限定のプレミア焼きそば。パンをゲットできたのは久しぶりだ。

「ていうか悠仁こそ小沢とどうだったんだよ。卒業のとき写真撮ってたじゃん」

「別になんもないけど？」

「マジかよ……」

信じらんねーと言いながらコロツケパンを口に運んでいる。

天坂はあまり肉を食べない。以前ビッグカツサンドを勧めたが、胃がもたれると断られた。胃袋だけ年寄りなのかもしれない。

「あ、そだ。快里って今日の夜ヒマ？」

「暇だけど」

「オカ研の先輩がさ、夜の学校でアレのお札剥がすって言ってたんだよね」

「この間拾ったって言ってたやつか」

「そうそう。快里ホラー系好きって言ってたじゃん。興味あるかなって。先輩たちには言っとくし」

しばしの沈黙。何か悩んでいるように見える。

もしかして、映像やゲームで見るホラーはいけても、リアルなやつはダメだったのだろうか。

じっくり数分考えて、ようやく天坂は口を開いた。

「ん、よし。行くわ」

「本当に大丈夫か？無理してない？」

「してない。そっちから言ってきたのに何を今さら」

「いや…。快里が嫌なことしたくねえし」

その言葉に天坂は楽しそうに笑う。

「俺は悠仁にやられて嫌なことなんてないよ」

そう言われるとなんとも言えない気持ちになる。きっと親愛の証なのだろうが、ちよつと心の敷居が低すぎやしないだろうか。

こんなにも気を許してもらえているのは嬉しい反面心配にもなる。

それでも、この心の裏側をくすぐられるような感覚は手放しがたいと虎杖は思うのだ。

「お祖父さんの具合はどうなんだよ」

オカ研の部屋に行く道すがら、天坂がそつと切り出した。

「うーん、まあまあ？」

「たった一人の身内がそれで良いのか」

「なんかまだ死ななそうだし。カッコつけた遺言残そうとしてるうちは平気な気がする」

「そつか。でも、無理すんなよ。お前は自分のこと疎かにしがちだから」

優しく背中を二回叩かれる。この暖かさに今までどれほど助けられてきただろう。

仕返しに脇腹を肘で小突いてやると「なんだよ」とくすぐったそうに笑った。

きつとこのぬるま湯のような関係は祖父が死んでも、卒業して就職しても、しわくちゃの爺になっても変わらないんだろう。

そう心の底から信じていた。

転生、という言葉がある。

一般にはヒンドゥー教や仏教の教義に用いられる思想の一つ。肉体が死んでから、魂が新たな肉体を得て生まれ変わるといふものだ。

そして、日本ではライトノベルや二次創作といったサブカルチャー界隈で人気のジャンルの一つである。生前の記憶を持ち越したままマンガやアニメの世界に生まれ変わり、オレツエーしたり、美少女を侍らせたり、なんでか平凡に暮らしたりする。

まあ、そんなことが自分にも起こるとは思いもしなかったが。

天坂は名前も知らない先輩たちと楽し気にこつくりさんをやる虎杖をぼんやりと眺めていた。

いわゆる前世というやつが記憶が戻ったのは小学生の時だ。

何度目かの席替えの時、隣になったやつに見覚えがあった。同じクラスなのだから当たり前前のことのはずなのに、自分の記憶にあるのは『もつと成長した高校生くらいのだ。机に貼られた名前シールが目に入る。』

『虎杖悠仁』。

それが引き金だった。前の人生、ハマっていたサブカルの世界、話題だった「呪術廻戦」というマンガ、そしてその主人公。

溢れかえる記憶の波にのまれながらも気絶しなかったのは奇跡だったと思う。ということはハイハイしてた頃から見えていたあの気持ちの悪い生命体は呪霊か、と妙に納得した。

そこで、ふと気が付く。

このまま原作通りに時が進めば目の前のこいつは呪術師と呪霊の血生臭い戦いに巻き込まれていく。祖父の遺言に呪われ、人を助けながら、どうしようもない地獄に身を沈めていく。

一番記憶に残っているのは、あの渋谷でのワンシーン。

両面宿儺による虐殺の果て。何もなくなつた更地を前に自分を呪い、死を願つて泣き崩れる、あまりにも救いがない未来。

そんなの。そんなこと。

最っ高じゃないか。

天坂はいわゆる『曇らせ展開』が好物のオタクだった。

天坂の前世は社畜だった。毎日起きて、満員電車で揺られて通勤し、怒鳴られ罵られ馬鹿にされ、終電で帰り死んだように眠る。最期はよく覚えていないが、自分から電車

に飛び込んだような気がする。そんな糞煮込みのような日常の支えになっていたのがサブカルであり、『曇らせ』だった。

今思えば心の防衛本能だったのかもしれない。惨い目に会うキャラクターたちを見てキツイ自分の現実から目を逸らし、心を慰める。だいたい最低だがそれでも救われていたのは事実だ。

まあ、一話から右腕左足と弟の体を失うマンガが人生のバイブルだったのでただの性癖だった説の方が濃厚だろうが。

ともかく、そんな曇らせ展開好きな天坂にとつて「呪術廻戦」はかなり好きなマンガの一つであり、もちろん推しキャラは虎杖悠仁だった。

これはチャンスではないだろうか。

今ここで虎杖と友達、いやそれ以上の関係になればあ天坂の伝説的のシストワーンに立ち会えるのではないか。いや、立ち会えなくても自分を要因としてもっと虎杖を曇らせることができるのではなからうか。

それこそ吉野順平のように。

どうせ一度死んだ身だ。それならより自分の萌えのために有効に使いたい。

そうして、天坂は虎杖悠仁の親友となった。

会長に続いて部室に乱入してきた陸部顧問のせいでさらにカオスになる空間を半笑いで見守る。

原作通りなら今夜祖父は死に、虎杖が地獄への一步を踏み出す。

一緒に病院に行こうか、先輩方の肝試しに付き合うかそりやもう悩んだ。

身内の死に涙を堪える虎杖を間近で見たい欲求と、原作の展開をリアルで見たい欲求を天秤にかけた。

後者を選んだのは上手いこといけば自分も高専にくつついて行けると思ったからだ。見える人間なら無下にされないだろう。

呪霊に殺されるリスクはあるが、それはそれでよし。きつと死んだら初っぱなから虎杖の心をへし折ることができる。

呪霊に殺されようが、その後の地獄で死のうがどちらにしても天坂にとって美味しい展開であることに変わりはないのだ。

人知れず天坂はうっそりと笑う。

この楽しい地獄で死ぬるなら、それが虎杖の腕の中ならなお良い。

最期に彼の顔が絶望に染まるのを見れたとき、きつと文字通り天にも昇る心地なだろう。

2. 改過自新

「……仮に器だとしても、呪術規定にのつとれば虎杖は処刑対象です。でも、死なせたくありません」

「俺からもお願いします」

背後から聞こえた声に伏黒は振り返った。先ほど助け出した男子生徒の一人だ。確か快里という名前だったか。虎杖が散々叫んでいたせいでそいっただけ覚えていた。

「なんだ、君起きてたの」

「目が覚めたのは今です。でも、何となく会話は聞こえてました」

五条の腕で意識を失いぐったりとしている虎杖を見て唇を噛んでいる。

聞こえていた、ということとは虎杖が既に人から外れた存在になっていることも分かっているのだろうか。一般人には酷すぎる話だ。

「俺たちは助かったのに、悠仁だけ死ぬなんて納得できません」

「ふーん。じゃあ訊くけどさ、君『見える側』だよな。なんで呪物の封印解くのを止めなかったの？」

分かってて聞くあたり、五条は本当に底意地が悪いと思う。

一般家庭の人間にとつて、呪いが見えることはメリットでもなんでもない。

祓う方法を知らない人間は視界を横切る影に怯えながら、息を殺して生きていくしかない。誰かに打ち明けたところで嘘つきのレッテルを貼られるのが関の山だ。それだけならまだしも下手すれば虐待やいじめのきつかけになり得る。

だから、彼らがいち早く覚えることは目と口を塞ぐことだ。巻き込まれないよう、疎外されないよう、見て見ぬふりをする。

恐らく、目の前のこいつもそうしてきたのだろう。

「…俺、その場の空気を壊してまで他人を守るほど強くないし、善人でもないです」
泣き笑いのような表情が痛々しい。こんな顔をしているやつをどうして責められるだろう。

「だから、この状況を作った責任は俺にあります」

真つ直ぐこちらへ歩み寄る。一瞬だけ虎杖に視線を落とし、決意に満ちた瞳で五条を見返す。

「悠仁を殺すなら、俺も殺してください」

なぜ、こいつらはこんなにも簡単に他人のために自分の命を投げ出せるのか。

責任だつて彼にあるものか。例え止めていたとしても封印が長続きする保証はな

かった。だからこそ伏黒が回収のために派遣された。遅かれ早かれ呪いは漏れ出し、被害者は出ていただろう。

「本気？」

「本気です」

「なんでそこまですんの？あのまま寝たフリしてれば楽だったでしょ」
「できません」

強い拒絶だった。拳が固く握られている。

「親友なんです」

五条の指先がピクリと動いた。

数秒の沈黙の後、くつくつと喉の奥で笑う。

「君、バカでしょ」

「まあ賢くはないですね」

「でも、そういうバカは嫌いじゃないよ」

優しい口調だった。先程までの突き放すような空気は消えている。

「かわいい生徒と若人の頼みだ。任せなさい」

伏黒は知っている。ふざけているが、この大人は誰よりも頼りになるのだ。

虎杖は先輩たちに別れを告げ、病室から出た。

廊下には壁に背を預けた天坂がいた。こちらに気がついて手を上げる。

「お疲れ、悠仁」

「快里……」

顔に貼られた大きなガーゼ。比較的軽傷だったものの、天坂も怪我をしていた。

何と答えたら良いか分からない。天坂と先輩たちを危険に晒したのは紛れもなく自分だ。いつそお前のせいだと罵ってもらえた方が気が楽だった。

そして、そんなことは目の前の親友は絶対にしないだろう。

「これからお祖父さんの火葬だろ？一緒に行くよ」

身内じゃないけど、といつもと同じように天坂は笑う。

そうやって、いつも人のことばかりだ。自分を疎かにするのはお前の方だろう。

喉の奥がひきつって、うまく声が出てこない。優しく肩を叩く手に、余計に泣きそうになる。だが、今やるべきことは泣くことでも天坂に甘えることでもない。

溢れそうになるものを堪えて、虎杖は天坂の背中を追いかけた。

「や、水入らずのどこ悪いね」

ベンチに座つて二人で天に上つていく煙を見ていると、声をかけられた。つい先日、虎杖に死刑を宣告した五条悟だ。

天坂が立ち上がる。

「俺、席外した方が良いですか」

「そうだね。15分くらいしたら戻つてきてよ」

「分かりました」

手短に答えて引き留める間もなく天坂は歩いていく。彼が座っていた場所に代わりに五条が腰かけた。

「亡くなつたのは？」

「爺ちゃん。でも親みたいなものかな」

「そっか。お祖父さんは彼と面識あつたの？」

「いや、快里は病院に來たことないよ。あいつ氣い遣うの上手いから」

「そう。良い友達じゃないか」

五条の言葉に首肯する。

天坂はきちんと線引きをするタイプだ。親友だからといって何でもかんでも踏み込

んでくる訳ではなく、引くべきところは引き、こちらから話そうとすれば耳を傾ける。すぐに席を外したのも一見ドライに見えるが、虎杖と五条が話しやすいよう気を回してくれたのだろう。

「……呪いの被害つてさ、結構あつたりすんの？」

「今回みたいなのは稀なケースだけど、被害の規模だけで言ったらザラにあるかな」

人間の負の感情が澱となつて積み上がったものが呪いだ。

呪いを前にして、死体が残れば幸運。ひどい時は遺体すら残らない。宿儺の指を探すとなれば凄惨な現場に立ち会うこともあるし、自身が死体になる可能性も大いにある。

「ま、好きな地獄を選んでよ」

飄々と、五条は重い選択肢を投げかける。

虎杖の脳裏に浮かぶ光景。傷を負った伏黒、呪いにあてられてしまった先輩たち、そして変わらず側にいてくれた天坂。

オマエは強いから人を助ける。

祖父の遺言を反芻する。

「宿儺が全部消えれば、呪いに殺される人も少しは減るかな」

「…勿論」

「快里のことも守れるかな」

「勿論」

ならば選ぶ道は一つだろう。

五条に手渡された気色悪い指を一口で飲み込む。一瞬浮き出た体の紋様はすぐに消えた。不味すぎて笑えてくる。

その様子を見ていた五条は楽しそうに笑う。

「覚悟はできたってことで良いのかな？」

「…全然。なんで俺が死刑なんだって思ってるよ。でも呪いは放っておけねえ」

「あ、そうそう。その事なんだけど」

「ん？」

「君の死刑に反対したのは恵だけじゃない。親友の彼、快里だっけ、は自分にも責任があるから、殺すなら自分も殺せて言ってきたね。困っちゃったよ」

全然困ってない様子で両手を広げる。

その言葉に虎杖はまた涙腺が緩みそうになった。本当に、あいつはどこまで。

「……じゃあ、余計に宿儺は全部食わないとな。後は知らん」

大勢に囲まれて死ぬと言われた。そうならば良いと自分でも思う。

その時、隣に天坂がいればもつと良い。

なーんか原作のやりとりとちよつと違くない？

影からこつそり会話を聞いていた天坂はそんな感想を抱いていた。

やはり自分という異分子のせいで若干原作から外れてきているのだろうか。でも虎杖の覚悟は完了したようだしよしとしよう。

五条との問答ではちよつと希死念慮がはみ出してしまっただけなのだ。

見えるのにあえて止めなかったのは単に助けが来るのが分かっていたからだし、リアル宿讎の指を拜んでおきたかった。あんな詰問のような接し方をされるのは予想外だった。

目隠しをした身長190cmオーバーの大男の威圧感はずがに怖かった。

ここで活躍したのが天坂の表情筋だった。

前世の天坂の上司は馬鹿みたいに説教が長かった。同じ話題を延々ループさせ、相手が土下座するか泣くかするまで離さない。

そこで培われたのが『程よく辛そうで悲壮な表情』だ。説教が二、三周したあたりであの顔のまま掠れた声で謝れば五分の三くらい確率で解放された。中々の勝率だ。まさか転生先でこの糞由来のスキルが役に立つとは。

一緒に死刑扱いになればきつと善性の塊である虎杖はいい曇らせを見せてくれると

つい期待してしまった。残念ながら五条の大人力と権力でそんな展開は回避されてしまったが。

「イエーイなかよ死ー！」という一発ギャグを考えていたが無駄になってしまった。

どちらにせよ、結果は天坂にとつて悪いものではない。

虎杖と共に高専に編入できるよう五条が手を回してくれたお陰で『曇らせを堪能できないまま虎杖と離ればなれ』という最悪のルートは避けられた。

さて、そろそろ15分経過した。戻るとしよう。

オタク特有の気持ち悪いニヤつきを引っ込めて、『親友の快里』としての顔を作る。焦ることはない。まだまだ地獄は始まったばかりだ。

3. 愚者一得

東京都立呪術高等専門学校。日本に二校しか存在しない呪術師のための教育機関であり、呪術界の要。

無数の神社仏閣が立ち並ぶ広大な土地。うっかりすると迷いそうな敷地内を五条に連れられ虎杖と天坂は歩いていった。

「これから二人とも学長と面談ね。下手打つと入学拒否られるから緊張つていこー！」
「ええ!? そしたら俺、即死刑!？」

笑いながら拳を天に突き上げる五条と叫ぶ虎杖。そんな二人を横目に天坂は背中に冷や汗が伝うのを感じていた。

しまった。夜蛾学長のことをすっかり忘れていた。天坂は内心舌打ちをする。

虎杖と高専に来たことで浮かれていた。夜蛾との問答で彼の望む答えを出せなければこの学校にいられない。虎杖とも離ればなれだ。絶対にそれだけは避けなくては。

しかし、天坂に虎杖のような高潔な思考は存在しない。無理に取り繕ったところであのアウトレイジのような見た目の学長にはすぐ見破られるだろう。

かと言って馬鹿正直に「虎杖くんの苦しむ姿が死ぬほど好きなので一緒にいたいです

！」とか口走ろうものなら仙台に着払いで送り返されること必定である。

どうしよう、これ詰みでは？

「なんだ、貴様が頭ではないのか」

唐突に低い声が響いた。虎杖の頬がぐぱり、と裂けてもう一つ口が現れる。

「力以外の序列はつまらん」

すぐさま虎杖が頬を押さえて黙らせる。

「悪い、たまにこうやって出てくんだ」

「愉快な体になったねえ」

「キモい腹話術みたいだな」

「ひつで！そこまで言うか!?!」

今度は押さえていた手の甲に口が現れる。なんとというか、器用なものだ。

「貴様には借りがあるからな。小僧の体をモノにしたらまずは貴様から殺してやろう。」

その次はお前だ、ガキ」

「え、俺？」

まさか宿儺に指名されると思わなかった。ラスボス級の呪霊に殺害宣言されるのは中々すごいことではないだろうか。

「小僧はお前のごとがたいそう大事なようだからなあ。一等惨く殺してやる」

「なっ……」

天坂は想像する。

宿讎なら自分を殺した後、それを見せつけるため絶対に虎杖に代わるだろう。無惨な死体となり果てた自分を見て目から光が消え、涙する虎杖。

良い。全然良い。アリ寄りのアリ。

「させねえ」

虎杖が手の甲に思い切り拳を打ち付けた。目の奥が怒りに燃えている。

「そんなこと絶対させないからな」

その様子を見ていた五条は笑う。

虎杖は他者のために本気で怒り、それを自身のエネルギーに変えるタイプだ。天坂という存在がいれば彼はこれから強くなるだろう。

隣の天坂をちらりと伺うと何かを堪えているような表情をしている。

まあ、守られてばかりというのは歯痒いのだろう。彼にも悠仁と同じくらい強くなつてもらわなくては。

五条が今後の教育方針を固めている間、当の天坂はというと。

あー、その正義感に満ちた主人公然とした表情とても良いです。その顔が苦痛と絶望

に歪む瞬間がたまらんです。

碌でもない思考が漏れないように唇を噛んでいた。

「じゃ、最初は悠仁からね。快里はちよつと外で待ってて」

「はい。悠仁、頑張れよ」

「もちのロン！」

虎杖とハイタッチして、建物の中に入っていく二人を見送る。

さて、二人が戻るまでになんとか看破されない入学動機言を考訳えなくては。

虎杖は河童に似たキモ可愛い呪骸に殴打され、床に転がった。

呪骸は呪いが込められた人形だ。いくらこちらが殴ろうと痛みで怯むということがない。

『俺はとにかく人を助けたい。そういう遺言なんで。後、守んなきゃいけない奴親友がいるんす』

そんな虎杖の入学動機に夜蛾はあっさりと不合格を叩きつけた。

家族も、親友も、他人の内。呪術師を続けるならある種の利己的なモチベーションが必要になる。それこそ、死刑を先延ばしにしたいといったような己のためのモチベーションが。

夜蛾は問う。

「もし、親友が己と袂を分かつことになつたらどうする」

「は？ そんなこと」

「ないとは言い切れないだろう。呪術師は己の精神との戦いでもある。親友が自身の望まない道に進んだとき、君は『今まで守ってやったのに』と親友に対価を求めるのか」

「……アンタ嫌なこと言うなあ」

「気付きを与えるのが教育というものだ」

壁に背を預けた五条は何も言わずに成り行きを見守っている。

虎杖は河童に打撃を打ち込みながら思考する。

そんなこと考えたこともなかった。天坂が隣にいることは呼吸をするのと同じように当たり前で、年を食つても、どちらかが結婚しても、それだけは変わらないと思つていた。

将来、天坂が自分を必要としなくなつたら。もう会うことすら無くなるのだとした

ら。

「考えを改めなければ大好きな祖父や親友を呪うこともあり得るんだぞ。今一度問おう。君は呪術高専に何をしに来た」

河童が強烈な拳を振り下ろさんと跳躍する。

虎杖は腰を落とし、両腕を広げた。拳が頬をかすめる。抱え込むように呪骸の体を振りじり、締め上げる。

「あいつを、快里を守るのは俺のためだ」

自分はまだ天坂がいないと立っていられない。

将来のことなど今は分からない。夜蛾の言うとおり、いつかまったく別の道に進む時が来るかもしれない。

だから、強くなりたい。天坂に寄り掛からなくても一人で立っていられるように。全てをひつくるめて天坂を守り、受け止められるように。来るべき別れの時に、彼のせいにならないためにも。

「爺ちゃんに、快里あいつに恥じるような生き方はしたくない」

夜蛾がわずかに微笑んだ。

「悟、もう一人を連れて来い。寮の案内と諸々の警備セキュリティの説明はその後だ」

「はいはい」

虎杖に手を差し伸べる。

「君は合格だ。ようこそ、呪術高専へ」

その手を取ろうとした瞬間、術式の解かれていない河童にぶん殴られて虎杖はまた床に転がった。

「お、お疲れ。どうだった？」

「合格！」

天坂に笑顔とVサインを見せる。今度はハイタッチではなく拳をぶつける。

「喜ぶのはまだ早いよ。快里が合格できるかどうかはまだ分かんないんだから」

「快里なら大丈夫だよ。な！」

「まあ、全力は尽くすよ」

これからは賭けだ。苦肉ではあるが一応言い訳は考えたし、自分の『術式の発動条件』も揃えた。後は、言葉選びと天坂の表情筋にかかっている。

せつかくここまで来たのだ。易々とこの地獄美味しい展開を手放してなるものか。

扉を開けた五条が口を開く。

「快里はさ、悠仁が自分と全然違う道に進むってなったらどうする？」

「え？うーん、そりゃ進路とか就職とかそういうので疎遠になることはあると思いますけど……」

数秒目を伏せてから、天坂は五条を見上げる。

「結局は他人だから、あいつの考えを全部理解するなんて土台無理な話です。でも、悠仁が望む限りは隣にしようってだけです」

目隠しをした五条の表情は読めない。ただ、短く「そっか」と呟いた。

4. 権謀術数

こっわ。

目の前に立つ高専学長は明らかに堅気ではない雰囲気をもとっている。

呪術師という職がそもそも堅気ではないという話ではあるが、夜蛾の放つ威圧感はどうちかというところのつく自由業のそれだ。

夜蛾が組長だとしたら、サングラスフォームの五条はヤンチャしまくりな若頭だろうか。

猪野といい夏油といい、なんで高専関係者は揃いも揃って深夜のドンキにいな風貌なのか。

「君か、二人目は」

「天坂快里です。よろしくお願いします」

「何しに来た」

ノータイムで問いを投げかけられる。本当にその筋の人に詰められている気分だ。落ち着け、しくじれば終わる。

大きく息を吸って、真つ直ぐに夜蛾を見る。

「俺は、虎杖悠仁の行く末を見届けに来ました」

「……何？」

眉間のシワが深くなる。大丈夫、想定範囲内だ。

無理に取り繕って嘘を吐き通そうとすればいざれどこかでボロが出る。だから、天坂のやるべきことはバレない嘘を吐くことではない。

伝えるべき情報を取捨選択し、言葉を言い換え、よりそれらしく聞こえるように工夫することだ。

「俺は生まれた時から呪いが見えてました。でも、憑りつかれた人がいても見て見ぬふりを通してきました。周りから、社会から排斥されるのが怖かった」

嘘ではない。虎杖にも呪いが見えることは黙っていた。

「でも、こんな俺を悠仁は救ってくれた。そんな奴が死刑だなんて理解はできても納得はできない。だから、俺も悠仁と一緒に戦います」

「つまり、親友のために命を懸ける、と？」

「そうです」

正確には「親友の（曇らせ）のために命を懸ける」だが。

のそりと一つ目の猫に似た呪骸が起き上がる。なにあれあんま可愛くない。

「不合格だ」

ですよねー。知ってた。

すぐさまポケットに忍ばせていたものを取り出す。天坂には虎杖のような天性のフィジカルは無い。

だから、天坂は呪いに対して『二人がかり』で立ち向かうのだ。

取り出したのは手鏡。鏡面に掌を付け、ゆつくりと引き出す。鏡からもう一人の天坂が這い出した。

夜蛾が片眉を上げる。

『俺が学長に合格って言われるまで』だ。いいな?」

「分かった」

自分と全く同じ声が応える。

始めにこうして約束を設けないとこのもう一人の自分は平然と『天坂快里』本人として生活し始めてしまう。言葉による制限は必須だ。

「鏡を触媒とした分身、いや意思を持つ模倣コピの召喚か。独学にしては良くできている」

「ありがとうございます」

「だが、それとこれとは話が別だ」

足元に寄ってきた猫のアップパーを間髪で避ける。顎に拳がかすった。人形に出せ

る威力じゃないだろう。

「彼の行く末を見届けて、その後はどうする。死刑が執行されようがされまいが君には何も残らん」

「そんなこと分かってます、よー!」

模倣が猫を捉えようと手を伸ばすがするりと躲され、脇腹に蹴りをくらった。天坂が負けじとサッカーの要領で猫を蹴り上げる。距離は取れたが猫は平然と跳ねまわっている。

「実の親からも『おかしい』だなんて言われてた俺には最初から手元にあるものなんてたかが知れてる。友達を手放したくないのなんて当たり前だ」

親におかしいと言われたのは事実だが、実際の内容はそんな重いものではない。

あれは天坂が小一の時だ。思い切って両親にオバケが見えると打ち明けた。

『お? そうなのか。ママどうしよう、快里は早くも中二病みたいだぞ』

『この子がおかしいのなんて今更でしょう。前からウルトラマンとか戦隊モノの前半のやられるパートばかり繰り返し見ながらブツブツ言ってたんだし』

『え、なにそれ知らないんだけど。快里、その歳でよく分らん方向に拗らせちゃうと後が大変だぞー』

ええいやかましいわ。特撮のやられパートからしか摂取できない栄養があんだよ。

天坂は記憶を取り戻す前から既にそちら側であった。

小一相手にあんまりな物言いだと思つたが、その後「困つたことがあつたらちゃんと言いなさい。あとあんまり外で言つちやだめよ」とフォローを入れるくらいには優しい両親だった。

別に親と険悪だなんて言つてないのでセーフだろう。多分。知らんけど。

猫の頭突きが腹にめり込んだ。えづきそうになるのを耐えて呪骸の頭をホールドする。暴れ出す前に模倣コピイが体の方を押さえ込む。

「俺は悠仁に（苦しみながら）生きていて欲しい。あいつの（曇らせを見る）ためなら何だつてやる。これからもあいつが望む限りは（良質な曇らせ展開のために）一緒にいたい」

括弧内はあくまで言葉に詰まらないように頭の中だけで補完する。

猫の頭をより強く押さえ込む。

「それが俺の存在意義なんです」

夜蛾の深いため息が聞こえた。

「まったく、お前が連れてくるのは問題児ばかりだな。悟」

「僕のせいじゃないもん」

28歳の成人男性で語尾に「もん」なんて付けて許されるのはこの人くらいじゃない

か。転生前の天坂がやったら絶対同部署の女性陣から死ぬほどいじられて一ヶ月はネタにされる。

「天坂、一つだけ質問がある」

「はい」

「君は虎杖の尊厳のために、虎杖を殺せるか」

一瞬場が静まる。呪骸の拘束を緩めずに答える。

「時と場合によります。でも、あいつの（曇らせの）ためにも可能な限り生きる道を探し（てから俺が先に死に）ます」

「そうか」

顔の怖さは変わらないが、言葉に先ほどまでの威圧感がなくなっていた。腕の中で身をよじっていた呪骸の動きが止まる。

「悟、虎杖と一緒に寮を案内してやれ」

「…ということとは」

「合格だ、危ういがな」

その言葉と共にもう一人の天坂は揺らぎ鏡に吸い込まれていった。ホツとして肩から力が抜ける。どうやら最悪のルートは避けられたようだ。

「歓迎しよう。ようこそ、呪術高専へ」

差し出された手を握り返す。楽しい日々がようやく始まる。

「快里！俺の部屋すげー広い！」

「間取りは俺のと変わんないのか…、グラビアのポスター貼るの早くね？」

「染谷有香の新作！」

「相変わらず長身の子好きだな」

五条に引率されて寮へとやって来た。天坂には虎杖の一つ奥の部屋が割り当てられた。

「二、三年生は今出払ってるけど、人数少ないからすぐ会えると思うよ」

「後で伏黒も呼んでスマブラやろうぜ」

「やろうぜってゲーム機持ってるの俺なんだけど」

話しながら廊下へ出ると、ちょうど伏黒がいた。以前の怪我はすっかり治っている。

「なんでコイツらが隣なんですか」

「賑やかなほうが楽しいじゃん？」

「授業と任務で充分です」

「まーそう言うなよ伏黒。後でスマブラ対戦しよう！」

「断る」

「だからゲーム持つてんの俺…」

誰がどのキャラを使うかの論争に発展しかけたあたりで五条が両手を叩く。

「ハイハイ静かにー。明日はお出かけなんだからあんま夜更かししちやダメだよ」

「おでかけ？」

「そつ、四人目の一年生を迎えにね」

結局、伏黒にはスマブラ参戦を拒否られ、天坂の部屋で二人でコントローラーを握っていた。

復帰しかけた虎杖のマリオを天坂のピチューが叩き落とす。

「あー！今のずっこい！」

「悠仁」

「何?!次俺しずえだかな!。パクんなよ!」

「パクらねえよ。そうじゃなくてさ、悪かったな」

「何が？」

「呪い見えるの黙ってたの。オカ研の先輩たちのことも」

一瞬キョトンとした虎杖は視線をコントローラーに落としたまま微笑む。

「いいよ。元はと言えば俺が原因だし。俺こそ快里に怪我させちまったし」

色素の薄い鳶色の瞳が天坂を映す。

虎杖が向ける表情は信頼と友愛に満ちている。

「何があっても俺は快里を信じてるからさ」

天坂の背筋をゾワリと背徳感とも罪悪感ともつかない感触が撫でていく。

ああ、この眩いまでの輝きがひび割れる瞬間が待ち遠しくてたまらない。

夜は静かに更けていく。

5. 形代変転

「釘崎野薔薇。喜べ男子ども、紅一点よ」

尊大な態度で自己紹介をした野薔薇は同級生となる男子三人を見回す。

「俺、虎杖悠仁。仙台から」

「伏黒恵」

「天坂快里。俺も仙台出身。よろしく」

野薔薇はじとーつとした視線で三人を観察する。

ガキの頃にハナクソ食ってそうな芋臭い奴とカモメに火をつけてそんな仏頂面の奴。そして、先ほどから野薔薇をじつと見つめてくる奴。何だこいつ。

見た目は人畜無害そうだが、なんだか気に入らない。こちらに向けられる視線は変に野薔薇の警戒心を刺激してくるのだ。

「おいオマエ。なにジロジロ見てんだよ。ヤらしい目で見てんなら承知しねえぞ」

「え？ いや、可愛いなって思ってる」

「…ふーん、田舎者のくせにちよつとは見る目あんじやない」

「釘崎も地民じゃん」

警戒心よりも褒められた優越感が勝ち、ふんぞり返る。最後の虎杖のツツコミは無視された。

「……虎杖、天坂つてああいう感じか？」

「快里はわりとああいうところあるよ」

ひそひそ話している伏黒と虎杖をよそに天坂は一人テンションが上がっていた。

やば、生野薔薇ちゃんめっちゃ可愛いな。

釘崎野薔薇はどこまでも気高く強い女性だ。自分を肯定し、戦うことを厭わず、仲間のために涙を流せる女の子。

なにより最高なのが彼女の存在がこれから起こる悲劇でかなり重要な位置を占めるということ。呪いの言葉を残すことはなかったが、彼女が倒れたことが虎杖の心に深刻なダメージを与えることを天坂は知っている。

惜しむらくは高潔すぎて彼女自身にあまり曇る要素がないことだろうか。

おっぱいのついたイケメンとはよく言ったものである。

「で、これからどこ行くんですか」

「よく聞いてくれた、快里。ようやく一年生全員が揃い、しかも四分の三はおのぼりさんときた」

目隠しで見えないはずの五条の目が煌めいた気がした。

「行くでしょ、東京観光」

虎杖と釘崎が分かりやすく顔を輝かせる。

やれTDLだの中華街だの論争を繰り広げているのを伏黒と天坂は一步引いて見ていた。

「お前は加わらなくていいのか」

「いや、うんまあ…」

加わるも何も前世では東京在住だった。正直東京の思い出は通勤ラッシュやよく分からないアンケートや糞煮込みの職場の記憶の方が色濃くて素直に喜べない。

アキバなら行きたい。青い看板のアニメショップとかメロンな本屋とか。

残念ながら今は高校生のためアレソレ的な薄い本やゲームは買えない。ニトロなんかやらやくロックなんちゃらにも手が出せない。年齢制限は守らなくては。エロとリヨナと曇らせにおいては真摯でいたい。

そこまで考えて、気が付いた。

ここ呪術廻戦の世界なんだから呪術の薄い本とか無くない？

マジで無いの？四枝欠損とかえぐい曇らせ本とかも無いの？

まさか転生先でこんなジレンマに突き当たるとは思ってたなかった。

一人だけ見当違いな方向で落ち込んでいる天坂を置いて、五条は行き先を発表した。

「?つきー!」

虎杖と釘崎の悲痛な絶叫が響いた。

目の前にそびえ立つのは明らかに呪いの気配を放っている廃ビル。裏手にある墓地とのダブルパンチで呪いが発生したらしい。

呪いは人の負の感情から発生する。それはもちろん場所から連想される恐怖も例外ではない。

「野薔薇と悠仁は呪いを祓ってきて。ま、実地試験みたいなもんだと思ってよ」

「あれ? 快里は?」

「そうよ。こいつも新入生なんでしょ? つか二人きりとかヤなんだけど」

「ここの呪いなら二人いれば十分だよ。さ、行った行った」

屠坐魔を手渡し、二人の背中を押す。渋々といった表情で虎杖と野薔薇は建物へ向かう。やいやい言い合いながら遠ざかっていく後ろ姿を見送ってから伏黒が口を開いた。

「…良かったんですか。天坂を行かせないで」

「俺だけハブられるのちよつと悲しいんですけど」

「いーの。今回見たいのは野薔薇の方だし。あと、快里に聞きたいこともあってね」

思わず身を固くする。どうしよう、「なんか邪な気配しかしねーからオメーやっぱク

じな！」とか言われるんだらうか。

「快里が鏡から出してた模倣コピき、あれただのコピーじゃないでしょ」

「あ、そつち？」

「逆にどつちだと思つたの」

「いやべつに」

そういえばこの人呪力がめつちやよく見える目を持つているんだつたか。六眼なら

天坂の術式なんてとつくにお見通しだつただらう。

「俺はあれを形代かたしろつて呼んでます」

天坂の術式は『形代変転かたしろへんてん』という。正式名称ではない。天坂がそれっぽく適当に名付

けたのだ。

鏡を媒介としてもう一人の自分を呼び出す、ただそれだけ。だが、分身とは異なる。

形代とは本来人型を模した紙の神具を指す言葉だ。人の霊や魂を宿すものであり、自分の身代わりとしてそれに穢れを移して焚き上げること己を祓い清める。

天坂が呼び出すもう一人の自分は正真正銘『天坂快里』本人だ。呼び出した瞬間を起

点として同一の記憶、思考、人格を有する。しかし、それはあくまでその時点までの話であり、そこから誰と関わりどういった生を歩むかは本体である天坂にも分からない。早い話がドツペルゲンガーである。

だからこそ、呼び出したときに言葉による縛りを課さなければならぬ。適当に放置したが最後、いつの間にか借金していたり人を殺していたりなんてことにもなりかねない。

もちろん実体なので殺されたら死体が残るし、リアルタイムでの記憶の共有なんて便利な機能も無い。

唯一記憶を共有できるタイミングは形代が鏡に戻るもしくは死んだ場合だが、あまりやったことはない。自分のものではない自分の記憶が流れ込んでくるのは中々混乱するのだ。

しかし、最近はこの記憶共有が有益だと考えを改めている。自分本体がいなくて形代がいれば離れた場所でも虎杖の曇らせ展開を見逃さずに済む。

「もう一人の自分って、可能なのかそんなこと」

「実際にできてるからな。俺もメカニズムはよく分かかってない」

「形代身代わりか、言িয়েて妙だね。で、それだけ？」

「…それだけです」

「あはは、嘘が下手だなー」

「先生相手でもほいほい開示しない方が良いでしょう」

「うんうん、その用心深さは良いと思うよ」

笑っている五条に冷や汗が滲む。一体どこまで見えてるんだこの人。

そのとき、ビルの上の階から何かが飛び出してきた。恐らくこの廃ビルに寄生していた呪霊だろう。

「祓います」

「待って」

構える伏黒を五条が制する。呪霊の体から棘が飛び出し、断末魔を上げながら墜落していく。

「良かった。野薔薇もちゃんとイカれてたね」

「見たいつてそういうことですか」

「そ。ある程度イカれてないと呪いへの嫌悪や恐怖に耐えられないからね。恵はそういう呪術師見てきたでしょ」

「じゃあ、やっぱ俺も行った方が良かったんじゃ」

「悠仁と快里がイカれてるのは分かってたから問題ナツシング」

「え、悠仁はともかく俺はそこまでじゃないですよ」

「……普通の人間は親友と一緒に死刑にしてくださいとか言わないと思うよ？」

「…伏黒はどう思う？」

「…自覚無いのは割とヤバいと思う」

「うっそマジで？」

「マジ」

伏黒にそこまで言われるのはちよつとショックだった。特級呪物丸呑みにしたやつと同列ですかそうですか。

というかこの中で一番イカれてるのは間違いない五条だろう。何しれつと「お前の方がヤバイ」みたいな顔してるんだ。

凹んでいると虎杖と釘崎が子供を抱えて戻ってきた。まだやいやいやい合っているが先ほどより二人の空気は柔らかいものになっている。青春だ、と思春期に女子とのキヤツキヤウフフな経験がない天坂はちよつと遠い目になる。分かりにくいだけで杖はモテるのだ。小沢が良い例である。

元気にビフテキと寿司を五条にせがんでいる二人を見る。

これで役者は揃った。あとはただ進むのみ。

6. 呪胎戴天

雨が降っている日だった。

少年院にて特級相当とされる呪胎の目撃情報が入ったことで、高専一年生の四人に取り残された在院者の救助要請が回ってきた。

院内は既に生得領域と化していた。伏黒の玉犬の先導で見つけたのはあまりにも惨い死体。三人の内人の形を残していたのは一人だけだった。他二人は人体を無理やり折り曲げこねくり回したような球状になっていた。

虎杖が上半身のみになった死体に近づく。書かれていた名前は『岡崎正』。建物に入る前、母親らしき女性が涙を流しながら呼んでいた名前だ。

「持って帰る」

虎杖の提言を退けたのは伏黒だった。

事前に開示された情報によれば岡崎正は二回目の無免許運転で下校中の女兒をはねている。伏黒はそんな人間を救う気は毛頭なかった。

「オマエは自分が助けた人間が将来人を殺したらどうする」

「じゃあ、なんで俺のことは助けたんだよ！」

虎杖の問いに伏黒は答ええない。ただ無言で虎杖を睨みつけている。

「悠仁、やめろ」

「だって…」

「正直、俺も遺体を持っていくのには賛成できない。仮に特級呪霊と出くわした場合、重い死体を背負ったまま戦うなんて無理だ」

「そんなの俺なら…」

「ここにいるのは悠仁だけじゃない。俺たちが最優先にすべきは生存者を探すことと、ここから生きて出ることだ」

虎杖は唇をかみしめる。遺族は遺体を一目見る事も叶わないのか。

「おい、いつまでくつちゃってんのよ。今は言い合っている場合じゃない」

釘崎の言葉が不自然に途切れる。音もなく彼女の体が地面に吸い込まれていった。玉犬は反応していないはずなのに。

周囲を見回すと首だけになった玉犬が壁にめり込んでいた。

「虎杖、天坂！逃げるぞ！釘崎を探すのは…」

最後まで言葉を続けられなかった。

視線。全身から冷や汗が吹き出すほどのプレッシャー。間違いなく観測された特級

呪霊だ。

動けない。

虎杖の脳裏に祖父の遺言がよぎる。

「うあ、あああ!!」

絶叫しながら屠坐魔を振りぬいた。はずだった。

虎杖の左手首から先が消失している。夥しい量の血液を滴らせる断面を呆然と見つめる。背後で屠坐魔の柄を握りしめたままの左手が転がった。

激痛が遅れてやってくる。脂汗が額から伝う。辛うじて悲鳴はかみ殺した。

呪霊はゆらゆらと体を揺らしながらこちらを見ている。

「協力しろ！宿儺！」

この窮地を乗り切る手札を虎杖は一つしか持っていないなかった。

このまま虎杖が死ねば中にいる宿儺も諸共に消える。ここまで呪霊に近付かれた以上戦闘は避けられない。なら、もうこの体内の呪物に頼るしかない。

「断る」

裂けた頬に現れた口は素っ気ない返事をする。

「腹立たしいがこの体の支配者はオマエだ。代わりたければ代われ。だがその時はそこにいる呪霊より先に天坂^{ガキ}と伏黒^{ドモ}を殺す。次はあの活きの良さそうな女^{紅緒}だ」

「そんなことさせるわけねえだろ」

「だろうな。しかし俺にはかり構っていると仲間が死ぬぞ」

嘲りを含んだ宿儺の声。

呪霊の口から吐き出された呪力がコンクリの地面を抉る。

「伏黒！快里！釘崎連れてここから逃げろ！」

「悠仁、何言ってるんだよ」

「コイツずっと笑ってやがる。俺らのこと完全に舐めてんだよ。多分時間稼ぎくらいなら一人で何とかなる。出たら何でもいいから合図をくれ、そうしたら宿儺に代わる」

「駄目だ……！」

「伏黒……！」

言葉を遮る。より多く生きて帰るにはこの方法しか思い浮かばなかった。

「頼む」

伏黒は悔しそうに歯噛みしている。

「カッコつけんな馬鹿」

軽く頭をはたかれた。天坂は手鏡を取り出し、形代を呼び出す。

「『伏黒と釘崎がここから出るまで』だ。いいな？」

「天坂……、なにを」

「俺の代わりにこいつを連れてつてくれ。足手まといかもしれないけど、いざという時の盾くらいにはなる」

「快里…」

天坂は微笑む。自分たちと同様に恐怖に顔を強張らせながら、それでも安心させるように笑っている。

「一人で、なんて水臭いだろ」

そんな顔をされたら、「逃げてくれ」なんて言えなくなってしまう。

遠ざかっていく伏黒の足音を聞きながら特級呪霊に向き直る。気味悪くニヤニヤと嗤うそいつは自分たちの存在など歯牙にもかけていない。付け入る隙があったらそこしかない。

「やるぞ、快里」

「おう」

天坂とともに、生きて帰る。

うまいこと死ねないものだろうか。

特級呪霊に虎杖と攻撃を続けながら天坂はそんなことを考えていた。

この呪霊が本気を出せば自分など一瞬で塵にできるだろう。それではだめだ。死に方としては悪くないが、即死してしまつたら遺言どころか虎杖の顔を見る暇すらない。それじゃあここに残つた意味がない。理想的なのは遺言を残しつつも目を閉じたらすぐ逝けるような、そんな良い感じの塩梅だ。

こう、なんとかして八分殺しくらいで留めてほしい。

呪霊が腕をクロスさせる。呪力のバリアのモーシヨン。

天坂は咄嗟に両腕を突き出した。強烈な力に押される。腕に呪力を集中させるが中和が間に合わない。

手の皮が剥がれ、爪が吹き飛ばされていく。激痛に顔が歪む。

持ちこたえられたのは数秒だけだった。足が宙に浮く。

「快里！」

虎杖に抱き止められたが勢いを殺しきれず一緒に壁に叩きつけられた。衝撃に呼吸が止まる。

視線を上げれば既に呪霊が目の前で拳を構えていた。避けることもできず、まともに腹に食らう。背後の壁を突き破り、虎杖と天坂は地面に転がった。

「あ、げほ」

天坂は今の一撃で内臓をやられたのか、体を折り曲げて血を吐いている。再び呪霊が腕をクロスさせる。すぐさま虎杖は立ち上がり先ほどの天坂がやったように両腕を前に出す。しかし、虎杖にはまだ呪力の操作などできない。

見る見るうちに指先が焼き切れ、削れていく。今まで経験したことのない痛みには涙が出る。

脳内を後悔が埋め尽くしていく。

あの時指なんて拾わなければ、食わなければ、こんなに痛くて辛い思いをすることもなかった。変わらず天坂と平穏な日々を過ごしていたはずだった。

辛い。怖い。痛い。

考えるなど自分に言い聞かせるほどに悔恨が募っていく。祖父の遺言が恐怖に塗りつぶされていく。

逃げたい。逃げられない。今立ち向かうことを辞めたら後ろにいる天坂は確実に死ぬ。そんなことできるわけがない。

例え逃げたとしてもここで天坂を見殺しにしたら、虎杖はきつと一生自分を許せない。

ここで死ぬのは『正しい死』ではない。

「あ、あ、ああ!!」

吠えて己を奮い立たせる。それでも現実は無情だった。

衝撃波に押し負け、天坂を巻き込みながら吹き飛ばされた。

ああ、自分はこんなにも弱かったのか。

天坂は数秒意識が途切れていた。

体が痛みに軋む。呪霊のボディーパーローで恐らく内臓を損傷している。激痛に耐えながら体を起こすと虎杖が血まみれで立っていた。

足が震えている。

「…悠仁」

「快里、俺自惚れてたんだ。自分の死に様くらい自分で選べると思ってた」

でも違った。

欠けた指が、腕が、逃れようもない己の弱さを突きつけてくる。無力感と絶望感から涙が溢れてくる。

何が強くなるだ。何が守るだ。今もこうして立っているだけでやつのくせに。

それでも、天坂を守るにはここから踏み出さなくてはならない。その一歩が信じられないほどに重い。どうしようもなく恐ろしい。

死にたくない。

「死にたくないよな」

その言葉に体が震えた。ふらつきながら立ち上がった天坂が虎杖の肩を優しく叩く。

「いいよ。そんなの当然で、皆一緒だ」

口から血を流しながら天坂は虎杖に笑いかける。そのまま呪霊へと一步を踏み出す。そこで虎杖は彼が何をしようとしているか理解した。顔から血の気が引く。引き止めたいのに足が動かない。

なぜ、そんなにも簡単に恐怖を踏み越えられるんだ。

「だめだ、快里。それはだめだ」

「正しい死じゃないからか？俺はそう思わない」

爪が剥がれ、肉が抉れた手で拳を握る。

「ここでお前のために死ぬるなら、それは俺にとつて正しいんだ」

迷いなく呪霊へと向かっていく。呪力を込めた攻撃は嘲笑と共に躲される。ケタケタと笑いながら呪霊は天坂の左腕を指で弾いた。音を立ててあらゆる方向に折れ曲がる。

天坂の口から悲鳴に似た呻きが漏れる。

やめろ、やめてくれ。

耳を塞ぎたかった。目を覆いたかった。どうして、そこまでして。

血にまみれながら、天坂が目だけをこちらに向ける。

「悠仁、生きろよ」

鼓膜を震わせる声。人生のほとんどもこの声に支えられてきた。

それなら、自分が動かない訳にはいかないじゃないか。

喪いたくないなら、恐怖を言い訳にするな。

足の震えは止まってない。それでも踏み出して地に崩れ落ちた天坂の前に立つ。

真つすぐに呪霊を睨む。

「…俺は、ここで死ぬのが正しいとは思えない」

でも、それ以上にこのまま生き残る事が正しいと思えない。

この後悔も、恐怖も、怒りも全て拳に乗せる。

怯えた顔も恐怖に歪んだ表情もかなり堪能できた。でも、まだ足りない。

天坂はほくそ笑む。背徳感が背筋を震わせる。

そうだ、お前なら立ち上がってくれと信じていた。だって、お前は『虎杖悠仁』だから。

自分が傷つくのは厭わないが、他者の犠牲をよしとしないことを知っている。だからこそ、天坂は前に出た。そうすれば必ず虎杖は己を鼓舞して進もうと藻掻く。

間違いなく美德だ。賞賛されていい。

その崇高なまでの献身が、跡形もなくへし折れる瞬間が見られるなら何でもしよう。虎杖と自分の力でこの特級呪霊を倒せるだなんて一ミリも思っていない。気持ちが高まることで強敵に勝てるなら誰も苦勞しないだろう。

希望を抱いた時こそ、絶望はより色濃く影を落とす。今がまさにそれだ。

虎杖は腰を落として、呪力を込めた拳を放つ。

全身全霊を賭した一撃は、呪霊の体を傷つけることすら叶わずあつさりを受け止められた。

虎杖の顔が絶望に染まる。死力を尽くした攻撃ですら届かない。

これでいい。

後はこのまま惨く死ねれば尚いい。

そんな思考は聞こえてきた遠吠えによって中断される。

伏黒の合図だ。

「つくづく忌々しい小僧だ」

7. 熱願冷諦

虎杖のものではない低い声。体に浮かび上がる紋様。以前は気絶していたからこうしてちゃんと見るのは初めてだ。

両面宿儺。呪いの王。

天坂の全身から血の気が引くような底冷えする恐怖心が沸き上がる。ただ目の前にいるというだけでここまで死を予感させるのか。

虎杖と同一の顔なのに、抑えきれない邪悪さが滲み出ている。

二対の目が天坂に向けられる。

「さて、以前宣言した通りにオマエから殺してやろう」

「…そう言ってくれるのを待ってたよ」

そう、待っていた。

宿儺に殺害宣言をされた時から考えていた。天坂の理想は虎杖の前で死ぬこと。そして、それを簡単に叶えてくれる存在がすぐ近くにいるじゃないか。

次に目を開けた時、目の前にもう助けようのない親友がいたら。それが己の手で為さ

れたことだと知ったら。

想像するだけでどうしようもなく心が湧きたってしまふ。

呪霊に殺されてもよかったが、どうせなら虎杖の手で死にたい。

「あ?」

天坂の言葉に宿儺は眉を寄せる。

今まで宿儺に殺すと言われ、怯えなかった人間はいない。

ある者は泣きながら額を地に擦って命乞いをし、ある者は青い顔で宿儺を褒め称え見逃してもらおうと足掻き、またある者は恐怖から発狂して己の舌を噛み千切った。

だというのに、何だこいつは。怯えているくせに声には隠しきれないほどの喜色が滲んでいる。

予想外すぎる反応に宿儺は微妙に困惑していた。

そんな宿儺を置き去りにして天坂は語り出す。

「まず顔は残しておいてほしいんだ。パツと見で俺って分かった方が絵面的により悲惨というか凄惨さがあるし。あ、でもその呪霊がやったみたい辛い人間って分かるけど原型ほぼないくらいの方が尊厳破壊っぽくて良いかもしれない。燃えカスだけになるのはなあ、生きてるか死んでるか分かりにくいからやっぱり多少なりとも体は残しておいてほしいな。こう、首だけ残つてるとかでも良いんだけど…。あ、それだと遺

言残せないな。やっぱやるなら四肢を挽ぐくらいで」

「キツツツシヨ」

宿儺の心からの言葉だった。

マジでなんなんだこいつ。ここまで己の死に様について嬉々としながら注文を付けてくる奴を千年生きてきて初めて見た。凶々しいにも程があるだろう。

宿儺の後ろにいる特級呪霊も、先ほどまであんなにも真剣な面持ちで交戦していた相手の豹変に戸惑っている。

「あ、あとギリギリ俺が死んでないくらいで悠仁と代わってほしいんだけど」

「まだ言うか」

「一等惨く殺すって言ったのはそっちだろ」

「誰も希望の死に方をさせてやるなど言っていないわ。貴様頭に蛆でも湧いているのか」

「失礼な。こっちは大真面目に言ってるんだぞ」

真顔の天坂を見て宿儺は頭が痛くなってきた。ただのお人好しな有象無象かと思いきや、とんだ狂人を相手にしていたらしい。

「なぜそんなに死にたがる？ただ死にたいだけならさっさと飛び降りるなんなりすれば良からう」

当然の疑問だった。先の戦闘でも抗わずに攻撃を受け入れれば済む話だ。死に方に

固執するのもよく分からない。

「俺は別に理由もなく死にたい訳じゃない。悠仁の前で、悠仁に言葉を残して死にたいんだ」

「なぜそこまでしてこの小僧に拘る」

「そりゃ、だって」

天坂はどす黒く濁った瞳で、心から楽しそうに笑う。

「悠仁の苦しむ顔って最高だろ？」

呼吸を妨げる臓腑の激痛も折れた腕の痛みもかすむほどの期待に身を震わせる。

「俺は悠仁の傷トラウマになって死にたいんだ」

「……」

四つの赤い目が天坂を睥睨する。

この男は狂っている。

ひたすらに虎杖の心を削ることのために自身の存在を利用している。言葉も、行動も、心を通わせることですら、ただただ虎杖を苦しめるための布石にすぎないのだろう。

しかも、動機は憎しみでも殺意でもなく、ただの好意ときた。他者を憎み殺す呪霊よりもタチが悪い。

「もういい、止めだ」

「あ、おい。どこ行くんだよ」

「もう一人のガキのところに決まっている。今俺がわざわざお前の望み通りに殺してやる義理はない」

命をかけて足掻く姿があつてこそ殺戮は面白いのだ。自分からはいどうぞと身を差し出してくる人間を手にかけてところで、さしたるうま味もない。

なにより殺してしまつたら天坂の思惑通りの行動になつてしまうのが最高に気に入らない。

「それに、オマエはまだその段階にすら立つていない」

この男を殺せば虎杖は悩み苦しむだろう。だが、時間はかかるだろうがいずれ立ち直る。他の支え伏黒や釘崎がある限り、完全に折れることはない。

しかし、この先その全てを失い、支えが天坂だけになるときが来たならば。その瞬間にはわずかだが興味が湧く。

「次に俺がこの体の支配権を得たとき。もし、まだお前が生きていたならば」
赤い目が愉悅に歪む。

「その時は、お前の望むように殺してやろう」

「……それは約束か？」

「いや、ただの気まぐれだ」

「そうか。それで充分だ」

欠けていた虎杖の指先が再生する。動けずにいた特級呪霊を呼びつける。

「行くぞ、ついて来い」

だが、特級呪霊は宿儺の背中へと呪力の塊をうち放つ。盛大な舌打ちと共に宿儺が左腕を振るった。欠損していた腕が再生し、人間が受ければまず助からない威力のそれを膂力だけであつさりとは弾き飛ばす。

「おい、オマエの目玉は節穴か？それとも今の俺の機嫌を察することもできないほどに愚鈍なのか？」

宿儺の体から押し潰されそうなほどの威圧感が発せられる。煌々と光る赤い目には一切の温度を感じられない。

瞬きの間に宿儺は特級呪霊の前へと移動する。

「ならここぞ死ぬ」

呪霊の体が地面に叩きつけられた。更に振り下ろされた足が呪霊ごとコンクリの橋を踏み割り、宿儺は呪霊と一緒に領域の底へと落ちていった。

「いや、置いてけぼりかよ」

天坂のツツコミだけが虚しく響いた。

伏黒が虎杖を助けたことに明確な理屈などない。

この世界では不平等な理不尽だけが全ての人間に平等に与えられる。伏黒の姉も虎杖もそんな理不尽を押し付けられた側だ。他者の幸福を心から願える人がどうして呪われなくてはならない。他者を守るために命を張れる善人がどうして死ななくてはならない。

そんなこと、納得できるわけがない。

だからこそ、伏黒は不平等に人を助ける。

少しでも多くの善人が幸せを享受できるように。少しでも理不尽から遠ざけることができるように。

虎杖を生かすことに迷いはあつた。それでも伏黒は己の選択を後悔していない。

「俺は正義の味方じゃ^コない。呪術師なんだ」

構えを解いて、目の前にいる虎杖から目を離さずに言葉を紡ぐ。きつとこれが最期の対話になる。

「…そっか」

寂しように、けれど満足そうに笑う虎杖の体から紋様が消えた。

虎杖は自分の考え方を間違いだとは思わない。例え偽善と言われようと、他人を救いたいという気持ちに偽りは無い。だが、伏黒の思いにも間違いはないのだろう。

「あー、悪い。そろそろだわ」

心臓を失った空の胸腔から血が滴る。

「五条先生…は心配いらねえか。伏黒も釘崎も、長生きしろよ」

死ぬ前に伏黒の本音が聞けた。それでいい。

いや、少しだけ嘘をついた。脳裏に浮かんだのは小学生の時から変わらない笑顔。虎杖にとって絶対の味方で、これからも隣に居られるはずだった存在。

せめて死ぬ前に一目親友の顔を見たかった。

「快里のこと、頼む」

目から一筋の涙が伝う。ゆっくりと、虎杖の体が地に伏した。

天坂は全力疾走していた。

正確には損傷した内臓とその他諸々の怪我の痛みのせいで全力どころか普段の半分もスピードが出せていないのだが。今出せる全力で足を動かした。

宿儺とのやりとりの後、せっかくだから伏魔御廚子でも拝ませてもらおうかと思つたが、下手に覗き見して逆鱗に触れたら即三枚おろしだと容易に想像できたので止めておいた。

虎杖の出て来られないところで死んだら元も子もない。なにより呪いの王が気まぐれとはいえ自分の考えに興味を示してくれたのだ。それをふいにするのはあまりに勿体なさすぎる。

呪霊が死んだことで生得領域が閉じ、建物から出ること自体は簡単だった。しかし。「どこまで飛んでつてんだよ伏黒お！」

宿儺の強大な呪力を追えばどこにいるかは大体わかるが、いかんせん少年院からかなり離れた所まで吹き飛ばされていた。紙面では想像するしかなかった距離感がここまです。慢心していた過去の自分を殴りたい。

このままでは虎杖の遺言シーンに間に合わない。

「あのシーン、めっちゃ、好きなのに！」

息を切らせながら、なんならちよつと吐血しながら走った。

見覚えのあるマンションが見えてきた。記憶に間違いがなければあそこのはず。

中庭に立ち尽くす伏黒と倒れた虎杖の姿が見えた。

「悠仁！」

間に合わなかった。これ完璧に一通り終わっちゃってるじゃん。自分のオタクとしての不甲斐無さに泣きそうだった。

伏黒が悲しみに揺れる瞳でこちらを向く。あ、その表情はちよつと元気が出るかもしれない。

「天坂、その怪我……」

「俺のことは良いんだ。悠仁は」

痛みで膝が折れかけたところを伏黒に支えられる。

「虎杖にオマエのことを頼まれた」

肩を貸しながら震える声で呟いた。つまり、天坂のことを遺言で言及していたということだろうか。

なにそれめっちゃ聞きたかった。なんでそんな貴重な場面を見逃してるんだ。こんなことなら伏黒に同行させた形代への縛りを『伏黒の身の安全が確保されるまで』とか

にしておけば良かった。

あまりの後悔についに涙が出た。肩に置かれた伏黒の手に力がこもる。痛い。

「帰るぞ」

「……ああ」

あまりの悔しさに短くそう答える事しかできなかつた。

8. 肝胆相照

高専敷地内の神社に伏黒と釘崎はいた。湿気を含んだ生温い風が流れている。

「自分が死んでるくせに、長生きしろよなんて馬鹿じゃないの」

「…」

「そのうえ散々守るとか言ってた奴置いて逝ってるんじや世話ないわよ」

「…そうだな」

伏黒の頭によぎったのは虎杖の死体を前に涙していた天坂の顔。

大怪我をしていたのに、痛みで脂汗をかきながら駆け付けた先に待っていた親友の死をあいっはどう思ったのだろう。

恨み言を言われる覚悟はしていた。

帰りの車の中で天坂に虎杖の最期を伝えた。自分が何もできなかったことも包み隠さず。それでも天坂は伏黒を責めなかった。沈鬱な表情で「教えてくれてありがとう」とだけ言って、後は口を閉ざした。

「オマエは割と平気そうだな」

「当たり前でしょ。まだ会って二週間やそこらなんだし」

一瞬だけ釘崎は痛みをこらえるように口元を引き結ぶ。

「でも、天坂あいつはそうじゃない」

「…小三からつて言つてたから7、8年くらいか」

「人生の約半分よ。引きずらない方がどうかしてる」

天坂は虎杖の遺体に会いに行つてゐる。これから遺体が解剖に回されると五条から聞いていた。天坂には伝えるなど言われていたが、自室で沈んだままの状態を見てしまったら伝えるしかなかった。今頃最後の面会をしてゐるだろう。

「ほんと、似たもの同士よ。あいつら」

釘崎は唇を噛む。

救出の際に自分の代わりに呪いの攻撃を受け、傷だらけになつた天坂の形代は領域を出ると『これくらいしか役に立てなくて悪い』と申し訳なさそうに笑つて消えた。

どこまでもお人好しで、他人のことばかり優先する馬鹿二人だ。

「暑いな」

「…そうね。夏服はまだかしら」

蝉はまだ鳴いていない。

高専内にある遺体安置室で伊地知は五条に詰められていた。口調こそ普段と変わらないが明らかに苛立っている。

本来、特級呪霊案件の上に要救助者5名の任務を一年生に回すことなどありえない。五条が虎杖に実質無期限の執行猶予を与えたことに不服だった上層部が体よく始末するため派遣を根回ししたのは明白だった。

「どうせ他三人が死んでも僕に嫌がらせができて一石二鳥とか思ってたんでしょ」

「し、しかし。派遣が決定した段階では、本当に特級になるとは……」

「犯人探しも面倒だ」

五条の体から殺気が立ち上る。

「いつそのこと、上の連中全員殺してしまおうか？」

安置室の扉が開いた。目元に隈を作り、気だるげな雰囲気を漂わせている家入硝子は黒い髪を指に絡めている。

「珍しく感情的だな。随分と彼がお気に入りだったみたいだ」

「僕はいつだって生徒思いなナイスガイさ」

「なら、その生徒の我儘を聞いてやれ」

硝子に続いて入ってきた人物に五条の顔が引きつった。

「…快里」

「すみません、先生。最後に顔だけ見ておきたくて」

天坂は申し訳なさそうに頭を下げる。

五条は報告で事の顛末を聞き、あえて天坂には解剖の話をつたえなかつた。いくら呪術界のためとはいえ親友の身体が切り刻まれるだなんて言えるはずがなかつた。

なにより、親友の死に顔なんてそう何度も見たいものではない。これは天坂のためというよりは五条の経験則だ。

「恵か。なんで言っちゃうかなー」

「伏黒のこと、怒らないでやってください」

「そりゃ怒るつもりはないけどさ。言つとくけど見るのかなりキツイよ？快里の精神衛生的にもあんまりおすすめはできない」

「分かつてます。でも」

天坂は俯く。涙の跡はないが、少しやつれている。

「死に目に間に合わなかつたからせめて、と思つて」

「…困つたなあ」

そんなことを言われたら出て行けなんて言えない。虎杖といい、天坂といい、性根が真つすぐすぎる。

家人が解剖台にかけられた布に手をかける。天坂に確認するように視線を向ける。

「本当にいいの?」

「大丈夫です」

布が取り払われた。

冷たい金属の台に虎杖は横たわっている。血の気が失われた身体は白く、胸の真ん中に空いた穴だけが赤黒い口をぽっかりと開けている。

天坂は覚束ない足取りで解剖台に近づき、生気のない虎杖の顔を見下ろしている。表情は五条からは見えない。

「妙に気にかけてるとは思ってたけどそういうことか」

五条の横に立つ家人が納得するように呟く。

「あんまり重ねちゃ可哀そうだろ」

「別にそういうんじゃないよ。前途ある若人にはできるだけ希望を持ってほしいだけさ」

「どうだか。で、好きに解剖して良いんでしょ?」

「…ああ。役立てろよ」

「当然でしょ。誰に言ってるの」

五条は伊地知に背をさすられている天坂を見る。天坂はこれを機に呪術師を辞めて

しまいかもしれない。止めはしない。けれど、それでも虎杖の死を乗り越えて強くなつてほしいと願ってしまふのは五条のエゴだろうか。

今の呪術界の上層部は腐りきっている。

腐ったミカンドもを皆殺しにするのは容易いが、そんなことをしても首がすぐ替わるだけで根本は変わらない。五条だけが強くても何も変えられない。だから、五条は教育という道を選んだ。

強く、聡い仲間を育て、腐敗しきった呪術界をリセットするため。

三年の秤、二年の乙骨は将来的に五条に並ぶ術師になるだろう。虎杖もその一人だった。

拳を強く握る。まだ十代の若者に対して酷な要求であることは分かっている。だが、どうしても願わずにはいられなかった。

ああー、推しの死体ー。

五条の苦悩をよそに、天坂はおかしな方向にテンションが上がっていた。

転生、成り代わり、逆行などなど、数ある創作群で死んだはずのキャラクターと言葉

を交わし交流することはあれど、こうして間近で推しの死体を眺めることができる機会はそうそうないだろう。

虎杖の遺言シーンを見逃したのはめっちゃくちや落ち込んだし、伏黒から遺言の詳細を聞いて更に凹んだ。自室で膝を抱えながら、どうにか時間を巻き戻せないかと本気で悩んだ。

しかし、伏黒から聞かされた虎杖の解剖についての話で悲しみはあつさり吹き飛んだ。

あの日、伏黒は気を遣ってかあまり遺体が天坂の目に入らないようにしてくれていたが、せっかくだし近くで拝みたい気持ちはかなりあった。リョナ性癖に片足突っ込んでいる身としては逃せないチャンスであった。

うっかり気持ち悪い笑いが漏れ出ないように口を手で覆う。泣いていると勘違いしたのか伊地知が背をさすってくれた。良い人すぎる。

胸の傷は肉が剥き出しになっており、普通の人から見ればかなり惨い傷だ。

これ、傷口に指突っ込んだら流石に怒られるだろうか。『推しの内面(物理)に触れた』という実績を解除してみたい好奇心はある。

碌でもないことを考えていると、傷口が音もなく塞がっていることに気が付いた。

「しんみりしているとこ悪いけどそろそろ始めるよ。外に…」

言いかけた家入が口を閉ざす。

ぼんやりと寝ぼけ眼の虎杖が台から起き上がった。五条と伊地知が呆然とその様子を眺めている。

「うおっ!?フルチンじゃん!」

状況が分かかっていないのか虎杖は周囲を見回し、横に立つ天坂に焦点を合わせる。

「快里…」

「起きるのが遅えよ。馬鹿」

「…(めん)」

安堵したように笑う天坂に肩を小突かれた。その感覚が虎杖に生を実感させる。

事実、天坂は安堵していた。自分という異分子の存在と、原作にない宿儺とのやりとりのせいでちゃんと虎杖が生き返るのか若干の不安があったのだ。この様子だと生得領域における宿儺との「契闘」についての記憶は無さそうだ。あの蘇生に関する取引がどんな意味を持つか分からないが、天坂にとっては大して重要ではない。

壊れた人形のように「いい生き」と繰り返す伊地知を押しつけて五条は片手を上げる。

「おかえり、悠仁!」

「オッス!ただいま!」

ハイタツチの音が部屋に響いた。

「報告修正しないとね」

「いや、このままでいい。記録上悠仁は死んだままにしてくれ」

虎杖が生存していると知れば上はまた性懲りもなく嫌がらせをしてくるだろう。次は虎杖のみならず、他の一年生にも危害が加えられるかもしれない。残念ながら五条が付きっ切りで守ってやることはできない。だから、京都校との交流会までには最低限の力を身に着けさせる。自分の身を自分で守れるように。

「なんで交流会まで?」

「簡単だよ」

五条は隣を歩く家入を見やる。

かつて、その向こうに肩を並べていたもう一人の同級生がいた。自分たちを最強と信じて疑わず、共に青い春を駆け抜けた親友。最後まで同じ道を歩むことは叶わなかったけれど、あの日々は五条にとってかけがえのないものだ。

「若人から青春を取り上げるなんて、何人たりとも許されていないんだよ」

「…悠仁、そんなこつち見られてもなんも出ないけど」

「あ、悪い。快里生きてるよなって思つて」

「どつちかつていうとそれは俺のセリフだな」

服を着た虎杖は穴でも開けそうな勢いで天坂の横顔を見ていた。

正直な話、宿儺が天坂を殺してしまふのではないかという不安があつた。あの状況では宿儺に代わるほかに生き残る道がなかったし、呪霊を祓つたらすぐに代われると思つていた。しかし、思惑は外れ宿儺と代わることが中々できなかつた。何が起こつているのか分からないなかで、ひたすら天坂の無事を願つた。

次に目を開けた時に見えたのはボロボロの伏黒。一縷の望みをかけて後を託した。

「快里、俺強くなるから」

自分はまだにも無力だつた。天坂が傷ついてようやく立ち向かうことができた。今回は幸運にも生きているが、次もそうだとは限らない。

強くなりたい。仲間を傷付けなくていいように、天坂が自分のために命を張る事がなくていいように。

「俺、じゃないだろ」

目の前に拳が突き出される。

「俺たちで強くなろう」

「おう！」

拳をぶつける。今度こそ、自分の力で守る。

9. 一意奮闘

虎杖が匿われたのは地下だった。交流会までの間、ここで生活し強くなることに専念する。

五条に提示された課題は呪力の制御と呪術に関する最低限の知識を身に付けること。今の虎杖は弱い。誰も助けられず、釘崎を一人にして、天坂を傷付け、伏黒を殺しかけた。

今のままでは顔向けが出来ない。

「強くなりたい。『最強』を教えてください」

「フツフツ、お目が高い」

「先生、自分で最強って言ってたけどね」

五条曰く、呪力はエネルギーであり、それを術式に流すことで様々な効果が得られるという。

残念ながら虎杖には術式はない。基本的に術式は生まれながらにして体に刻まれているものであり、分かりやすく言えば才能がかなりの比率を占める。よって虎杖が今進

めるべきことは元来の身体能力を活かした戦い方を更に伸ばすことだ。

「悠仁は肉弾戦のセンスがピカイチだからね。それに呪力を上乘せする。下手な呪術よ
りこういう基礎でゴリ押しされた方が僕は怖いかな」

やる気なく大の字になつていた虎杖が目を見開く。

「でもでも！それなら俺もうできるぜ！」

「起きろよ」

頭に浮かんだのは少年院での戦い。特級呪霊に死に体で叩きこんだ一撃には確かに
今までとは違う手応えがあつた。

「じゃあ、やってごらん。どうせできないから」

「怪我しても知んないよ？」

「いいから、はよはよ」

ぐっと腰を落として渾身の一発を五条の手のひらに打ち込む。が、乾いた音が鳴るだ
けだった。

「箆つてなかったね、呪力」

「なんで!？」

「呪力は負の感情が源だからね。あの時の悠仁は怒りや恐怖に満ち溢れてたんだろう」

「なるほど、だから伏黒はいつもキレ気味だったのか！」

「違うヨ」

怒りや恐怖。あの時感じたのはもちろん呪霊や死への恐怖だったが、一番は天坂に頼らなければ踏み出せなかつた自分自身の不甲斐無さだ。

「…もつかいやつてみてもいい？」

「いいよ」

今度はゆっくり腹の底から息を吐いて、拳を構える。あの時の感覚を思い出せ。

右腕に力を込める。踏み込んだ一撃は五条の手にギリギリ届くことなく何かに阻まれた。

「あれ、またできてない？」

「いや、できてるよ。やるね」

「な！言つただろ！」

「ま、全然安定してないから訓練は必須だけどね」

「訓練？」

「皆わずかな感情の火種から呪力を捻出できるように訓練してるんだよ。術式は大体4〜6歳で自覚するから、こつち呪術界とは無縁だった快里とかは子供のころから自然と呪力をコントロールするのが癖になつてるんだろかね」

「…つまり、今一番俺が遅れてんの？」

「そのこと」

凹んだ。これは早急に何とかしなければ。

「というわけで、悠仁にやってもらうのはこれ！」

「…映画？」

テールブルに山と積まれているのは様々なパッケージのDVDだ。

「そつ、映画鑑賞！名作からC級ホラー、地雷のフランス映画まで選り取り見取り。起きている間はぶつ通しで見てもらおう。コイツとね」

五条が取り出したのは夜蛾の呪骸だ。ボクサーグローブを着けた熊は五条の手では大人しく寝ていたのに、虎杖の手に渡った途端強烈なアツパーカットを見舞った。

映画を観つつ呪骸に呪力を流し続けることで、どんな感情下でも安定して出力を一定に保つことができるように訓練する。集中が切れればぶん殴られる。

まずは無傷で一本観通せるようになれなければ話にならない。

「なにかから観る？これとかどう？ヒロインがすげムカつくんだけど最後派手に死ぬの」

「すんげーネタバレ」

DVDの山を漁っていると、前に天坂に勧められた作品を見つけた。コウモリをモチーフにしたダークヒーローの三部作。特に二作品目が好きだと言っていたような。

やはりちゃんと観るなら一作目からだろうかと考えていると熊のパンチが顔面にめり込んだ。

「もー!!」

呪骸を床に叩きつけた虎杖を見て五条はケラケラ笑う。

「どうする? やめる?」

「やる」

即答だった。

自分だけ置いて行かれてなるものか。もうあんな思いはしたくない。

呪骸を小脇に抱えて、一作品目をプレイヤーに入れた。

「健気なことだなあ」

いつそ哀れなほどに。

折り重なる骨の山の頂上で宿儺はせせら笑っていた。

虎杖が宿儺の生得領域にいたとき、別にすべてを暴露してしまっても良かった。虎杖が心の拠り所になっている存在がいかに醜悪か見せつけて、絶望する姿を嘲笑うのも一興

かと思つたが。

「あれを見ずに死ぬのは少しばかり惜しい」

言わずもがな伏黒恵のことだ。

途中で虎杖が身体の支配権を取り返してしまったことで見る事は叶わなかったが、近いうちに伏黒が何をしようとしていたのか、その全貌を見る事ができるだろう。それを見届ける前に終わつてしまうのは勿体ない。

ただでさえ虎杖は身体はもう貸さないだの、無条件に生き返らせろだのと駄々をこねていた。そのうえ下手に天坂の本性を暴露して生き返らないと言ひ出されてはあまりにも面倒くさい。

宿儺は天坂の存在自体には大して興味がない。苦しみを嗜好とする考え方こそ呪霊に近いが、その根底にあるのが他者への異常な好意というのがチグハグすぎて心底気色悪い。心境的には油虫ゴキブリを見ている気分だ。

しかし、そんな気色の悪い存在は虎杖を生に繋ぎとめる楔となっている。これを利用しない手はないだろう。

『あれはさして強くない。お前が死んでも、彼岸でまたすぐに会えるだろうな』

そこでようやく虎杖は聞く耳を持った。

宿儺が生き返りのために提示した条件は二つ。

「契闊」と唱えたら一分間身体の支配権を明け渡すこと。

そして、この約束を忘れること。

もちろん反発された。だから、一つだけ付け加えた。

『その一分間、望まない限り誰も殺さず、傷付けなないと約束しよう』

『ふざけんな。そんなこと俺が望むわけねえだろ』

宿儺があえて作った縛りの隙。

虎杖はその言葉遊びの意味を理解していない。

「虎杖が望むかどうか」ではない。「対象となる相手が望むかどうか」である。

「これで貸し借りは無しだ。せいぜい面白おかしく踊ってみせろ、油虫^{天坂}」

強くならなくては。

天坂は禪院真希に一方的にボコられていた。

二年の先輩たちは最初こそ天坂に対して気遣わしげだったが、しごきが始めるとそんなしんみりした空気は一切なくなった。

離れたところからパンダに投げ飛ばされている釘崎の悲鳴が聞こえる。

「オマエさあ、やる気あんのかよ」

「あります」

「ねえだろ」

天坂の拳が真希の胴に辿り着く前に彼女の振るった長物が首筋に打ち込まれた。

「いっつ」

「実戦なら今ので首飛んでんぞ。動きがガバガバ。ガードもしねえ。オマエの動きは死
にに行つてるやつの動きなんだよ」

「…そう見えますか」

「そうにしか見えねえから言つてんだろ」

こわ。そんなところで本質を見抜かれるとは思つてもみなかった。

真希の言うとおり、今まで散々前に出ようと考え続けていたせいでそれがつい出てしまつて
いる。これからは、それでは困るのだ。

このまま順当にいけば、一か月後虎杖は重要なターニングポイントに辿り着く。

吉野と真人。作品における屈指のトラウマ回。

真人は虎杖にとつて特に因縁の相手であり、呪いという存在の醜悪さを知らしめた存在だ。

真人の術である無為転変は性能においてもビジュアル面においても作中随一の悍ましさと凶悪さを誇る。正直、魅力的ではある。だが、一つ問題がある。

被害者が多すぎるのだ。

原作内で真人の手にかかり散って行った人物は吉野をはじめとして、メカ丸こと与幸吉、七海、釘崎、そして大勢の名もなき一般人たちと多岐にわたる。

そこまで大人数と死因がかぶってしまふと印象が薄くならないだろうか。

死に方が同じとかなんだその最悪な天井的展開。

改造人間や肉体破壊はかなりインパクトがあるが、そんなもの渋谷事変に突入してしまつたら胃もたれするほど出てくる。善良な虎杖は一つ一つに心を痛めるだろうが、根が頑強であるゆえに積み重ならなさと決定的な一撃になりえない。数ある傷の一つになるのは物足りなさがある。

できることなら唯一無二のトラウマになって死にたい。

天坂はだいぶ欲が出ていた。

宿儺が言っていた「まだその段階にすら立っていない」という言葉に加えて遺言シーンを見逃したことへの欲求不満。

今後の方針として、ただ死ぬのではなく最悪でも数年はトラウマとして引き摺って貰えるような終わり方を目指すことにした。なんなら一生背負ってほしい。

そのためには、やはり渋谷事変に介入するしかないだろう。

あの阿鼻叫喚の地獄でならきつとこの夢想は叶うはずだ。だから、積極的に死を目指

すのは一旦取り止める。

地獄で死に方を選ぶなら、相応の強さを身につけなければ。

里桜高校事件に介入したい気持ちはある。めちやくちやある。しかし、吉野にはあまり会いたくないのだ。

だつて、あまりにも死に方が羨ましいじゃないか。

虎杖に後々まで引きずるトラウマを植え付けるシチュエーションが理想的過ぎる。見に行つたら我慢できず真人に「俺を代わりに殺してくれ」とか言つてしまいそうだ。

そんなことをして吉野が生存してしまつたら原作軸から大きく外れてしまう。でも吉野が死ぬのを見て絶望する虎杖はめっちゃ見たい。

本当なら自分が行きたいが、今回ばかりは形代を行かせるしかないだろう。

幸いにも虎杖と連絡を取るとは五条に許されている。それとなく進捗を探り、美味しいところを見せていただくこう。

それに、さらなる曇らせのためにちよつとした仕掛けも用意する予定だ。上手くいけばかなり良いものが見られる。

真希に腕を捻られ、あつさりど地面に転がされた。

「集中しろ。ダチが死んだのにその程度かよ」

「つ、もう一回お願いします」

すぐさま起き上がった天坂を見て、真希はニヤリと笑う。

「来い。まずは私から一本取ってみろ」

砂まみれになりながら真希に向かっていくのを伏黒は少し離れた位置から見ていた。

散々転がされて歩くだけで砂が落ちてくる。

伏黒が無言でスポーツ飲料を差し出した。

「さんきゅ」

「…意外と元気だな」

「ん？ああ、いつまでも落ち込んでられないからな。今はとにかく強くなんねえと」

「そうか」

「色々ありがとな、伏黒」

伏黒は答えない。ただ、小さく口の端だけで笑った。

10. 寸善尺魔

「でさ！ナナミンの戦い方マジですげーの！峰打ちなのにズバーってぶった切ってて」
「へー。一級術師の人だよな？俺も見てみたい」

一日に限られた時間だけ天坂と通話することは許されていた。

虎杖は匿われている身のため、どうしても接触できる人間は『虎杖の生存を知っている人』に限られてくる。伏黒と釘崎には交流会まで会えない。外を歩くことも制限されているため、仕方ないことだと分かっているも息が詰まる。

そんな寂しさを紛らわせる時間が今だった。

「そつちは？伏黒と釘崎は元気？」

「元気なうえに交流会に向けてめっちゃ気合い入ってる。特に釘崎」

「なんか前に京都の先輩にちよつかい出されたんだっけ？それでか」

「ちよつかいの範疇越えてたけどな…」

天坂から聞ける近況報告が楽しみだった。

女の趣味云々で京都の先輩と喧嘩になったと聞いたときはさすがに意味が分からな

かったが、元氣そうなら何よりだ。

「いいなー、俺も早く二人に会いてえな」

「すぐ会えんだろ。…なあ、悠仁」

「ん？」

「大丈夫か？」

言葉に詰まった。

電話越しでも空元氣を見破られた。十年近い付き合いは伊達じやない。

七海とともに向かった川崎市のキネマシネマ。そこで戦ったものは呪霊ではなく、呪霊のような姿に無理やり変えられた人間だった。

解剖の結果、死因は体を改造されたことによるショック死だと家入は言っていた。殺したのは虎杖ではないとも。

しかし、虎杖の胸には小骨が引っ掛かったような感覚が残っていた。

きつと天坂なら家入と同じことを言ってくれるだろう。でも、天坂だって頑張っているのだ。自分ばかりが甘えてはいられない。

「大丈夫だって」

「…そっか。悪い、余計なお世話だったか」

「そんなわけないだろ。ありがとな」

通話を切ってスマホをポケットにしまおう。
明日も調査は続く。気を引き締めなければ。

監視対象である吉野とは話が合った。

少し前まで映画漬けだったこともあり、あれはつまらんこれは面白かったと会話が弾んだ。

なんとなくその場の流れに乗って、吉野の家で夕飯までご馳走になった。
酔い潰れてしまった母親に吉野がそつとブランケットをかける。

「母ちゃんいい人だな」

「うん。虎杖君のお母さんってどんな人？」

「あー…俺会ったこと無いんだよな。父ちゃんはうーっすら記憶にあんだけど」

幼い頃の記憶はぼんやりとした輪郭で、その後は祖父と天坂がほとんどを占めている。
る。

「俺には爺ちゃんと快里がいたから」

「快里？」

「幼なじみっつーか、親友っつーか。ほぼ家族みたいなもんかな」

「へえ」

吉野の表情が僅かに曇ったことに、伊地知からの電話に出ている虎杖は気付かない。

「虎杖くんは呪術師なんだよね？」

「おう」

「人を、殺したことがある？」

一瞬、脳裏によぎったのはキネマシネマで戦った改造人間たち。

「……ない」

「でも、いつか悪い呪術師と戦ったりするわけだよな。その時はどうするの？」

「……それでも殺したくはないな」

「その快里って人が殺されても？」

息を呑んだ。はく、と唇だけが取り残された様に動く。

守ることばかりに思考が傾いていて、考えが及んでいなかった。

今まで生きてきてムカついたこと、イラついたことはあれど虎杖は本気で腹の底から他者を憎んだことがない。怒って取っ組み合いの喧嘩になっても次の日には仲直りをして終わる。その程度だった。環境にも友人にも恵まれていた。そんな周囲を疑わずに生きてきた。

それをひっくり返す存在が現れたら、自分は果たしてどうするだろうか。

熟考してから虎杖は口を開いた。

「…答えは変わらねえよ。俺は殺したくない」

「なんで？ 悪い奴だよ？」

「なんつーか、一線超えたらもう戻れなくなる気がするんだ」

一度引き金を引いてしまえば、次はもつと簡単になってしまう。「殺す」という行為が日常の選択肢の一部になってしまう。命の重さが曖昧になって、守るべき大切なものの価値まで見失ってしまったら、取り落してしまつた大切な人を気付かず踏み潰してしまふかもしれない。それが、とても怖い。

なにより、虎杖が手を汚して仇討ちなんてしてもきつと天坂は喜ばない。

「俺は、大事な人を守れなくなるような生き方はしたくない」

それが、虎杖の答えだった。

吉野は一人部屋で考える。

真人は人に心なんて無いと言つた。その考え方に救われた。力も与えられた。

今なら憎む相手を全て殺すことだって訳無いだろう。しかし。

『大事な人を守れなくなるような生き方はしたくない』。

その言葉を聞いたときに真つ先に母親のことが頭に浮かんだ。もし、自分が人を殺すことで母の魂が穢れてしまうなら、きつと自分に人は殺せない。

いつか、この力を母のために使える日が来るだろうか。

七海が負傷して帰ってきた。

一連の事件の首謀者と思われるつぎはぎ顔の人型呪霊のアジトに単身で赴いたのだという。

「俺は足手纏いかよ、ナナミン」

七海とて何も考えずに虎杖を置いて行ったわけではない。呪術師とは血生臭い職だ。いつの日か、救う余地すらない人間を殺さなくてはならない時が来る。だが、少なくともそれは今ではない。

虎杖はまだ守られるべき子供なのだから。

苦し気に俯く虎杖を諭す七海の声はいつもより幾分か柔らかい。

「理解して下さい。子供であるということは決して罪ではない」

里桜高校に帳が下りていると窓から通報が入ったのは七海が出立した後だった。

「どいてくれ、伊地知さん」

「…私たちの仕事は人助けです。その中には君たち学生も含まれます」

伊地知は後悔していた。あの時、上の命令であつても特級呪霊のもとへ学生を放り込むべきではなかった。だから、今度こそ間違えない。

「虎杖君、行つてはいけない」

「…ごめん、伊地知さん」

伊地知の横をすり抜けて行こうとした虎杖の襟首が何者かによつて掴まれた。伊地知のため息が聞こえる。

「あんま伊地知さん困らせんなよ」

「快里…?なんで」

「本物じゃないけどな。前電話したときちよつと気になったから、伊地知さんに俺形代だけ同行させてくれて頼んだ。七海さんには内緒だけ」

「本当なら、天坂君も行かせたくなんですけど」

「そこはホラ、本体じゃないから大目に見てくださいよ」

からりと笑う天坂は虎杖の背中を軽く叩く。

「力になれるかは分かんないけど、一緒に行かせてくれ」

「…ああ」

子供であることは罪ではないと七海は言った。それでもここで動かなかつたらきつと後悔する。

そんなこと、もう御免だ。

里桜高校に下りていた帳はあつさりと二人の侵入を許した。外から入ることは自由にできるようだ。

不気味なほど静まり返っている校舎。気配を感じるのは体育館だ。扉を開け放つと大勢の生徒たちが倒れている。

壇上には巨大なクラゲの式神を従えた吉野と宙吊りにされぐつたりと身体を弛緩させている男子生徒。

「何してんだよ！順平!!」

虎杖の絶叫に対して、吉野は風いだ視線を向ける。

「引っ込んでろよ、呪術師」

吉野の背後にいたクラゲが突進してくる。振りかぶられた無数の触手を避けるが、鋭利な棘の一つが天坂の右腕を抉った。紫色の斑点が腕に広がっていく。

吉野はクラゲを盾に外へ飛び出していく。

「快里！」

「いいから、追いかける！俺に構ってる暇ないだろ」

傷口から侵食する痣に顔を歪めながら天坂は虎杖を諫める。

「話、ちゃんと聞いてやれよ。友達なんだろ」

「…っ、分かってる」

脇目も振らず、虎杖は走りだした。

「もう一度言う。引っ込んでろよ呪術師。関係ないだろ」

「それはオマエが決めることじゃねえ！」

「早くさっきの仲間を助けに行かないと、一時間もしないうちに死ぬぞ」

「オマエ……！」

かっど頭に血が上る。何故こんな事をしたのかという疑問より、そんなものを無抵抗の人間に向けたのか、という吉野への怒りが先走る。

猛毒である特級呪物を既に取り込んでいる虎杖の体に毒は効かない。

毒が効かない以上、純粋な力比べで有利を取るのとは考えるまでもなく虎杖だ。

吉野は校舎の外に放り出され、トタン屋根の上に落ちる。追ってきた虎杖の着地寸前

を狙うが、強烈な膂力で足場を崩された。

「オマエは自分が正しいって信じたいただけだろ」

呪力を纏った拳が吉野を捉える。防御することもできず吉野は窓を突き破って校舎の中に転がり込んだ。

「順平の動機は知らん。何か理由があんだろ。でも、それはあの生活を捨ててまでのことなのか？人の心がまやかしなんてあの人の前で言えるのかよ！」

吉野は血が滲むほどに強く拳を握る。

「人に心なんてない」

「オマエ、まだ」

「ないんだよ！そうでなきや…」

戦闘で乱れた前髪。涙で顔をぐちゃぐちゃにした吉野の額には無数の根性焼きの痕があった。

「僕も母さんも、人の心に呪われたって言うのか」

虎杖の思考が一瞬停止する。『話、ちゃんと聞いてやれよ』と天坂の声が脳内で反響する。頭の上ついていた血が急速に冷えていく。

「君に分かるはずないだろ…。こんな所までついて来てくれる友達がいるくせに。僕には、もう」

守る人さえいないのに。

力なく呟かれた言葉と共に澱月が毒の棘を構える。その声に籠っていた掻き巻るような苦惱。

放たれた攻撃を虎杖は避けなかった。吉野の目が驚愕に見開かれる。

「なんで、避けないんだよ」

血を滴らせながらゆっくりと吉野に近付く。

虎杖の胸に後悔が渦巻く。何も知らない癖に、知ったような口を利いて、吉野を責めて。天坂には自分よりずっと状況が見えていたというのに。

「確かに俺には順平の気持ちは分かんねえ。でも、分かりたいと思う。だから、何があつたか話してくれないか」

片膝をついて吉野と視線を合わせる。

「俺はもう、絶対に順平を呪つたりしない」

吉野から語られた母親の死と何者かによる呪い。それはあまりにも理不尽で、惨いものだった。

「順平、高専に来いよ。バカみてえに強い先生とか、頼りになる仲間がいっぱいいるんだ。快里も絶対に順平の味方になってくれる。順平と母ちゃんを呪つた奴に必ず報い

を受けさせる」

吉野の手を力強く握る。

「一緒に戦おう」

引き戻せると思つた。一度は間違えてしまつたけれど、まだやり直せると。

だからこそ、上階からゆつたりと降りてくるつぎはぎ顔の人物に気が付くのが遅れた。

「はじめまして、宿讎の器」

左腕がぐにやりと変形する。

吉野の制止も空しく、肥大化した腕が虎杖を壁に叩きつけた。

七海の報告にあつた姿を自在に変える、つぎはぎ顔の人形呪霊。一連の事件の主犯と
言うべき呪いだ。

「逃げろ！ 順平！」

拘束を解こうともがきながら叫ぶ。

「こいつとどんな関係かは知らん！でも今は逃げてくれ！」

「落ち着いて虎杖君！真人さんは悪い人じゃ……」

そう言いかけて、吉野は今まで目を逸らしていた、否目が覚めたことで思い至つてしまつた疑問に思考が持つていかれる。

人間をおもちやのように弄ぶこの人は、果たして悪い人では無いのだろうか。つぎはぎの手が吉野の肩に触れる。

「順平って頭は良いんだろぅけどさ、熟慮は時として短慮以上に愚行を招くものなんだよ」

優しいと思っていた声が、今は吉野のすべてを嘲るように囁く。

「順平は君が馬鹿にしている人間の、その次ぐらいには馬鹿だから」

術式が奔る。他者の魂に干渉し、存在そのものを意のままに歪める、醜悪を煮詰めたような術。

無為転変。

吉野の体が変形する。ずんぐりとした爬虫類のような姿はもはや吉野の面影を残していない。歪な巨体を揺らしながら拳を虎杖に容赦なく打ち付ける。

「順平！しつかりしろ、今治してやるから！」

内臓を揺らす打撃に息を詰まらせながら叫ぶ。まだ救う道があるはずだ。

「宿儺！」

「なんだ」

「俺はどうなつてもいい！だから俺の心臓を治した時みたいに順平を治してくれ！」

「断る」

虎杖の懇願をあつさり一笑に付した。虎杖は宿儺の条件通りに「契闊」に関する記憶を失っている。それだけで宿儺には十分だ。

「矜持も未来も！オマエの全てを捧げて俺に寄り縋ろうと何一つ救えないとは！」
他人を救うために呪いにさえ縋る。あまりにも愚かな姿に笑いが止まらない。

「惨めだなあ……この上なく惨めだぞ小僧！」

宿儺の笑い声に真人の声が重なる。

反響する嘲笑の中で、ようやく虎杖は理解した。

どれだけ言葉が通じようとも、どれだけ人に近い外見をしていようとも、今日の前にいるものは紛れもなく『呪い』でしかないのだと。

「ゆ……うじ……」

人でないものに成り果てた吉野が縋るように虎杖のズボンの裾を引く。

「な、んで……？」

その言葉を最後に吉野は事切れた。

呆然とそれを見下ろしていた虎杖の視界の端で何かが動いた。

下の階へ続く階段、踊場へ繋がるそこにいつの間にか天坂の姿があった。呼吸が止まる。
天坂の位置からは真人の存在が見えていない。

「にげ」

踏み出そうとした足が裾を掴んだままの吉野の手に引つかかる。

虎杖が言い終わる前に、真人が眼前に割り込んだ。

「なんだ、もう一人いたのか」

虎杖が伸ばした手が届くことはなく、代わりに真人の手のひらが天坂の額に触れる。

そして、天坂の五体は粉々に砕け散った。

11. 偏袒扼腕

この世界において、虎杖に降りかかる悲劇は全自動だ。

彼が宿讎の指を飲み込んだ時点で、それはもう倒れ始めたドミノのように止めようがない。

全てを覆そうとするならば、それこそ五条を越えるほどの力を持つ存在が必要になるだろう。

天坂にはそんな力はない。いや、死ぬ気で考えて行動すればちよつとは影響を与えることはできるだろうが、そもそも悲劇を回避する気が毛頭無い。

渋谷事変まで積極的に死ねなくなつた以上、天坂にできることは精々「流れに沿って傷の上にさらに塩を塗り込む」^{トラウマ}くらいのものだ。ならばそれに全力を尽くす。

そんな思考回路しか持たない天坂は自分の存在と行動がどれだけ影響を及ぼしているかなど、気が付いていない。

「あー、いつてえ」

じわじわ侵食する毒に耐えながら天坂形代はなんとか身を起こす。これは思ったより持たないかもしれない。これ以上毒が回らないように右肩をキツく縛って血流を絞り、呪力で侵食を押し留める。何もしないよりはマシだ。

早くあの踊り場がある階まで行かなくては。

フラつきながら立ち上がったとき、あることに気が付いた。

体育館の壇上に倒れる人物。たしか吉野のイジメの主犯だっただろうか。

「死んでる…?」

顔は原型が分からないほどに変形し、紫色の痣が全身に広がっている。遠目からでも既に息絶えていることが分かった。

原作では最終的に里桜高校事件での死亡者は吉野だけだったはずだ。なのになぜ。

「いや、今はそれよりも急いだ方がいいな」

深くは考えずに天坂形代はその場を後にした。

踊り場で起きた惨劇を天坂形代は下の階へ続く階段から見ている。

力なく倒れ伏す吉野だったもの。それを見下ろす虎杖。

声もなく見入った。自分の力ではどうにもならない現実、絶望の淵を垣間見ている

人間の顔だ。

心に湧きあがる歓喜とどうしようもない羨望。

自分が死んだときも、そんな顔をしてくれるだろうか。

深淵を覗いていた瞳がこちらを向く。虎杖の唇が戦慄いた。

「にげ」

言葉が終わるより前に笑いすぎて目尻に涙を溜めた真人が二人の間に立つ。呪いは思えないほど整った顔立ちが残酷な笑みをより恐ろしいものになっている。

つぎはぎの手が天坂の眼前に伸ばされた。

「なんだ。もう一人いたのか」

手のひらが顔に触れる。

そして、天坂の身体はバラバラに弾け飛んだ。

『真人に触られるまで』。

以上が天坂が形代に課した縛り。

天坂が形代を呼び出すときにはタイムリミットを制限として設ける。あまりに具体

的過ぎる行動制限を付けてしまうと本当に「その行動だけ」しかできなくなるというデメリットがある。だから特定の状況を指定するだけにとどめ、ある程度制限を緩くしておく。同一の人格と記憶を持っているのだ。よっぽどのイレギュラーが無ければ自分の行動は大体予想できる。

今回で言うなら、絶対に自分が見に行くであろう「吉野の死」と「真人に触れられるタイミング」と言えばあの瞬間しかない。手で触れられたなら形代が消えるよりも早く真人の術が発動する。

なにより、真人なら絶対に自分を殺すと信じていた。

びくん、と天坂の体が揺れた。

「どうした?」

「いや…」

「うっわ、何アンタその顔色」

釘崎が指摘したように天坂の顔面は血の気が引いて青を通り越して白くなっている。いつの間にか息が上がっており、ひどく呼吸が浅い。

「おい何があった」

「悪い二人とも、先に先輩たちのところ行っててくれ」

「ちよつと、ホントに大丈夫なの？」

「うん、いや、平気、無理、大丈夫、うん無理」

「どつちだよ！」

釘崎のツツコミに振り返る余裕もなくトイレに駆け込む。喉までせり上がっていた吐瀉物を便器にぶちまけた。胃が痙攣を起こしている。体の末端が寒くて仕方ない。

今、『天坂快里』は死んだのだ。

「はー、マジかよ……」

流れ込んできた記憶は想像以上に壮絶な感覚を伴っていた。

形代天坂は真人の無為転変によって死んだ。

全身の肉が千切れ、骨を内側から無理矢理捻じ曲げられる感覚。吉野も同じ経験をしたのか。いや、意識があるまま身体を改造されたのだから天坂よりも感覚的には悲惨なものだろう。トラウマどころの話ではない。

あれが無為転変。あれが真人という呪い。

しかし、背筋を震わせるこの感覚は恐怖ではない。

意識が途切れる、その刹那。文字通り死ぬほどの激痛の中で天坂は確かに虎杖の顔を見た。

虎杖はあそこにいた自分を形代にせものだと分かっていたはずだ。それなのに。

あんな顔を、まるで。

世界の終わりでも見たかのような顔を。

涎まみれの口元から笑いが漏れる。

腹の底から湧きあがった罪悪感と背徳感が快感となつて背中を駆け上がっていく。ゾクゾクとした感覚を押しえられず、両腕で体を抱きしめた。

「さっ……」

この感覚はあらゆる多幸福感に勝る。脳内麻薬もかくやと思うほどだ。

あんな表情を見れるなら、もう二、三度死んだつて構わない。

呆然とした天坂は目の前に現れた真人を見つめたまま動かなかつた。

やめてくれ、もう奪わないでくれ。

そんな虎杖の願いも空しく、天坂の身体は風船のようにいとも簡単に弾けた。

飛び散った血液が虎杖の頬に跳ねた。まだ体温を残す生温かい液体が顎へ伝つていく。

目の前に広がるそれはもはや天坂と呼んで良いものなのか分からない。砕けた肉片と臓物は壁や床に張り付き、彼が履いていた靴だけが存在を忘れられたかのように足首と共に階段に残されている。

脳が目の前の出来事を処理することを拒んでいる。耳鳴りがひどい。

どれだけあれは本物ではないと自分に言い聞かせても、心臓は狂ったように早鐘を打ち続けている。

自分が見てしまったから。視線を向けてしまったから真人に気付かれた。

自分のせいだ。

「うえ、」

胃から逆流してきたものを床に吐き出した。

天坂の体が膨れて弾け飛ぶ瞬間が何度も何度も頭の中で再生される。

「あれ？ちゃんと殺したと思ったのにな」

真人は不思議そうな顔で天坂を肉片へと変えた右手を見る。

確かに手で触れたはずだ。しかし、干渉できたのは肉体までで魂に触れた手応えがない。触れる前にするりと躲されたかのような肩透かしな感覚だった。

恐らく本体は別の場所にいるのだろう。死体が残る分身というのかなり奇妙ではある。

「ふーん？まあ、いいか。その内ちゃんど殺せる機会は来るだろうし」

その言葉でようやく虎杖の体が動いた。

容赦なく真人の顔面に拳をめり込ませる。真人は強烈な一撃に吹き飛び、鼻から血が滴った。

今まで、自分が口にしてきた言葉が全て嘘だったのではないかとすら思える。守るだの、悲しませたくないだの、綺麗事ばかり並べやがって。

思考はすでに理性を引き剥がし、ただ一つの目的のために動いている。

虎杖を突き動かしているのは後悔ではない。悲しみでもない。

ただひたすらに、目の前が真っ赤に染まるほどの純然たる殺意。

「殺す」

腹の底から出た言葉を真人は啞う。

「祓うの間違いだろ。呪術師」

真人の目的は宿儺有利の縛りを虎杖と結ばせることで宿儺を味方に引き込む確率を引き上げることだった。

虎杖は自身を犠牲にすることを厭わないが、他者が犠牲になることを許せない。

ならば、目の前で人間を変えてやれば虎杖はまず間違ひなく宿儺に頼るだろう。吉野が虎杖を引き当てた時点で流れはできていた。虎杖以外の術師が侵入してきているのは想定外であつたが、大した障害ではないと思つていた。

肉片になつた術師を見た虎杖は、先ほどまでと明らかに顔つきが異なる。

虎杖の身体には宿儺がいる。常に一つの体に二つの魂が存在することで、虎杖は無意識のうちに魂の輪郭を捉えている。魂の形を本質とする真人にとつて天敵もいゝ所だ。

厄介なのはそれだけではない。打撃の後に遅れて呪力のインパクトがやつてくる変わった攻撃と全力の体術に全力の呪力を乗せた強烈な攻撃のランダムなスイッチング。

全力の打撃に備えて防御を固めれば二連の打撃に弾かれ、遅れてくるインパクトを警戒すれば100%の呪力を込めた拳に強行突破される。

時折攻撃の仕方が噛み合っていないところを見るに、恐らく意図的ではない。だからこそ先が読めずこちらが削られる。

真人の予想以上に虎杖は強い。しかし勝機がないわけではない。

現状、虎杖は自分の負傷を省みずにひたすら真人へ攻撃を続けている。呪力で体の欠損を補完できる呪霊ならまだしも虎杖は人間だ。今は感覚が麻痺しているだろうが、アドレナリンが切れれば出血と痛みで動けなくなるのにそう時間はかからない。

それまでにどれだけ虎杖を追い詰められるかにかかっている。

肉体の一部を硬化化させて虎杖へと放つ。虎杖は掌の皮が剥がれるのも構わずそれを掴み思い切り引き寄せる。真人の足が浮いた。人間離れした臂力で振り回され、窓ガラスを突き破りグラウンドに墜落する。地面に叩きつけられる寸前に足の形状を変え、ダメージを最小限に抑える。

真人の頭上に影が差した。拳を構えた虎杖が落ちてくる。咄嗟に真人は後退した。

全体重と落下エネルギーを合わせた一撃が真人をかすめて地面に突き刺さる。衝撃でグラウンドが陥没した。

着地の動作を全く考えていない特攻に真人は思わず笑った。

「ずいぶん必死だね。そんなに順平のこと気に入ってたのか、それとも」

虎杖は真人の腕を掴み、腹に蹴りを叩き込む。しかし、近付きすぎたせいで逆に真人の体から飛び出した棘に貫かれた。

虎杖の体を抉りながら真人は唇を吊り上げる。

「なんにもできず無駄死にしたあの呪術師の方かな？」

「テメエ……！」

「ま、どつちでも良いよ。俺の目当ては君じゃないし」

つぎはぎの手の平が虎杖の腹に触れた。宿儺に接触すべく無為転変を奔らせる。

宿儺を味方に引き入れることができれば万々歳だ。

真人の目に積み上がった骸の上に鎮座する呪いの王が映る。

「あの阿呆天坂の死に方は傑作だった。が、俺の魂に触れるなどとんだ痴れ者だな」

絶対零度の視線が真人に注がれる。

「共に小僧を腹から啗った仲だ。今回だけは許そう。二度はない。さっさと失せろ」

その言葉を最後に真人は宿儺の生得領域からあつさりと弾き出された。

傷が広がるのも構わず虎杖は真人の頭を掴む。

「オマエの目当てなんて知るか」

真人の顔面に全力の頭突きを見舞う。回復の間など与えない。何度も額を叩きつけ、砕けた顔面をさらに蹴りで潰す。

頭は未だ殺意で煮立っている。怪我なんてどうでもいい。どれだけ血を流そうとも、たとえ共倒れになろうとも。

「(っ)で絶対に殺す」

12. 前途有望

殺せる。

血を飛ばしながら拳を振るう虎杖には確信があつた。七海が駆け付けたことで戦況はより虎杖に有利なものになった。

既に手負いだった真人を二人で着実に追い詰めていく。

相手はもう領域展開すら使い切っている。領域の結界を破壊し侵入したとき、虎杖本人にも自覚がないほどのわずかな時間の自失。それが過ぎ去った時にはもう真人は瀕死の体だった。

最後の呪力をふり絞って体を肥大化させた真人を前に、虎杖の脳内は凧いでいた。

もはや虎杖の頭に雑念はない。ただ、目の前の存在を祓^祓う。

ここで虎杖が全力の拳に呪力をドンピシャで乗せられたのは偶然ではない。

もともと悪癖として体に染みついていた逕庭拳。しかし、目の当たりにした吉野の末路と天坂の死に、一時的に脳のリミッターが外れた状態になっていた。それが逕庭拳と呪力を同時タイミングで打ち込む打撃との無意識的なスイッチングとして表れていた。

そして、そんな状態からひたすら殺すことに集中した虎杖の放った一撃に黒い火花が

散ったのも必然だった。

『黒閃』。

渾身の打撃が肥大化した真人の腹に突き刺さる。しかし、手応えはなく風船のように膨れていた体はあっさりと弾けた。何が起こったか分からず思考が一瞬停止する。

視線を走らせる。排水溝へ吸い込まれていく真人が手を振る。

「バイバイ宿讎の器。今度はちゃんと殺してあげるよ」

「まっ……」

追おうとして全身に走る激痛に倒れ込んだ。集中力が切れたことで今まで感覚の隅に追いやっていた痛みに動けなくなる。

視界がかすんでいく。何か呼びかける七海の言葉を理解する前に虎杖の意識は途切れた。

「ここにいましたか。安静にしてると言われたでしょう」

高専敷地内の死体安置所。里桜高校から回収された遺体が並べられた台の間に虎杖はうずくまっていた。側にある遺体袋には吉野と天坂が物言わず収まっている。

ゆるゆると虎杖が顔を上げた。泣き腫らした目元が赤くなっている。

「…ナナミン。俺、誰も助けられなかった」

「いいえ、私は君に助けられました。あそこにいた生徒たちも」

ぼつり、と呟かれた言葉を七海は否定した。否定しなければならなかった。

大人として虎杖だけに重荷を背負わせないようにするためだけではない。それが事実だからだ。

たとえ、真人の領域展開を破ったのが宿儺だったとしても、あそこで虎杖が結界を壊して領域内に侵入するという選択を取らなければ七海は間違いないで死んでいた。

七海は膝を折り、虎杖と視線を合わせる。

「吉野順平の救出が間に合わなかったのは私の落ち度です。君のしたことが無駄だったわけじゃない」

これについては少しだけ嘘が混じっている。

回収された遺体で一つだけ真人のものではない残骸が残っているものがあつた。個人を判別するのも難しいほど執拗に顔面が殴打され、全身に呪力による毒が回っていた。あの場に呪術を扱える人間は七海を除けば四名のみ。術式を考えれば犯人など分り切っている。

吉野が虎杖の説得に応じ、呪術師としての道を決意したとしても彼はすでに一般人を

手にかけて後だ。五条が手を回したとしても、上からは呪詛師の烙印を押されていたであろう。

しかし、それを虎杖に伝える必要はない。吉野の家から発見された宿儺の指についても同様だ。

「でも、俺人を殺したよ」

虎杖は視線を自分のつま先に落としたまま言葉を紡ぐ。

祖父がそうだったように、人はいつか死ぬ。それならせめて正しく死んでほしいと思っていた。だが、今回の目の当たりにした惨劇と自分が引き金を引いたことでもう何が「正しい死」なのか分からなくなった。

吉野も天坂もあんな風に死んでいい人間じゃなかったはずだ。それなら虎杖が殺した改造人間たちは自分に殺されるべき存在だったのだろうか。どちらも同じ命であるはずなのに。

「引きずるな、と言っても君は背負って進むのでしょね。その道はきつととても辛いものになりますよ」

どこか悲しそうに七海は目を細め、立ち上がる。

「せめて、死なないようにして下さい。今日の私のように君を必要とし、君に助けられる人はこれから先大勢現れる」

なにより、と一度言葉を区切る。一瞬の逡巡の後、七海はその言葉を口にした。

「君の友人は、まだ生きているんですから」

七海の足音が遠ざかっていく。

虎杖はまだ立ち上がれない。少しだけ鼻をすすってまた膝に顔をうずめた。

天坂は五条に呼び出された。虎杖にこっそり形代をついて行かせたことに関するお説教だろうか。現場には形代の死体が残っていたはずだ。流石に言い逃れできない。

大人しく説教を受けようと腹を決めてから扉を開けると、そこにいたのは五条ではなかった。

「君が天坂くんですか」

サングラス越しに冷たい視線が向けられる。

七海建人。冷や汗が吹き出した。

落ち着いて考えれば分かったことだ。呪術師界きつての『まともな大人』の七海が、任務を任されていないはずの学生が勝手に呪霊がいるであろう現場について行った上に常人が見ればS A N値が消し飛びそうな死に方をしたとなったら、それが本体でなかつ

たとしても黙っているはずがない。

「そうです。七海さんですよ、はじめま……」

「挨拶は結構です。どうして呼び出されたかは分かっていますか」

めちやくちや怒ってるじゃん。

湯気のように立ち昇る怒気が隠せていない。率直に言つて半端じゃなく怖い。んなら夜蛾学長より怖いかもしれない。

説教に耐えようとしていた心が早くも折れそうだ。

「勝手に悠仁について行つたからですか」

「半分正解です」

腕を組み、眉間に皺を寄せる七海の姿はインテリヤクザにしか見えない。

人格的な意味でも曇らせの意味でも天坂は七海という人物がけっこう好きだ。人としての在り方や過去、虎杖に呪いを残す死に方も含めて満点である。しかし、そんな呑気な考えはあくまで紙面で見えていたからの話だ。実際に前にするとプレッシャーで縮こまるしかない。

「分かりませんか」

低く掠れた声により威圧感を強める。素直に領けば、七海は深くため息を吐いた。

「一番の問題は君が虎杖くんを止めなかつたことです」

言いながら、七海はサンングラスのブリッジを押し上げる。

力なく遺体に寄り添う虎杖の姿が、同級生の死を前にただ座り込むしかなかったかつての無力な自分に重なった。

呪術師である以上、死はすぐ隣にある。時には他人のために命を投げ出すことを仲間
に強要しなくてはならない。七海の同期もそんなクソみたいな覚悟を押し付けられて
若い命を散らした。

こんな仕事をしている以上、仕方のないことだと分かっている。それでも自分と同
じ絶望を味わう人間は少ないほうがいい。ただでさえ虎杖は人より多くを背負ってし
まっているのだから。

「君の術式のことには五条さんから聞いてます。友人が心配なのも分かる。しかし、虎杖
くんを大切に思うなら君は一緒に行くべきではなかった」

「…悠仁がそれを望まなくてもですか」

「そうです。常に共にあることが正解とは限らない」

平和な環境で切磋琢磨できるならばそれに越したことはない。だが、呪術師という道
において自分の存在が相手の弱みになることも、足枷になることも死に直結する。

昔の七海がそうだったように。

「虎杖君を殺したくないなら、忘れないように」

「……分かりました」

「では、お説教はこのへんで」

肩を落とす天坂を一瞥して、七海は部屋を出る。本当ならこういつたことは担任である五条の役目なのだろう。だが、他ならぬその五条に天坂を叱るように頼まれた。曰く、天坂相手には怒りにくいのだとか。

後ろから扉が開く音が聞こえる。七海の背中に天坂の声が投げかけられる。

「七海さん、俺強くなります。悠仁を殺さないためだけじゃない。少しでも隣にいたいとが正解だと思えるように」

七海は足を止めて振り返る。若く、真つ直ぐな意志を宿した瞳は、年を重ねた七海には少々眩しすぎる。

「頑張りなさい」

自分でもらしくない言葉が出たと思う。五条が叱りにくいわけだ。

今度こそ七海は振り返らずその場を後にした。

「五条先生」

虎杖の顔はひどく憔悴していた。七海から事のあらましは聞いていたがここまでとは。

「なに？」

「……快里、生きてるよね？」

「勿論。今頃二年生たちにしごかれてるんじゃない？」

「会えたりできないかな」

「……今？」

「うん」

天坂は虎杖の生存を知っている。もうすぐ交流会もあるため、多少なら会わせること自体に問題はない。しかし、こそこそ天坂だけ呼び出すのが周りの目にどう写るか。

虎杖に待つように言ってからスマホを取り出す。2コール目であっさり通じた。

「あ、快里？今大丈夫？」

「大丈夫ですけど、どうしたんですか急に」

「いやー、悠仁が会いたいわって言うてるんだけどこっそり抜けて来れる？」

「……形代残しておけば大丈夫だと思います」

「おっけー。じゃあなる早でよろしく」

通話を切る。固唾を飲んでこちらを見ていた虎杖に親指を立てる。

「すぐ来るって。座って待つてなよ」

その言葉にほんの少しだけ安堵した表情を浮かべているが、まだ顔が強ばっている。

無理もないのだろう。名前で呼ぶほどに仲を深めた相手と本物ではないとはいえ親友を目の前で呪霊に殺害された。

監視対象だった吉野は人型呪霊の術によつて体を改造され、天坂に至つては体が粉々に砕かれて見る影もなかったと報告にあつた。

そして、さらに不幸なのは吉野が一般生徒を殺害していたことで、彼の死に正当性が出てしまったことだろう。

まだ十代の若者が背負うには重すぎる。

五条にできることは今にも首を吊りそうな顔をしている生徒の願いを叶えてやることだ。

顔を見るまで安心ができなかつた。

あの光景が臉に焼き付いて離れない。つぎはぎの手が触れる瞬間、天坂は確かに自分を見ていた。

『ゆうじ』。

声は聞こえなかったけれど唇の動きだけで何を言っているか分かった。分かっ
てしまつた。

気を緩めたらこのまま動けなくなりそうだ。

早く顔が見たい。天坂が生きっていると実感したい。震える両手を組んで祈る。

「悠仁」

弾かれたように顔を上げる。聞き間違えるはずがない声。

ジャージ姿の天坂が扉の前に立っていた。

喉が震える。嗚咽混じりの吐息を吐き出した。目の前がみるみるうちに歪んでいく。

「悠仁？」

「か、いい。おれ……」

「落ち着け、俺はここに居るから」

隣に座つて背をさすつてくれる手が温かい。生きている。

「お、お、れ、順平を、たすけらんなかった。順平の母ちゃんも、快里の、ことも」

堰を切つたように涙がこぼれ落ちていく。しゃくりあげているせいで上手く言葉が
出てこない。縋りつくように天坂の服を掴む。

背中にある手の平が虎杖の呼吸を落ち着かせようとゆつくりと上下する。

「おれなら、助けられた、のに。とどいてたのに」

「……いや、俺のせいでもある。ついて行くとか言つといて結局なにもできなかつた」
違う。自分の認識が甘かつた。

心のどこかで宿讎がいればなんとかなると慢心していた。呪いはどれだけ言葉が通じようとも人間とは相容れないのだと、ちゃんと理解できていなかった。

それが吉野の死という結果を招いた。一歩間違えれば天坂さえ喪つていたかもしれない。

あの瞬間を何度も夢に見ては飛び起きた。眠ることが怖かつた。

「悠仁、一人で背負わないでいい」

変わらない優しさが向けられる。これすら手からこぼれ落ちてしまっていたら、きつと虎杖は立ち上がれなかつた。

「俺も一緒に背負うから」

なら、前に進むしかないじゃないか。

もう何が『正しい死』なのか分からない。それでも、この後悔も殺意も引きずつて生きていくしかない。

『正しい死』が何なのか分かるまで、あの呪霊を殺すまで。

もう、負けられない。

虎杖の震える背中を見下ろしながら天坂は笑っていた。

まさか自分の死がここまで虎杖にダメージを与えるとは思っていなかった。

泣き腫らした顔でこちらを見たときはうっかり「大丈夫？もう一回無為転変いっとく？」とか口走りそうだった。

これは俄然楽しみになってきた。

虎杖が天坂を精神の大部分の支えにしているのはこれで分かった。その支柱が折れた時、虎杖の心はどこまで壊れるのか。

こうなれば是が非でも渋谷事変まで生き残りたくなる。もし、あの宿儺による虐殺の果てに見る更地の一部に自分親友がいるならば、虎杖は今以上の感情の震えを見せてくれるに違いない。

それなら一層強くならなくては。七海の言う通り、虎杖を生かすために。最後の最後まで隣にいられるように。

自分よりも筋肉質な背を撫でながら天坂は願う。

もつと喪いたくないと思ってくれ、手放したくないと願ってくれ。

親愛の積み重ねの果てに待つ最期の時は、きつと天坂にとつても忘れられない瞬間に

なるだろう。

番外編. 今昔之感

虎杖は夜道を歩いていった。

もう交流会は目前に迫っている。五条曰く、そこで虎杖の生存を公開するのだそうだ。そのため人気の少ない時間帯なら外出が許された。

窮屈だった地下から出て、閑散としたベッドタウンを歩くのは久しぶりに解放感を与えてくれた。

そんな夜の散歩で出会った親友と同じ名前の少年。海里は夜になると鬼が出ると言って夜の公園に一人でいた。

祓つても祓つても現れる鬼に、どうしたものかと頭を悩ませたが五条のアドバイスでようやく自分のやるべきことが分かった。

海里の母親と海里の後ろ姿を思い出す。寄り添って家の中へ消えていく二つの背中
は血の繋がりがなくても親子そのものだった。

きつと、救えたのだと思う。

少し遠回りにはしてしまっただけけれど、親子の間にあつた溝はアグレッシブな婆ちゃんも
とい鬼とともに消えた。

もうあの家に鬼が出ることはないだろう。

これで自分の気持ちに整理がつくわけじゃない。起きてしまったことは無くならな
いし、失ったものは二度と戻らない。

だけど、沈んでいた心が少しだけ軽くなったように思う。

高専に戻る道すがら、海里と出会った公園に立ち寄った。しんと静まり返った公園の
ブランコになんとなく腰かける。

昔、天坂とも散々公園で遊び回っていた。ふと、遊んでいたときに怪我をしたことが
あったことを思い出す。

当時、ブランコを立ち漕ぎして一番高い位置でジャンプし、周りの柵に飛び移るとい
う子供特有の度胸試しのような遊びが流行っていた。

もちろん虎杖も天坂も例に漏れずそんな遊び方をしていた。

一度だけ、雨上がりで柵が滑り虎杖は怪我をしたことがある。両膝を盛大に擦りむき
血まみれになった。

立ち上がれないほど痛かったが、虎杖は泣かなかった。祖父に「男なら泣くんじやない」と言い聞かされていたため、自然と我慢するクセがついていた。

天坂に肩を借りながら水道で砂利と血を洗い流していると、天坂はぼつりと呟いた。「よく泣かなかったな」

俺だつたら絶対痛くて泣くのに、と皮がめくれた膝を見下ろしていた。

祖父の言葉を借りて説明すると少しだけ嫌そうな顔をされた。

「でも、泣きたいとき泣けないのは辛いだろ」

そう言った天坂の横顔は自分よりずっと大人びて見えた。

なんとなく、泣くことはカッコ悪いと思っていた。祖父の教えのこともそうだが、泣いていると周りは冷やかすし、一人だけメソメソするのもなんだか性に合わなくていつも我慢していた。

「カッコ悪くねえよ。少なくとも俺は思わない」

ベンチに座った虎杖の前にしゃがんで濡れた膝をタオルで拭く。

「痛かっただろ」

優しい声に、じわりと目頭に熱いものが滲んだ。本当はすぐに泣き出したいほど痛かったし、滑った瞬間はすごく怖かった。

一度決壊すると止まらずどんどん涙が溢れてくる。鼻水をすする虎杖の涙を拭いな

がら、天坂は何故か少し嬉しそうに微笑んでいた。

泣き止む頃には膝はすっかり血が止まって乾いていた。少し皮膚が突つ張るけれど、痛みは大分マシだ。

涙のあとが残つてひりひりする頬を擦りながら虎杖は笑った。

「快里つて兄ちゃんみたいだ」

「オマエ兄ちゃんいたことないだろ」

「そうだけど、兄ちゃんがいたらこんな感じなのかなつて」

優しく、困ったときに手を差し伸べてくれる。血の繋がりはないが肉親と同じくらい近い。

キョトンとした顔をしてからなんだそれ、と天坂は吹き出した。

あたたかい記憶。今でも虎杖を支える大切なものだ。

虎杖はブランコの上に立つ。ぐつと膝を折り曲げて勢いよく漕ぎ出した。

昔よりずっと高くなった目線。風を切る音が幼い頃より鮮明に聞こえる気がする。

ぐんぐんスピードは増していき、ブランコが軋む。

一番高い位置で、足場を蹴った。大きく跳躍して柵を右足で踏みしめる。昔の足を滑らせた感覚が一瞬頭をよぎる。今度は足から力を抜かない。

もう一度力強く跳んで、ふらつくことなく地面に着地した。

「……帰るか、俺も」

いつまでも転んだままではいられない。

以前は届かなかったけれど、自分が救える人がまだいるはずだ。

全部じゃなくてもいい。この手が届く範囲にいる人を守るくらいに強くなろう。

一度死んだとき、伏黒はどんな気持ちだっただろうか。釘崎は、天坂は、悲しんだだろうか。

少なくとも良い気持ちではないだろう。それを虎杖は身をもって知っている。

それならなおさら前に進まなくては。

祖父を心配させないために。

伏黒と釘崎に心配ないと伝えるために。

天坂とともにあるために。

想いを胸に虎杖は帰路へ向かう。

揺れていたブランコはやがて止まり、夜の公園に静寂が戻った。

13. 暗雲低迷

漏瑚は山奥で五条にやられた傷を癒していた。

真人もかなりのダメージを負っていた。

呪力を振り絞った領域展開は宿儺によつて呆気なく破られた。まだ指二本分だけのはずなのにあの存在感。真人たち呪霊とはそもそも魂の格が違う。

宿儺さえいればこれから先、呪いの時代がやってくると確信した。だが、なぜか宿儺は虎杖の縛りを受けなかった。

「宿儺の器はどうだった」

「天敵なうえに思つてたよりずっと強かつたよ」

真人は悠然と湯の中を泳ぐ。

真人は率直に言えば虎杖をナメていた。宿儺の器であろうと、所詮まだ理想と現実が一致していないバカなガキだと思つていた。

そんな慢心が誤算に繋がった。

特に最後の一撃。あれをもろに食らつていたら真人は確実に殺され祓さわわれていただろう。

本来なら虎杖を下して宿儺を仲間に取り入れる予定だったがあの様子だとかかなり厳

しそうだ。

宿儺を関心をこちらに向けさせるなら夏油に言われた通り、指を集めて献上してしま
うのがいいだろう。

しかし、困ったことに真人は虎杖を殺したくてしようがない。

もちろん目的のために殺意は引つ込めなくてはならないが、魂は何度だって殺せる。
その取っ掛かりは既に得ている。あの時は何も考えずに殺してしまつたが、あれが分身
であるならば見つけるたびに繰り返し虎杖の目の前で殺せばいい。吉野の時もだつた
が、あの術師を殺した後の虎杖の反応はそれはもう吐き気がするほど笑えた。

「あ、そうだ。虎杖といた別の術師がさ、全然強くなかつたんだけど俺無為転変の術式避けたんだ
よね」

ピクリ、と夏油の肩が動いた。漏瑚も関心がわいたのかわずかに身を乗り出す。

「避けた？」

「何て言えば良いかな。最初見たときは確かにそこに生きてたのに、魂まで届かなかつ
たんだよね。てつきり本体だと思つてたのに分身？ だつたつて言うか。でも死体が
残つてたからただの分身つてわけでもなさそう」

「なんだその術は。気色の悪い」

「でも利用し甲斐はありそうだよ。アイツを殺したら虎杖のヤツ面白いくらい動揺して

たし」

「つまり虎杖悠仁の弱みか」

「多分ね。あと、宿儺にも面識あるっぽいんだよねー」

夏油は真人の言っている人物に心当たりがあった。

以前に宿儺の指を取り込んだ呪胎が少年院に現れたとき、派遣されたのは虎杖を含めた四名。そのうち二名は戦線を離脱。虎杖ともう一人が生得領域に残ったと聞く。

気になったのはその件での死亡者が虎杖ただ一人だけだったということ。

生得領域に残ったはずのもう一人は生還した。

宿儺に交代した虎杖と指を取り込んだ特級呪霊がいる領域内にとった一人でいたにも関わらずだ。

呪術師とはいえまだ大した戦闘経験もないであろう人間がそんな環境で生きていられるとは考えにくい。それこそ、あの宿儺が相手を生かすに足ると判断した場合を除いては。

これは面白いものを見つけたかもしれない。

夏油は人知れず口角を吊り上げた。

交流会当日。五条と七海は時間まで待機していた。五条は長い足をテーブル上に投げ出し、退屈そうにしている。

「七海ー、なんか面白い話してー」

「断ります」

「じゃあ廃棄シユークリームでキャッチボールしながら教育委員会の闇を暴露しよう。動画にしてサイトに上げようぜ」

「お一人でどうぞ」

「ナナミンのー！ちよつといいとこ見てみたーい！」

「その手のノリは虎杖くんに。今バカっぽさが必要なのは彼の方でしょう」

叩いていた手を止めて五条は黙る。

虎杖はそれなりに回復してきたように見える。あくまでもそれなりにだ。今でこそ普段通りに戻ってきてきているが、少し前までは笑った後にふと思いついたように表情が陰る瞬間があった。

強くなるために重めの任務を受けてもらうとは言ったが、里桜高校の一件は虎杖自身か思っている以上に尾を引いているのは明白だった。「重いつてそういう意味じゃなかったんだけどなー」

ため息をつき、ずり落ちてきた目隠しを押し上げる。

「快里はどうだった？」

「素直でしたよ。あの様子なら同じことは繰り返さないでしょう」

「ちなみに何て叱ったの？」

『常に共にあることが正解ではない』と

「……オマエに頼んで正解だったよ」

天坂は虎杖に対して献身的すぎる節がある。

人知れず術を使って虎杖に形代を同伴させたのも虎杖の身を案じてからということ
は伊地知から聞いている。というか詰め寄って吐かせた。

友達を想うことが悪いわけではない。しかし、形代が死亡したであろう時刻とほぼ同
時に天坂自身が体調不良に見舞われたと伏黒に聞いた。死んだ分身の記憶を引き継げ
るなら、彼の脳内に何が起こったかなんて容易に想像がつく。『形代が死んでも本体が
生きているからオツケー』なんて判断を繰り返していたら先に天坂の精神がおかしく
なってしまう。

だからこそ現場にいた人間からの指導が必要だと思った。

五条は七海を信頼している。社会経験があるというのもそうだが、七海は失う側の痛
みを知っている人間だ。

少なくとも、五条では先ほどのような言葉は出てこない。

「で、指は？」

「上に提出しました。あなたに渡したら虎杖くんに食べさせるでしょう」

「チツ」

「おーい、先生ー！あ、ナナミンもいる」

明るい声とともに虎杖がやって来た。仲間との再会に胸を躍らせ目を輝かせる虎杖に暗さは微塵もない。その様子に七海は心の中だけで安堵した。やはり強い子だ。

早く早くと急かす虎杖に五条は真剣だった表情を引っ返めてニヤリと笑う。

「まさか悠仁、ここまでできて普通に登場するつもり？」

「エツ違うの」

「死んだはずの仲間が実は生きてたー、なんて呪術師やってもそうないよ。というわけ」

ビシツと虎杖に人差し指を突き立ててキメ顔を作る。

「やるでしょ、サブライズ」

「サブライズ……」

いまいちピンと来ていなかった虎杖も五条の熱弁、という名の悪ふざけの提案に乗り気になったのか即答で是を返した。

やれどうするか、なにすればいいかと賑やかな会話を聞きながら七海は英字新聞に視線を落とした。

「許さんぞ乙骨憂太ー！会ったことねえけどよー！」

釘崎の元気な絶叫を聞きながら天坂は考えていた。

ついに来た交流会。時系列通りに進んでいるなら途中で花御と呪詛師たちの介入がある。が、少しだけ気がかりなことがある。

今は本当に原作通りに進んでいるのかということだ。以前は深く考えていなかったが、五条にさり気なく聞いたところ、やはり吉野のイジメの主犯だった生徒は死亡していたらしい。こちらに影響があるほど大きな変化ではないが、不安なのはその改変が天坂の存在によって引き起こされたらどうということだ。

本来なら虎杖が体育館に乗り込んだことで犠牲者は出なかったはずのところを自分が出発前に虎杖を引き止めたことでズレが生じた。時間にすればわずかなズレだが結果として原作にない出来事が起こっている。無事に渋谷事変を迎えられるのか若干不安になってきた。先の展開を知っているというアドバンテージが機能しなくなるのは

勘弁してほしい。

本音を言えば東堂、虎杖と花御の戦いに介入しようと思えばできるが入れない、というより入りたくない。

戦いが人間離れしすぎているのに加えて、東堂と虎杖の間に生まれる謎世界観について行ける気がしない。傍から見てる分には面白いけどあれマジで何なんだろう。

「大丈夫か」

伏黒に声をかけられたことで思考を中断する。

「ああ、悪い。考え事してた」

「来たぞ」

伏黒の視線を追うと京都校の面々が揃っていた。

釘崎は早速血気盛んに絡んでいつている。ぼんやりその様子を眺めていると東堂と目が合った。なぜか射殺さんばかりに睨まれる。即行で目を逸らしたがまだ視線を感じる。

「なあ、東堂さんすげーこっち見てないか。何したんだ」

「オマエと一緒に半殺しにされかけた記憶しかねえよ」

「半殺しになってたのは形代だけでオマエ軽傷だっただろ」

「仕方ないだろ。あんなゴリラと真つ向からやり合ったらまず死ぬって」

ひそひそ話し合っているとようやく五条がやって来た。

「おまたー！お土産持ってきたよー！」

出張土産の謎の人形を京都校生たちに配ってから、台車に乗った箱をくるりと東京校生に向ける。人一人入りそうな箱が揺れ、中から出てきた人影が蓋を吹っ飛ばす。

「はい！おっぱびー！」

「故人の虎杖悠仁くんですー！」

満面の笑みで箱から飛び出した虎杖に場が静まり返った。伏黒と釘崎は盛大に顔を引きつらせている。

「あれ!?全然ウケてない!？」

独特のポーズのまま固まる虎杖を天坂が笑いをこらえながらスマホで撮影する音だけが場違いに響いた。

虎杖生存サプライズが見事に滑ったあと、東京校の面々はミーティングを行っていた。

「あの一、これは見方によってはとてもハードなイジメなのでは？」

「うるせえ、暫くそうしてろ」

「ていいうかなんで俺まで」

虎杖は遺影の額縁を持たされて正座させられていた。その横で天坂も同様に正座させられているが、膝に釘崎の藁人形が置かれている。暗に「動いたら共鳴りの刑に処す」と言われているようなものだ。

天坂の言葉に釘崎のこめかみに血管が浮く。トンカチを天坂の頬にごりごりと押し付ける。

「『なんで』？オマエ虎杖生きてんの知ってただろ？妙にリアクションうつすいと思ったわ」

「いやまあそれは口止めされてたし…」

「こつちがどんだけ心…、情けねえ面するかと思つてたのによお」

「いででで尖つてる方はやめてくれ」

釘抜き部分で肉を削る勢いで頬を擦られる。

悪いとは思つているので抵抗せずやられながら、やはり気を遣つてくれていたのか、と納得する。

表向きに虎杖が死んでから、荷物持ち買い物をはじめとしてゲーム会に誘つたりと、釘崎はけっこう頻繁に天坂を引っ張り出すようになった。意外にも嫌がりそうな伏黒もそれ

に付き合うことが多かった。二人とも顔にも態度にも出さないが、気を回されていることに気が付かないほど天坂も鈍くはなかった。

「悪かった。ありがとな、釘崎、伏黒」

「ヘラヘラすんな」

「悪かったって痛い痛い」

「そのへんにしてやれ野薔薇。で、どうする？人数増えちまったから作戦変えるか」

「おほか」

「そりや悠仁次第だな」

「殴る、蹴るなら得意っすよ」

「そういうのは間に合っつてんだよなあ」

シヨックを受ける虎杖を一瞥してから伏黒が補足を入れる。

「コイツが死んでる間何してたか知りませんが、東京校と京都校、両方が呪力なしで戦った場合、勝つのは虎杖です」

きっぱりと言いつける伏黒に二年生は目を丸くする。真希は視線を天坂に向ける。何を問われているのか察して先に口を開く。

「伏黒の言うとおり、肉弾戦でなら悠仁が圧倒的に有利です。体術だけなら東堂さんに並ぶでしょうね」

「へえ」

伏黒と天坂は以前に東堂と戦っている。その二人がここまで言い切るといことはかなり期待ができそうだ。

もともと天坂がいる時点でこちらには数の有利がある。うまく立ち回れば圧勝も夢ではない。

真希は不敵にほくそ笑んだ。

東堂はイラついていた。

下らない暗殺作戦も、高田ちゃんの推し活を邪魔されるのも気に入らない。

なにより、気に入らないのは東京校の天坂の存在だ。

以前、東堂は東京校に行った際に伏黒と天坂に会っている。そのとき天坂に女のタイプを聞いた。

曰く「笑顔が可愛いよく笑う子」だと。だが、それに違和感を覚えていた。どこか本音ではないと東堂の勘が告げていた。

戦い方も気に入らない。本体はのらりくらりと攻撃を躰し、分身の方は死んでも構わないといわんばかりの捨て身。実に漢らしくない。

人は追い詰められた瞬間に本音が出るものだ。今度こそ、それを引きずり出してやる。

高田ちゃんが出演予定の番組をつけ、東堂は推し活に意識を切り替えた。

14. 咄咄怪事

東堂葵には親友がいる。

虎杖悠仁とは中学校からの仲だ。初めて会ったときから女の好みはなが合あい、互いの存在が日常に加わるのに時間はかからなかった。

「俺、高田ちゃんに告白する」

「やめとけて！落ち込んだオマエ慰めるのすげーめんどいんだぞ！」

「なぜ俺がフラれるのが前提なんだ」

虎杖が口ではそんなことを言いつつも付き合あいが良いことを東堂は知っている。

「そもそもなんでオツケー貰もらえると思おもってんだよ」

「古い言葉でこんなものがある。「落ちたら、またはいあがつてくればいいだけのこと。」と」

「それ言ったの猪木だし玉砕してるじゃねーか」

結局、高田ちゃんには「好きな人がいる」と笑顔のままラブレターを破られてしまった。しかし相手に変かに気きを持もたせることをせずハッキリ断きるあたり彼女らしい。そんなところも好きだ。というか全部好きだ。

それはそれとして当然落ち込む。誰だ自分以外で高田ちゃんの愛を受けているヤツは。

「好きな人が俺ってパターンは」

「いや、無いだろふつう。てかどつから来るのその自信」

ばつさりと否定されてさらに落ち込んでいると軽く頭をはたかれた。屈託ない笑顔で虎杖は東堂の背を押す。

「オラ、いつまでもヘコんでんなよ。ラーメンくらいなら奢ってやつから」

そんな虎杖の優しさに東堂は涙を拭い、ともに歩き始めた。

眩しいまでの青春のページ。言葉にせずとも信頼は確かにそこにある。互いに必要とし、ときには背を預けられる関係は心地が良かった。

そして、そんな『親友』との関係は高校生になった今でも続いている。

ここまでが東堂の脳内に駆け巡った存在しない記憶である。

「どうやら、俺たちは親友のようだな…」

「違いますけど…」

虎杖は混乱していた。

事前に立てた作戦通り自分が東堂の足止め役になり、他のメンバーがばらける隙を作った。なぜか東堂は真つ先に天坂を狙いに来たがギリギリ間に割り込んで逃がすことには成功した。ボコボコに殴られつつもなんとか気を引いていたら唐突に女の好みタイプについての問答が始まった。頭の中で天坂と伏黒が言っていたやつか、と思いつつ素直に答えた結果がこれだ。

ただでさえよく分からない状況なのに京都校の面々に殺されそうになったり、かと思えば仲間割れを始めたりとさらに混乱を極めていく。

東堂と何やらやり取りをした後、京都校のメンバーは撤退していった。現状が分かりやすくなったのはありがたい。

今は、この目の前の大男を相手にすればいい。

東堂の心は踊っていた。天坂は逃がしてしまつたが、それ以上に大きな収穫。

虎杖悠仁は強い。人間離れした耐久力タフネス、力任せではなく地形も積極的に取り入れる頭もある。何より少ない呪力でも打撃が成立するほどの膂力。

しかも戦い始めてからわずか数十分の間で虎杖は東堂の技術を食い、確実に戦況に順

応している。

これほど伸ばし甲斐のある相手はそうそういないだろう。だからこそ、惜しい。

虎杖の打撃を額で受け、東堂は反らしていた上体を起こす。

「虎杖、そのスイッチングは無意識でやっていることだな？」

インパクトが遅れてやってくる『逕庭拳』と全力の呪力がドンピシャで乗った強力な打撃の不規則な切り替えは強い武器だ。無意識的にやっているからこそ次手が読めず、相手は対応にコンマ数秒の躊躇が生まれる。並の術師なら対応しきれずに切り崩されるだろう。

「だが、それはあくまで初見殺しにすぎない」

無意識であっても人間がやることである以上、どうやっても癖やパターンが出てくる。一度戦ってしまった相手であれば次は対策をされてしまう。

「それでは特級には通じないぞ」

虎杖の表情が分かりやすく歪んだ。既に通じなかった状況を経験しているのだろう。ならば、答えを出すのは難しくない。

「どうする、親友」

「……俺の意志で自由に切り替えができるようになる」

「so good. ではどうすればいいか。自分が使っている攻撃をきちんと理解する

ことだ」

虎杖の天性のフィジカルだからこそ無意識でもできてしまうこと。逆に言えば構造も仕組みも理解できていないということだ。現代人が感覚でスマホやパソコンを使えるのと同様に、『できる』がその程度で100%のパフォーマンスを引き出せるかと問われれば否だ。

呪力の流れを、自身の戦闘スタイルを、理論的に考え戦況に合わせて最適解を出せるようになればそれは確実に格上の相手にも通じるようになる。

「呪力は負の感情。体の内側から自然と湧きあがってくるエネルギーだ。だが、それをどう扱うかは術師次第。虎杖、無意識と考えないことはイコールではない。常に頭を回して、己ができる最大限を思考し続ける」

自分の拳を見下ろしていた虎杖は顔を上げる。瞳には一切の曇りはない。

「…ありがとう、東堂。よく分かんねーけど、分かった」

呪力をまとい、腰を落とす。自分に何ができるのか考えろ。

「このまんまじゃ快里に追いつけねえもんな」

虎杖の言葉にピキリ、と東堂の額に血管が浮いた。

「マイベストフレンド虎杖、どういうことだ」

「え、」

東堂の態度の変化に虎杖は固まった。ただでさえ強面な顔がさらに凄みを増している。

「いや、快里に追いつけなきゃ守ることもできねえなつて……」

東堂の存在しない記憶にノイズが走る。

麗しい青春に水を差す存在。穏やかな物腰に反して、腹の底を見せない人物。

『悠仁』

優しい声音さえ真意がどこにあるのか分からない。それでも虎杖はその声の主に駆け寄って行ってしまう。そこが自身のあるべき場所だと疑いもせず。

深く息を吐き出した東堂は地の底を這うような声を絞り出す。

「やはり、逃がしてはならんな」

拍手が響いた。かさわで二人しかいなかったはずの空間に三つ目の人影が出現する。

いつの間にか天坂が虎杖の反対側に立っていた。

「……え？」

声を発したのはどちらだったのか。状況を理解するよりも前に東堂の拳が天坂に叩きこまれた。

天坂の体は軽々と宙を舞い、地面に叩きつけられた。

天坂はたまたま近くにいただけだった。

真希、伏黒と行動していたが、京都校の狙いに気が付いた二人と共に引き返して来ていた。真希には呪霊討伐に残るように言われたが、代わりに形代を残すことでなんとか納得してもらった。

虎杖がそう易々と殺されるとは思っていない。でも念のためだ。自分の存在で足が掬われてしまう可能性はゼロじゃない。様子見だけしたら戻る予定だった。

「なんでこうなるんだ…」

拳が接触する瞬間に呪力で防御を張ったが微妙に間に合わなかった。モロに食らってはいないものの、あの東堂の打撃だ。受けた腕と叩きつけられた肩がびりびりと痺れている。意識が飛んでないだけ奇跡である。

「コソコソ覗くのはいい趣味とは言えんな」

「そつちこそ悠仁殺す気だっただろ」

「だが虎杖は乗り越えたぞ。オマエは隠れていただけだろう」

いやそうだけど。東堂に言われるとなんかムカつく。

自分が介入するまでもなく虎杖は強かった。いや、予想より強くなりすぎている。な

んだスイッチングって。逕庭拳だけではなかったのか。それを身に着けるのはもっと後のはずだろう。

天坂の思考など意に介さず、東堂は攻撃態勢に移る。

完全に殺る気だ。なんなら先ほどの虎杖との戦闘より気迫がある。なぜこんなにも敵視されているか分からないが、逃げるなんて選択をしようものなら確実に殺しに来るだろう。

本当にどうしてこうなった。

「さあ、今度こそ答えろ天坂。お前の本当の好みのタイプを」

15. 同床異夢

天坂は別に東堂葵というキャラクターが嫌いなわけではない。

意味不明な言動とよく分からない気持ち悪さに隠れがちだが、一般家庭出身ながらに一級術師である実力派の人物だ。

生前の夏油傑が引き起こした百鬼夜行でも活躍していたそうだし、これから起こるであろう渋谷事変でもめちやくちやオイシイ所を持っていつている。虎杖と東堂の共闘はそりやもう文句なしに最高にカッコよかった。カッコイイのだが。

呑気に紙面上の戦いを眺めていたときから思っていた。

コイツとは絶対馬が合わないだろうな、と。

「何やってんだよ東堂！」

「止めてくれるな虎杖。これは男と男の真剣な話し合いだ」

「話してねえじゃん！ノータイムでぶん殴ってたじゃん！なんで快里に手エ出す必要があんだよ！」

「必要さ。虎杖に相応しい男か判断するために」

マジでなんだこれ。

痺れを取ろうと腕をプラプラさせながら天坂は言い争う二人を眺めていた。状況的には急襲してきた東堂を虎杖が諫めようとしているのだが、会話だけ聞くと娘が連れてきた婚約者を殴った父親とそれに怒っている娘という感じである。しかし残念ながらここにいるの全員男だ。

さて、ここで逃げようものなら東堂は呪霊になど目もくれずこちらを殺しに来るだろう。それはいろんな意味で非常に困るが、東堂の求める答えがいまいち分からない。

天坂はげんなりしながら渋々口を開く。

「あの、前にもう女子の好みは言ったんですけど」

「違うな。オマエはまだ本音を隠しているだろう」

なんで分かるんだよ怖いわ。

好みのタイプが「笑顔が可愛いよく笑う子」というのも嘘ではない。

ピンク髪の魔法少女しかり、金髪ツインテールのセーラー戦士しかり、笑顔というのは曇らせ展開において非常に重要な要素であると天坂は個人的に思っている。それはもちろん虎杖にも当てはまる。

普段から笑っている人物ほど、虚を突かれた瞬間の表情の落差が分かりやすくとてもイイ。眼前にした絶望に、上がっていた口角がストンと落ちる瞬間だけでご飯三杯はいける。

そんなことを馬鹿正直に言えるわけがないのだが。

こう、もつと良い感じの言い回しがないだろうか。この目の前のゴリラを納得させ、かつ嘘にもならない『本音』。

心配そうにこちらを見ている虎杖と目が合った。

さすがに虎杖の前で「罪悪感と絶望感に打ちひしがれる女の子の姿が最高に可愛いし興奮する」だなんて言えるはずがない。

軽率に言つて変態の烙印を押されるだけならまだしも、もし虎杖に拒絶されて縁を切られてみる。プライドとか精神年齢とかいろいろなかなく捨てて本気で泣く自信がある。

かと言つて「虎杖くんです♡」と答えてもまたあらぬ誤解が生まれる。

推しではあるし人間としてもとても好ましいとは思うが、結婚したいとかさういうのではない。だいぶ歪んだ愛情があることは否定しないけども。

だって可愛いんだから仕方ない。虎杖が可愛いのが悪い。

思考が明後日の方向に飛びかけたところで再び拍手かさわが鳴った。

一瞬視界がブレる。突然目の前に東堂が現れたことで、虎杖と自分の位置が入れ換えられたと理解しても対応が追い付かない。

脇腹を狙つた鋭い蹴りが飛んでくる。呪力のガードをもつともせず、防御で上げた天

坂の腕ごと胴に蹴りが突き刺さった。骨からメキメキと嫌な音が鳴る。

「いっつ」

「どうした。答えないならここで殺す。つまらん答えでもどの道殺すがな」

殺すんかい。どうしろってんだ。

身体にまとう呪力の流れを防御から受け流しへと切り替える。焼け石に水な気はするが防御を突破されて直撃をくらうよりいくらかマシだ。

といつても東堂の動きを捌ききれるわけでもなく、受け流しきれなかった拳が顎に入った。衝撃で脳が揺れる。女子の好みの話をする余裕なんてない。なんでボコられてるかもだんだん分からなくなってくる。

こっちの打撃はたいして効いている気がしないし、東堂はよく分からないし、虎杖の曇らせが見られるわけでもないしで正直帰りたくなってきた。

「やめろって東堂ー！」

割って入ろうとした虎杖と天坂の位置が再び入れ替えられる。なおも掴みかかろうとする虎杖を今度は東堂自身と入れ替える。

「すまない虎杖。だが、オマエの親友として俺はコイツを見定める義務がある」

「……はあ？」

威圧するような声を上げたのは天坂だった。

普段の穏やかさを微塵も感じさせない声色に虎杖はぎよつとして天坂を見る。

「悠仁の親友は俺ですけど?」

「何を言う。俺と虎杖は中学からの友だぞ」

「アンタのは全部妄想だろーが!こちとら小三からだぞ!現実で十年近くの信頼と実績があるんだよ!」

「絆に時間の長さは関係ない。現に俺と虎杖は心の奥底で通じ合っている」

「それは単なる性癖の一致だろ!」

ぐらつく頭のまま振った拳はあつさり受け止められるが、咄嗟に腹に呪力を集中させてカウンターの掌打のダメージを抑える。

天坂は殴られてまくってだいたい思考が鈍ってきているのと、溜まりに溜まったフラストレーションで半ば自棄になっていた。

本心を見せないための言葉を選別しての会話をする余裕もなく、思っていたことをぶちまける。

「何言われようと俺の答えは変わんねえよ!笑顔の可愛い子が好きだ!どんなに過酷な状況でも誰かのために血反吐吐きながら立ち上がって、足引きずりながら前に進める人が好きなんだよ!その人のためなら一緒に地獄くらい落ちてやる!」

最終的に報われるなら、その過程でどれだけ曇らせてもいいと誰かが言っていた気がする

る。

だから繰り返し返し崖から突き落としたいし、這い上がるのを隣で応援したい。

「俺は！（曇らせを見るために）隣にいられば幸せなんだよ！」

東堂は一瞬目を見開き、動きを止めた。

「なるほど。ようやく腹の底を見せたな」

唐突に東堂は構えを解いた。東堂の脳内でどんなやりとりがあったか分からないが、なぜか切なそうな顔で天坂を見てくる。

「妙に具体的な物言いだと思ったが……。分かるぞ。近い存在だからこそ、言えない気持ちというものはあるものだ。俺も高田ちゃんにまだこの気持ちの全てを伝えられてはいない」

「……………ん？」

予想外の返しに熱に浮かされていた頭が冷えた。

東堂の言っている意味を図りかねる。てつきり「やつぱりつまらん」とかなんとか言われて切り捨てられるかと思っていたが、なにかおかしい。

東堂はなぜか目尻に浮かんでいる涙を拭いっつ語りかける。

「愛というのは誰に止められるものでもない。もちろん、自分自身にも。だが伝えずただそばで相手の幸せを願うというのは、美談ではあるが苦しいだろう」

「……えっと、何か誤解がある気が」

「いい、皆まで言うな。明け透けに言葉にするほど俺は野暮じゃない。しかし、オマエの気持ちを知った以上、なおさら虎マイベストフレンド杖に相応しい男になってもらわなくてはならん」

いやだから何の話だ。

本格的に混乱してきた。もともと話がかみ合うタイプではないと思っていたがまともにもコミュニケーションが取れているかも怪しくなってきた。いったい何がこの男の琴線に触れたのか。

そこでようやく天坂は約一ヶ月前の東堂の言葉を思い出した。

好みのタイプを聞いてきたとき「男でもいいぞ」と言っていたことを。

「違う!!!」

推しだけど、親友だけど、そういうんじゃないから。

確かに虎杖のことは心から好きだが方向性が違う。ただひたすら曇る姿が見たい。あわよくば自分がその原因となつて一生の傷トラウマになりたい。それだけだ。この上なく不純だが一周回つて純粋まである。

そもそも推し高田ちゃんとは結婚したいレベルのガチ恋勢の東堂と、推しは永遠に推し以外の何者でもない勢の天坂が『推し』というものに共通認識を持つことが無理だった。

全力で否定するが、一度納得してしまった東堂が聞き入れるわけもない。

「同じ友を持つ者のよしみだ。胸を貸してやろう」

「いらん！やめろ！解釈違いだ！」

天坂が東堂に掴みかかろうとしたとき、森を覆うように帳が下りた。

一級術師の中に冥冥という術師がいる。

彼女の黒鳥操術はただカラスを操るだけというものだが、カラスに自死を強制させることで呪力の制限を解放する神バードストライク 風はとてつもない威力を誇る。神バードストライク 風を防ぐことが

できたのは術師最強である五条を除いて一人もないほどだ。渋谷事変でも偽夏油が放った特級呪霊を一撃で撃破しているあたり、その威力の高さがうかがえる。

命を懸けた『縛り』はその代償の重さゆえに強力な能力の底上げを可能にする。

カラスでそれほどの強さなら、人間だったらどうなるのか。

そこで身体能力も術式も凡人の域を出ない天坂がまともに戦うための方法を思いついた。ほぼノーリスクで支払うことができる強力な代償を自分の術式なら何度でも作り出せる。

かなり倫理的に問題があるが試してみる価値はあると思った。

虎杖が離脱していた期間、天坂はこの『縛り』を自分の術式にも組み込めないかと試行錯誤していた。

もちろん形代を複数出現させるのはかなり呪力を食うし、なにより管理がおざなりになるリスクもある。だから、パドストライク神風とは少し異なる形で自分の戦い方に落とし込むことにした。

余談だが、伏黒と釘崎にそれとなく「こんなことできそうだよな」と相談してみたところ、釘崎には鬼の形相で説教をくらい、伏黒には道徳の教科書を渡された。

任務中に堂々と試すわけにもいかず、家人にもろもろの処理を頼み込んでこっそり試行するしかなかった。家人にもかなり嫌な顔はされたが。

今回は特級呪霊の出現という例外な状況であることだし大目に見てくれるだろう。多分。

東堂に絡まれる予想外の展開こそあったものの、これが特級呪霊である花御に通じるなら、天坂の望みにまた一步近づける。

魑魅魍魎がはびこる地獄と化した渋谷で死に様を選ぶために、文字通り死ぬ覚悟で挑んでみようじゃないか。

16. 竜虎相搏

虎杖は天坂の血を吐くような本音を複雑な気持ちで聞いていた。

長い付き合いから天坂がどんな子が好きそうかは知っていたし、クラスの子が好みかなんて話もしたことがある。だが、まさかこんなに具体的な話が出てくるとは思ってもみなかった。

これは完全に特定の人物を指している口ぶりだ。

親友に訪れた春を喜ぶ気持ち半分と、自分にはなにも言ってくれなかったじゃんという拗ねる気持ちももう半分。

「その人のためなら一緒に地獄くらい落ちてやる！」

なんか話の流れが怪しくなってきた。

ちよつと、いやだいぶわりと怖いくらいに熱烈すぎやしないか。

こんなにも取り乱している天坂はなかなか珍しい。普段の落ち着いた態度がここまですぐ崩れるとなると、相手への気持ちは虎杖の想像以上に大きいものだろう。だが、そんなに分かりやすく天坂が好意を示していた人が今までいただろうか。

仙台にいたときにはそれっぽい女子はいなかったように思う。本人も彼女はいない

と言っていたし。ということは高専に来てからだろう。しかし、そもそも面識のある異性の数が片手で数えられるほどしかない高専生で天坂の言葉に当てはまりそうな人なんて。

そこで虎杖の頭にある可能性が閃いた。

いや、いるわ。けっこう当てはまりそうな人。他人のために命を張ることができて、傷ついても立ち上がることができる同期の紅一点が。

思えば天坂は最初から釘崎に対して好意的であつたし、交流会前のミーティングの時だつて以前よりもかなり距離が縮まつていたように思う。普段の口の悪さとチンピラっぽさで分かりにくいのが、釘崎はかなり可愛らしい女子だ。廃ビルで子供を救出したときに見た釘崎の笑顔は間違いなく可愛かつた。

考えれば考えるほど思い当たる節がありすぎる。

最初に東堂に絡まれたときにはその場に釘崎もいたはずだ。そりや本人を前に素直に言えるはずがない。

マジか。自分が離脱している間にそんなことになつたのか。

あとで根掘り葉掘り聞いて、それでもつて全力で応援しよう、と虎杖は心に決めた。熟考していたせいで言い合いの後半は完全に聞き流していた。

突如、遠くから聞こえた轟音。その場にいた全員がそれに意識を向けたとき、空が暗

幕で覆われた。

花御は戦闘に割り込んできた闖入者を見やる。

宿讎の器、よく分からない胆力ふたてしきを持つ男、そして明らかにこの場に不釣り合いな弱い人間。

東堂は抱えた真希をパンダに引き渡し、伏黒と共に帳の外へ出るように指示する。天坂に支えられ咳き込む伏黒の口元から血が伝う。

「クソツ、なんで止めねえんだよ天坂」

「つってもなあ。五条先生が来れない以上なんとかするしかないだろ」

「いくら東堂さんがいたとしても俺たちでどうこうできる相手じゃ」

「伏黒」

虎杖が振り返る。その目に迷いはない。

「大丈夫」

伏黒の頭に少年院での出来事がよぎる。あの時と似た状況。だが、虎杖の笑顔にあるのは捨て身の悲愴な懇願ではない。

「……次死んだら殺す……天坂」

「ん？」

「頼んだ」

「おう」

パンダに抱えられる伏黒に短く返して、運ばれていくのを見送る。

「さて虎杖、俺はオマエが己の力を理解するまで手を出さん。どうなろうと見殺しにする。ただひたすらに勝つための思考を止めるな」

「押忍！」

「天坂、オマエも手を出すことは許さん。今は虎杖が羽ばたき方を学ぶ時だ」

やだここの体育会系のノリの人しかない。

ちらりと虎杖を見るが、晴れやかな顔で笑みを返されてしまった。

天坂は肩をすくめて東堂の隣まで下がる。

「死ぬなよ」

「ん。分かってる」

虎杖は再び花御に向き直る。

深く息を吐く。真人との戦いでは怒り任せに怪我にかまわずがむしやらに突っ込みすぎて、結果として逃がしてしまった。

だから、今回は同じ轍は踏まない。黒く光った打撃を真人へ打ち込んだとき、たしかに何かを掴んだのだ。頭を支配しそうになる怒りを腹の奥底に深く沈め、呪力へ変換することを意識する。

自分の呪力の流れに集中しろ。思考を止めるな。戦いのなかで自分ができる最善を模索しろ。

一瞬、場を静寂が支配する。

痛いほどに張り詰めた空気の中で、虎杖の指先が川の水面を叩き大きな水しぶきを起こした。

虎杖を迎撃しながら、花御は虎杖への評価を改める。

人間離れた瞬間発力に加え、変則的な打撃。術師としては未成熟と聞いていたが、なるほど真人が苦戦したのも道理だろう。しかし、不規則な攻撃も何度か受ければ癖が読めてくる。頑強な花御にとって虎杖の攻撃はそれほど脅威ではない。

次に来るだろう威力重視の打撃は腕だけで防御し、背後の根でカウンターを狙う。

そして、それに気がつかない虎杖ではない。

接触の瞬間に感じる違和感。想像より軽い威力に疑問を持つ前に、遅れてきた衝撃によつて花御の腕が弾かれた。

『黒閃』を狙つて出せる術師はいない。だが、『黒閃』を経験しているか否かによつて呪力の核心への距離に天と地ほどの差がある。

そして、虎杖はすでに真人との戦いでそれを経験している。

無防備になつた花御の腹に黒い火花をまとつた拳が突き刺さつた。

「パーフェクトだ、超親友^{ブラザー}」

満足げに笑う東堂の横で天坂は変な汗が滲むのを感じていた。

想像より強すぎないか。

原作ではここが黒閃初経験だつたはずだが、なんだこの慣れてる感じは。

推しのカツコよすぎる戦闘で上がつていたテンションが急速にしぼんでいく。耐久自慢の花御を祓うなんてことはさすがに無いにしても、やはり原作からの差異は確実に生じつつあるようだ。

かといつて下手な立ち回りをすればサクツと殺されるのは自分なわけで。

花御のタフさを信じ、自分もできることをやるのが現状の最適解だろう。

「怒りは術師にとつて重要な起爆剤だが、感情の揺れを制御できなければ呪力の出力は安定しない。よくぞ収めた」

「でもまだ掴み切れてねえわ。集中して溜めないと切り替えられん」

「言つたはずだぞ、虎杖。思考することが重要だ。一度経験さえすればあとは身体がついて来るようになる」

「おう！サンキュー、東堂！」

二人の会話に微妙な表情をしながらポケットから手鏡を引つ張り出す。

「東堂さん、俺の術式代が使えなくなるまで俺はアンタの術式対象から外してください」
「ほう、その心は」

「入れ替えに選択できる対象が一对一なら、本体との見分けが付かない以上やつても東堂さんの負担が増えるだけですから。それに、ちよつとやつてみたいことがあるんで」

「いいだろう。虎杖ブラザーに相応しいかどうか見定めさせてもらおう」

「それほんとに解釈違いなんでやめてください」

「解釈違いって？」

「頼むからそこツッコまないでくれ」

すでに回復をし終えた花御の様子に虎杖と東堂も臨戦態勢に入る。

鏡から這い出した自分形代を横目に、頭の中でこれからやるべき行動を反芻する。

人間が負の感情を噴出させる状況は様々だろう。場所への恐怖、他者への憎悪、理不尽への悲嘆など感情の振幅や大きさも人の数だけある。

では、より強力で手っ取り早い負の感情の捻出方法はなんだろうか。

生き物なら何であつても逃れられない人生最大の負のイベント。

『死の瞬間』こそ、その最たるものだと考える。

天坂は推しが自分を要因として曇つてくれることにテンションが上がるだけであつて、自分に加えられる痛みに興奮するDMではない。痛いものは普通に痛いし、推しへの気持ちの後押しがなければ死ぬのだから怖い。

逆に言えば、天坂という人間は虎杖のためならどれだけ痛みと恐怖を伴おうとも死ぬのだ。

手をたたく音が響き渡る。

入れ替わりのたびに虎杖と東堂の二択に迫られるうえに、入れ替わるタイミングに合わせて二人の天坂が肉薄しより状況を攪乱していくことで花御は着実に削られていった。

東堂が天坂に対して術式を使ったのは先ほどが初めてだったが器用に息を合わせてくる。戦力としては決定打に欠けるため虎杖がいなければ成り立たないのだが動き自

体は悪くない。

虎杖の黒閃ラツシユも確実にダメージとなつて蓄積されている。

この調子なら仮に天坂を離脱させることになつても祓えるだろう、と虎杖は思つてた。

東堂の振るつた游雲の強烈な一撃が花御の頭部を抉る。

畳みかけるように天坂が一気に花御との距離を詰めるために駆け出すが、ガクンと動きが止まる。いつの間にか地面から這い出した根に脚が拘束されていた。一瞬だけ足元へと引き付けられた視線を花御へ戻したときにはもう鼻先三寸に根の先端が迫つていた。

驚きと恐怖に歪んだ顔にほんのわずかな喜色が垣間見えたのは花御の見間違ひだったのだろうか。

ひどく呆気なく、天坂形代の頭は吹き飛んだ。

虎杖の喉からひゅつと乾いた音が漏れる。

首を失つた天坂の身体が地面に倒れ伏す。そこで花御は気が付いた。

視界には虎杖と東堂のみ。もう一人はどこへ行つた。

「東堂さんー！」

声と同時に手をたたく音。

死体と入れ替わり、本物の天坂が花御の眼前に現れる。

冥冥の鴉のように命を懸けさせるといふ縛りも可能だ。しかし、そもそも自身の戦闘能力が凡人の域を出ない天坂の場合、攻撃が当たらなかつたときのデメリツトがあまりにも大きい。

形代とは元来、自身の穢れを移して身代わりとするもの。

相手に殺されることで死という穢れを背負わせたと解釈し、当たる前に殺された場合の保険として自分の呪力に変換できないかと天坂は考えた。

自分と同一の存在を呼び出せる天坂だからこそできる芸当であり、当たつても当たらずともいいのだ。

呪力に変換するために、死んだ形代の記憶は引き継がなければならなくなる。

脳に走る激痛。視界が極彩色に明滅する。だが、この程度で止まることは許されな

い。
砕けんばかりに齒を食いしばる。変換した呪力を全て乗せ、拳を振りぬく。

防御のため張られた根ごと花御の右肩が吹き飛んだ。

吹き飛んだ肩をおさえて花御が膝を折る。まさか凡百の術師が一時的にとはいえここまで呪力出力を急上昇させるとは予想外だった。頭に直撃していたら危うかつたかもしれない。

東堂は呆れたようにため息をついた。

「『術式形代が使えなくなるまで』か。まさか言葉通りだとはな」

「すぐに対応してもらえて助かりました。俺だけじゃさすがに当てられなかった」

花御の周囲にあつた植物が枯れていく。植物の命を呪力へと変換し、天坂が飛ばした右腕が再生していた。肩の『供花』へ膨大な呪力が収束していく。

領域展開が発動する前に、帳が上がった。

遙か空中から、現代最強の術師が見下ろしていた。

衝撃が過ぎ去った後、削り取られて地層が？き出しになった地面につい乾いた笑いが漏れる。

規格外とはよく言ったものだ。五条一人で日本国民を皆殺しにできるといふのは誇張でも何でもないのだと身に染みて理解した。

何はともあれ、天坂の『苦肉の策』は特級に通じ、生き延びることには成功した。成果としては上々だろう。

身体から力が抜けたとき、虎杖の拳が天坂の右頬に入った。肉と骨に衝撃が響く。

なんとか踏みとどまった天坂の胸ぐらを虎杖が掴みあげる。

「悠……」

「二度とあんな戦い方すんな」

襟の布地を軋むほど強く握りしめる。

形代が倒れた瞬間、虎杖の脳裏にあの里桜高校での光景がフラッシュバックした。またこの手は届かないのか、と底冷えするような恐怖が蘇る。

「あれは俺じゃない、形代にせものだ」

「快里がなんと言おうと、俺にとつては全部オマエなんだよ」

宥めようとする天坂の言葉を跳ね除ける。ここは絶対に譲れない。

どれだけ守りたいと思っても、形代の犠牲ありきの戦い方をされてはたまらない。こっちはただでさえ本物と偽物の区別がつかないのだ。うっかり本体が死んでしまった、なんてことになったら取り返しがつかないのに平然と身を削ろうとするなら黙っていることなんてできなかつた。

喪う恐ろしさを身をもって知ったからこそその感情だった。

思えば、こんなに真つ向から天坂に怒りをぶつけたのはこれが初めてかもしれない。

「だから、二度とすんな」

天坂は虚を突かれたような顔をして、くしゃりと表情を歪めた。

「……いめん」

その声があまりにも悲痛に震えていて、つい手を放してしまった。支えを失った天坂はそのまますやがみ込む。

「いめん」

もう一度眩かれた言葉に小さく震える背に手を伸ばしかけた。それを東堂が制する。

「^{ブラザー}虎杖、友を思うなら今やるべきことは分かるだろう」

そうだ、自分は今怒っている。ここで手を差し伸べたら今までと何も変わらない。反省して、天坂自身の命を顧みるようになってもらわなければ。

「……俺、先に行ってる。釘崎たちの安否も気になるし」

「ああ。こちらは任せておけ、^{ブラザー}虎杖」

しやがみ込んだ天坂は反省している訳ではなかった。

怒りに顔を歪めた虎杖に掴みかかられた時点でだいぶ限界が来ていた。そのうえあんな心底傷ついた顔をされては抑えられるものも抑えられない。危うく虎杖の前で気色悪い笑顔を晒すところだった。

込み上げる笑いに背中を震わせる。ここまで本気の怒りを虎杖からぶつけられたの

は初めてな気がする。殴られたのはめっちゃくちや痛かったが、それ以上に歯を食いしばりながらこちらを睨む表情に言いようのないほどに高揚した。

友愛からくる直情的な怒りを向けられるのがここまで心地よく感じるとは。開けてはならない新しい扉を開いてしまった気分だ。

「全部俺、か」

まさしく虎杖らしい、優しさにあふれた言葉だ。

たつた一言でこんなにも心が満たされる。だからこそ、最期のとかが待ち遠しい。形代にせものの屍を積み上げた先、虎杖の腕の中で事切れる瞬間にはいったいどんな表情を見せしてくれるのだろう。

少なくとも天坂のいくつもの形代いのちを投げうつ価値は絶対にあるはずだ。

今から未来に思いをはせるだけでゾワリと鳥肌が立つ。

そこまで考えて思考を打ち切った。さすがにこれ以上はよろしくない。

頭を切り替えるために短く息を吐き立ち上がる。

隣にいた東堂がなぜか満足気に頷く。

「なかなか良い顔つきになったな。愛は時にぶつかりながらも人を成長させるものだ」

「………なんの話？」

もう一人の形代天坂は帳が上がった空を見上げる。

真希、伏黒と虎杖のところへ戻るときに呪霊討伐を任されたが、呪霊を見つける前に帳が下りてしまい早々に戦線を離脱せざるを得なかった。

今回は時間制限は設けていない代わりに『死なないこと』が縛りとして課せられている。

『形代流し』は死の穢れを形代に背負わせる代わりに、一時的に強力な呪力を得ることができる。ただし、記憶の引き継ぎも強制的に発生してしまうのがデメリットだ。

一人分ならまだしも二人分の記憶を、しかも予想できないタイミングで頭に流し込まれたら天坂の脳は処理落ちしてしまう。

命のやりとりの真つ最中に硬直なんてシャレにならない。

なので形代天坂はさつさと安全圏まで逃げることを優先した。

花御が撤退したなら他の面々と合流すれば本体自分と落ち合えるだろう。

時間制限がない今の形代天坂は完全に一人の人間として存在が独立している。本体と接触しなければ術が解けないのはなかなか面倒だが仕方がない。

大人しく本部のある建物へと向かっていた時だった。

怪我をして血を流し、ふらつきながら歩く補助監督が目に入った。

「大丈夫ですか？」

「君は……、なぜここに一人でいるんだ。生徒は危険だから本部と合流するようにと」

「俺は分身みたいなものなんで平気です。本体は仲間とまだ森にいるはずで」

「へえ、それは良かった」

補助監督の口が、人間の顎の可動域を超えて大きく開く。

深淵を思わせる喉の奥の闇。そこから飛び出したつぎはぎの腕が形代天坂の首を掴んだ。

「お使いついでにいいもんみーつけ」

振りほどく間もなく、意識が遠のいた。

17. 得魚忘筌

「君な、私が形代^君の遺体処理を請け負ったのはもう少しマシな戦い方を模索していると思つてたからだよ。頭と胴体が泣き別れた生徒の遺体を見るこつちのことも考えてくれないか」

「すみません。……あの、もうちよつと優しくしてもらえると」

「人の厚意を無下にするやつはこれくらいでちようどいい」

家入からの少々荒っぽい治療に涙目になる。

花御との戦いで無傷なんてことはあるはずもなく、あちこち切れたり折れたりした天坂も他の負傷した生徒たちと同様に家入のもとへ運ばれた。

「君のやり方は脳に負荷をかけすぎてる。人間はストレスに弱いんだ。常に反転術式で脳を保護するなんてでたらめなことが仮にできたとしても、自分の死に際を追体験し続けてたら精神が先にダメになるよ。記憶内の死を脳が誤認して君自身がショック死、なんてこともあり得る」

「さすがにショック死は困りますね。俺もうちよつと長生きしたいんです」

「困るとかそういう話じゃない。天坂、君の術式がある限り一生その危険と隣り合わせ

なの、分かってないだろ」

もつともすぎる家入の忠告にイエスともノーとも言える曖昧な笑顔で返す。

欲望が先行しすぎていてショック死の可能性なんてまったく考えてなかった。人間の脳は単純だ。たとえ自分が体験していなかったとしても脳が現実だと感じたらその影響は肉体に反映される。どこかの国で行われた、水の滴る音を自分の出血の音だと思いつき死んでしまった死刑囚の実験の話を出した。

たしかにあの『苦肉の策』は文字通りのものだ。

経験も浅く、肉弾戦も人並み、術式も戦闘に向かない天坂が虎杖のいる土俵に立つには多少なりとも無理をするしかない。と、思っていたがこれからは命の使いどころをよく考えなければならぬだろう。使い時さえ誤らなければ強力な手札になるはずだ。嗜好的な意味でも。

終わり、と腕に巻かれた包帯の上から軽くはたかれて悲鳴を上げる。

「その顔の勲章は治さなくていいの?」

「ああ…」

指差された右頬をおさえる。虎杖に殴られたあと、みごとにジンジンとした熱を持ち腫れていた。幸いにも骨は折れていないようだ。

「自戒こめてこのままにしておきます」

「そ。なんにせよこれ以上死体を増やしてくれるなよ。もう無茶の面倒は見ないからな」

「肝に銘じておきます……」

予告なく頬に湿布を貼られ、また悲鳴を上げた。

医務室を出ると先に手当てを終えた虎杖が待っていた。

鋭い瞳が天坂に向けられる。ちよつと尖つてた中学生時代を思い出させる剣？な表情だ。呑気に懐かしんでいると普段より幾分か低い声が投げかけられた。

「まだ怒ってるから」

「ん、悪かった」

「あんなやり方が正しいと思つてんなよ」

「そのへんは家入さんにも言われた」

「……でも、殴つたのはごめん」

声色がわずかに柔らかくなる。先ほどまでの射殺さんばかりの眼光の迫力も鳴りを潜め、視線が天坂の右頬に移る。

なんの構えもなく虎杖の拳を受けたせいで天坂の頬は湿布で隠れているもの

そこ腫れている。切れた唇の端は赤黒くアザになっていた。

「痛え？」

「まあ、それなりに。悠仁にこんな思いつきり殴られたのはじめてだな」

天坂は笑いながら頬を押さえる。激情をぶつけた一撃は子供の頃の喧嘩やじやれ合
いとは比にならない強さだった。

虎杖もついカツとなつて手加減を忘れてしまった。それでもギリギリ踏みとどまっ
た方だ。虎杖が本当に本気で殴つたら天坂の首は今ごろ90度回転している。

「謝るなよ、俺だつて殴られたのには納得してる。心配してくれてるのも分かつてる」
「……けど」

「それに、前にも言ったけど俺は悠仁にやられて嫌なことなんてないんだつて。ほら、そ
ろそろ伏黒のとこ行こう」

そう言われてしまえばもう黙るしかなかった。

いつだつて、天坂は受け入れてしまう。

真綿のような優しさが時折不安になる。かつての何気ない日常では感じなかったで
あろう、血生臭い非日常で浮き彫りになる足元がぐらつくような感覚。叩きつけた怒り
さえも柔らかく受け止められてしまって、手応えを感じられないことが不安感に拍車を
かける。

自分のこの感情はちゃんと天坂に届いているのだろうか。

足取りが重く、天坂との距離が開いていく。

「あ、そうだ。いろいろあつて言い忘れてた」

足を止めて、虎杖に笑いかける。いつもとは違う痛々しい顔で、それでもなお変わらない親愛がこもった表情で。

「おかえり、悠仁」

「……ただいま」

それでも、虎杖はこの繋がりを手放すことなんてできない。

「アンタらいつの間にあのゴリラと仲良くなったのよ」

「いや、仲良くなったっつーか……、あの時は俺が俺じゃなかったというか……」

「何、二人そろって酔ってたわけ？」

「待って釘崎、『二人』ってなに。なんで俺も含まれてるんだ」

「ゴリラと仲良く一緒に戻って来てたじゃない」

「違う違う、悠仁だけで俺は変な空気に流されてないから」

「俺が流されやすいみたいに言うのやめてくんない!？」

騒がしい同級生たちの声を聴きながら伏黒はピザを咀嚼する。

虎杖は強くなった。『死んでいた』時期に何があつたか具体的に聞いてはいないが、そうならざるを得なかつたのだろう。

少年院のときも、今回も、虎杖に選択をさせてしまった。伏黒は自分の信条を間違っているとは思わない。もちろん虎杖のも。だが、それでは納得ができない。

自分の考えを、信条を貫くなら強くなるしかない。

「俺も強くなる。すぐに追い越すぞ」

伏黒の決意に満ちた表情に、虎杖は嬉しそうに笑う。

「はは。相変わらずだな」

「おい、私抜きで話進めてんじゃねーよ」

「俺もがんばらないとな」

「で」

伏黒がくるりと天坂に顔を向ける。

「え、なに」

「天坂。オマエ、前言ってたアレ使つただろ」

『アレ』が形代を使った自爆特攻を指していることは伏黒の怖い顔ですぐに分かつた。

すぐさま顔を逸らす天坂。隣に座っていた釘崎がヘッドロックをきめた。逃がすま
いとギリギリ音を立てて締め上げる。

「ぐえ、ちよ、ギブギブ」

「オメーあんだだけ説教されてなにも学んで無いとか脳みそ詰まってないの？それともこ
の耳がただの役立たずな穴なのかしら。いつそのことレジンでも詰めてやろうか」

「もつとやって良いよ釘崎。俺もさつき怒ったから」

「み、味方がいない……。緊急事態だったし仕方ないだろ」

締め上げられながら言い訳している天坂をよそに伏黒はピザを口に運ぶ。自業自得
なので助ける気はない。

はじめて会ったとき、伏黒の目から見た天坂は『ただ呪いが見えるだけの一般人』だっ
た。

虎杖ほど善良ではなく、かといって誰かを害することもない、社会からはみ出さない
ように生きるただの人間。だが、呪術師として同じ時間を過ごすうちにこの認識は決定
的に間違っているのだと気づいた。

伏黒も戦いの中で命を懸けることはある。それは幼いころから五条に術師としての
戦い方や心構えを叩きこまれ、それなりに死線をくぐってきたからできることだ。

虎杖が宿儺の指を飲むまで呪術界こじちちと無縁だったとは信じられないほどに、天坂は自分

の命を『戦いの布石』として使うことに躊躇いが無い。自身を複製できる術式の影響もあるのかもしれないが、それを差し引いたとしても異常だ。

献身というにはあまりに歪んでいる。狂気じみていると言っても良い。

少年院のときといい、この男には死への恐怖や忌避感というものが欠落しているのではないかとさえ思う。虎杖が関わることなら尚更だ。

小さな違和感は、少しずつ疑念に変わる。

献身ではないのなら天坂の異常性はどこに端を発しているのか。虎杖を含めて、私たちは天坂という人間をまだ知らないのかもしれない。

「さすが虎杖の友達だ。麗しい友情だな」

いつの間にか部屋に入ってきて平然と座っている東堂に全員の思考が一度止まる。

「え、コワ。いつ入ってきたの」

「麗しいがいかなぞ天坂。虎杖ブラザーというものがありません」

「それやめてって言ってるだろ！もうヤダこの人話通じない！」

釘崎に絞められた体勢のまま叫ぶ天坂を見てると伏黒は自分の考えすぎな気がしてきた。

窓から飛び出していった虎杖と東堂を三人で見送る。

「アンタ追っかけなくていいの」

「や、なんか忘れてる気がして……」

「そういえば、オマエ団体戦中に出した形代回収したのか」

「……………あ」

形代^{天坂}は手のひらに走る鈍い違和感で意識が覚醒した。

ぼんやりとした頭がハッキリするにつれ、違和感は激痛へと変わりようやく現実を認識する。

薄暗い部屋の壁に形代^{天坂}は手のひらを壁に打ち付けられるかたちで礫にされていた。足元には三本の試験管。試験管に満たされた液体の中で胎児に似た何かがゆらゆらと揺蕩っている。

すぐに現状を理解した。

呪胎九相図の受肉だ。本編では誘拐された民間人が受肉体になっていたが、なぜかその立ち位置が形代^{天坂}に入れ替わっている。つまり、これから自分は血塗を飲まされ、あの死ぬより辛そうな目に合うことが確定している。

さすがにかなり気が滅入る。本体との縛りで自害はできないし、仮に逃げ出せたとし

でもここには確実に真人と夏油がいる。まず生きて帰れない。

なにより、受肉は死と言つていいのか。身体も、人格も、魂も上書きされて別の存在へと変化してしまうなら、今の自分の魂はいつたどこに行くのだろう。

考えれば考えるほど吐きそうになってきた。いつそのことふて寝でもしてしまおうか、ともう一度目を閉じようとしたとき部屋の扉が開いた。

「目が覚めたかい。悪いね、真人が手荒に扱つたみたいで」

怪しく笑う長髪の男。額には不気味な縫い目がある。

特級呪詛師、夏油傑。正確にはその死体に乗つ取り暗躍する千年前の呪術師。

そして、おそらく虎杖悠仁の生みの親だ。

「ずいぶん落ち着いているね」

「こつちは前に身体吹っ飛ばされてんだ。捕まった時点でそれなりに覚悟してる」

「へえ、やはり分身の記憶を引き継いでいるのか。なかなか面白い術式を持つてるね」

口を滑らせた気がする。

「まあ、落ち着いて話ができるならその方がいい」

「話……う？」

部屋に入ってきたのは夏油のみ。何故か真人の姿は見当たらない。

てつきり有無を言わさず呪肉体にされるのだと思つていたが、天坂どうにも形代の知識と

齟齬が生じている。

「殺される側としては焦らさないでサクツとやってもらいたいんだが」

「せっかちだね。それより、まず君に確認したいことがあるんだ。少年院で宿儺が出てきたとき、君はどうやって生き延びたんだい？例えば、虎杖悠仁の肉体の掌握権について宿儺と縛りを結んだ、とか」

何と答えたらいいのか分からずきゅつと唇を引き結ぶ。

自分の殺し方に注文を付けたら気持ち悪がられて見逃された、なんて正直に言ったところで信じてもらえらると思えない。

そもそも、こうして話していたら真人に怪しまれるかもしれないのに、この男は何を意図して自分との対話の時間をわざわざ用意したのか。

「何も。俺を生かしたのなんて気まぐれだろ」

「まさか。災害は殺す対象を選ばない。己の快不快のみが行動指針ではあるけれど、宿儺が目の前の命をわざわざ見逃さないことくらい対峙した君がよく分かってるだろう。それこそ何かしら利用価値がない限りはね」

「……だとしても、災害の考えることは凡人の俺には分からない。聞かれたところで答えられることなんてねえよ」

夏油はジツと天坂の顔を観察する。爬虫類を思わせる無感情な目がそこそこ怖い。

負けずに意地で目を合わせてると、すつと笑みが戻る。

「そう、まあいいか。こちらが把握してない縛りが無いならそれに越したことはないし」
「そうか。じゃあさっさと殺つてくれ」

「まあ待ちなよ。本題はここからなんだから」

まだあるのか。もうかなり胃が痛くなってきたのに。

夏油は足元の試験管をひとつ拾い上げる。液体のなかで揺れるモノがこちらを見た気がした。

「君と取引がしたい」

「……今から死ぬのに受けると思ってるならだいぶ見当違いだぞ」

「もちろん、受けるか受けないかは君次第。断つてもいい。その場合はこのまま九相図の素材になつてもらう。でも、君にとつても悪い話じゃないと思うよ」

かつて自分の手で孕ませ、墮胎させた胎児を手に、おぞましい野望を持つ呪詛師は柔らかに微笑む。

「君の、大切な子についての話をしようか」

18. 背信棄義

隣で大あくびする虎杖につられて天坂もあくびを漏らした。

「呪霊の呪の字も出ないじゃない……」

「だな……」

ぼやいた釘崎の目元にもクマが疲労として色濃く出ている。

寝不足の頭は霞がかかったようにぼんやりとしていて、短く言葉を返すのがやつとだった。

目を擦りながら周りを見るとようやく空が白んできているところだった。

だんだんと強くなる日の光で、夜の闇に沈んでいた周囲の光景が輪郭を取り戻していき。

やそはちばし
八十八橋。

鯉ノ口峡谷をまたがるその橋は朝日に照らされ、どす黒い谷底の不気味さは薄れて日常の一部へと戻っていく。

すでに八十八橋の呪殺は始まっている。このまま何事もなければ八十八橋の呪いと宿儺の指の共振、そして血塗、壊相との戦闘が待っている。

八十八橋は伏黒が領域展開を会得する重要なターニングポイントだ。

下手に干渉すると後々の渋谷で伏黒周辺の流れが大きく変わってしまう。それを避けるならば必然的に壊相・血塗との戦いに参加することになる。

虎杖と釘崎の黒閃が見られるかもしれないのだ。多少痛い目を見ても食らいつかなければ。

呪詛の残穢どころか気配すらない八十八橋から撤収し、補助監督の新田と方針を話し合いつつコンビニ飯でエネルギーを補給する。

ゼリー飲料を吸つても天坂の頭のもやが晴れないのは眠気のせいだけではない。今なお天坂の形代は行方不明だ。

高専襲撃の騒ぎのあと、どれだけ探しても形代の足取りはなぜか掴めなかった。

いくら騒動があつたとはいえ警戒態勢の高専を誰にも見られずに、人の足で出て行けるとは思えない。

どこかで死んだとしても、本体である天坂になにか影響があるはず。

念のため遺体があがっていないか伊地知に確認したが、ものすごく気まずそうな表情で「……頭のないご遺体でしたらお一人」と返されるだけだった。やつれた顔にさすがに申し訳なくなつてそれ以上は聞かなかつた。

そうなれば、いなくなつた原因は『第三者に拐われた』と考えるのが自然だ。

あの日、高専に侵入したのは花御、組屋鞆造、重面春太、そして真人。

対面して戦った花御、捕まった組屋鞆造は除外。重面はわざわざ形代を生かしたまま連れて行く動機がない。

消去法ではあるが形代を生きたまま拘束しそうな愉快犯は真人くらいだ。

問題はその真人だ。

この先、真人は虎杖にちよつかいと言う名のえげつない精神攻撃をかけまくる。

渋谷の局面で下手に「ほーらオマエのお友達だよ」なんてノリで改造人間版天坂を出してきたら、また何かしらの流れを変えそうだ。

取り返そうにも天坂には形代の位置を精密に察知するなんて便利な機能はなく、まだ生きているだろうなとぼんやり感じるくらいだ。

どうしたもんか、と空になったバックを行儀悪くペコペコへこませていると、伏黒の同級生と後輩がチャリに乗ってやって来た。

ひとまず形代のは頭の隅に追いやる。

今は八十八橋を乗り切ることに集中しなくては。

順調に進んでいるはずだった。

単独で八十八橋の下へ向かった伏黒を追いかけて生得領域に侵入し、血塗が乱入してくるまでは問題なかったのだ。

問題は乱入してきた血塗だった。

見た瞬間に天坂の全身の毛が逆立つ。

緑色の体表に中途半端に人間の名残がある頭部。

絶えず血が流れ出ている目にはぼっかりと空洞が広がり、巨大な口から血塗れの舌と歯がのぞいている。

たしかにおぞましい姿ではある。

だがそこじゃない。

天坂自身にも説明ができない奇妙な違和感。

前世の記憶やらを抜きにして、目の前の存在を天坂は知っている。

鈍った思考にトドメをさすように、緑色の指が天坂を指す。

「あ、オマエ、知ってるぞ」

血塗は巨大な口をニタリと歪める。それに合わせて人間の顔がいびつに残った頭部も笑う。

その頭部と浮かんだ仮説が結び付くまえに釘崎が暗闇に引きずり込まれた。

釘崎を抱えて、虎杖は夜の森を駆け抜ける。

壊相の『翅王』による血の猛攻が背中に迫る。地面を抉るほど強く蹴り、虎杖はさら

に速度を上げた。

土から飛び出した根を飛び越え、行く手を遮る枝を掻い潜り、土煙を上げながら疾走する。

あまりのスピードに抱えられた釘崎は振り落とされまいよう必死にしがみつくしかない。

足を動かしながら虎杖は思案する。

伏黒の姉、津美紀は八十八橋の呪いを受けたかもしれない。

その可能性に行きついた時点で伏黒は普段からは考えられないほど焦っていた。

虎杖に釘崎を追うように言ったときも、いつも通りに見えて内心の焦燥感は消えていないはずだ。

そして、もう一つの懸念は天坂だ。

生得領域に侵入してきた『別件』を見てから明らかに様子がおかしかった。

虎杖はたしかに聞いたのだ。

あの緑色の呪霊らしきものが天坂に「オマエを知っている」と言ったのを。

天坂とあの呪霊の間にながったのかは分からない。だが、なにか嫌な予感がして天坂には領域内に残るように言った。

森を一気に抜け、道路に出る。

追いかけて来ていた血の射程外であることを確認してから抱えていた釘崎を下ろした。

周囲の気配を探ってみるが、ひとまず追撃はなさそうだ。

「よくやった。褒めてつかわす」

「へいへい」

「ウソ。ありがと」

「おう。で、釘崎にちよつと聞きたいんだけど」

「何よ」

「アイツらってなんだと思う?」

なぜ天坂だけに反応したのか。

天坂の面食らった様子から、あの反応は本人にとつても想定外だったのだろう。

しかし、自分たちが知らない何かをおそらく天坂は知っている。

「天坂がアイツらと通じてるってこと?」

「いや、そこまでは言わんけど」

「んなこと言われたって、アンタが分からないなら私も分からないわよ。判断材料が少なすぎ。なんとも言えないわ」

「だよなあ」

「ぶつちやけあの変態ルックが人間なのか呪霊なのかさえ判断つかないわ。分かるのは確実に敵ってことよ」

呪いなのか、人なのか。

ふと、虎杖は思い付く。どちらでもない人と呪いの狭間の存在。

いまだ行方不明のまま『死んではいけないらしい』天坂の形代。

もし、血塗の『知っている』のが天坂^{本体}ではなく、形代なのだとしたら。

「最期のご歓談は終わりましたか？」

その声に釘崎が反応するより早く虎杖が動く。

すぐさま釘崎を背後にかばい防御姿勢をとる。鋭い血の刺突が虎杖の左の上腕に突

き刺さった。

じゆう、と肉が焦げる嫌な臭いととも虎杖の腕から血煙りが立ち上る。

「虎杖！」

虎杖の被弾に気を取られた釘崎は、背後の斜面を上ってきた血塗の吐き出した血しぶきをもろに浴びてしまった。

肌を伝う生温い液体とじくじくした痛みに顔を歪ませる。

「弟の血には私のような性質はありません。私の血だつて全身に浴びでもしなければ死にはしませんよ。まあ、死ぬほど痛みますが」

ゆつたりとした足取りで現れた壊相は片手で印を結ぶ。

血を浴びた箇所から咲き乱れるような薔薇の紋様が浮かび上がり、身体へと広がる。蝕爛腐術「朽」。壊相、血塗のどちらかの血を取り込み、兄弟のどちらかが術式を發動することで血液の侵入部分から対象を腐食させる。

「あなたとそちらのお嬢さん、どちらも保つてあと10分と言ったところでしょうか。朝には骨しか残りませんよ」

宿讎の指を奪還するお遣いに想定外の邪魔が入ったが相対した呪術師たちは大したことはない。

術式開示の効果が上乘せされることで実際にはもつと早くに死が訪れるだろう、と壊相は内心でほくそ笑む。

腐食の痛みに蝕まれながらも虎杖は冷静に術式を解除させる方法を考える。

狙うなら目の前の壊相より背後の血塗だろう。

吐きかけてくる血は警戒すべきだ。しかし八十八橋の結界内で戦った手応えとして、虎杖が後れを取る相手ではないだろう。

なにより虎杖の体内にはすでに猛毒である宿讎の指がある。腐食による分解の痛みはあれど、それだけでは虎杖を止められない。

釘崎の肩越しに血塗を確認する。

それと同時に雲がはれ、月光が周囲の輪郭を明瞭なものにする。

「あ」

声を上げたのは釘崎と虎杖どちらだったか。

さきほどまで暗がりだで判然としなかつた血塗の『顔』が月明かりに照らされる。

呪物が受肉体となる過程で、その容姿は元となつた人間の呪物への耐性によつて左右される。虎杖のような容姿も自我も失わない例はきわめて稀である。

御三家の汚点、加茂憲倫の手で残された受胎九相凶。呪霊の子を孕む特異体質の娘を使い、九度の懐妊と墮胎を繰り返したことで生み落とされた赤子の亡骸は特級呪物に指定された。その呪力の強さから元となつた人間の面影はほぼ残らない。

しかし、血塗は他の兄弟より呪物としての力が弱く、それゆえに素材にされた人間の面影を頭部に残している。

「なんで」

虎杖が絞り出すように呻く。

空の眼窩。血を滴らせる口。あまりにも変わり果てている。それでも否定できないほどに、その顔には見覚えがあつた。

「なんで、こうなる……！」

天坂快里の顔がそこにあつた。

腹の底が冷えていく感覚とともに、血塗を見たときの天坂の態度に合点がいく。

天坂の術式は自分という存在を複製する。受肉体となったとしても本体である天坂自身が血塗の元に気がつかないわけがない。

「虎杖」

声を落とした釘崎が虎杖にだけ聞こえる音量で囁く。

「迷ってる場合じゃねえぞ。ここでやらなきゃ私らが殺される」

「分かってるけど」

形代は『死んでいない』と天坂は言っていた。つまり受肉体となっても本体とのつながりは継続されているということになる。

受肉体が死んだ場合、血塗という呪物の記憶や人格が混ざったまま本体に戻る。

それは、疑似的に呪物を飲み込むのと同義ではないだろうか。肉体的には死なずとも間違いなく人格と記憶に何かしらの影響が出る。

そんなことは釘崎にもわかっていた。

「私だって死なせるつもりないわよ。ま、殺すつもりでやるけど」

そう言うや否や、釘崎は薔薇の紋様が咲き乱れる腕に容赦なく五寸釘を突き立てた。

心臓に直接杭を穿たれたかのような激痛が壊相と血塗の動きを確実に止める。

腐食と毒の影響で額に脂汗をびっしり浮かべながら、しかし釘崎は好戦的な笑みを崩

さない。

「当たれば勝ちの術式、お前ら強いな。でも残念。私との相性最悪だよ！」

芻霊呪法「共鳴り」は術式対象の一部があれば人形を通して呪力を打ち込める。

さきほど吹きかけられた血液を媒介に、与えたダメージは蝕爛腐術の発動で強くつながりあっている二人に共有される。

これは賭けでもある。

芻霊呪法において血液に高い価値はない。

術式が血液に依存するものなら、直接的に蝕爛腐術の術式のつながりが無い天坂にまで強力なダメージは届かないだろうと踏んだ。

あくまで仮定の話だ。いまごろ痛みに悶えて転げまわっていてもおかしくはない。文字通り死ぬほど痛いだろう。

術式を解かれるのが先か、自分たちとここにいないもう一人がくたばるのが先か。

「我慢比べ、しよっか」

19. 主客転倒

虎杖の強烈な拳が壊相を追い詰める。

壊相の血による毒と腐食の激痛があるはず。なのに虎杖の動きは鈍るどころか勢いを増していき、壊相は思うように反撃にうつれない。

そのうえ厄介なのは絶妙なタイミングで叩き込まれる「共鳴り」だ。

身体の内側から呪力で突き刺される強烈な痛みが行動に躊躇を生み、躊躇が隙を生む。

血塗も釘崎に攻撃をしかけようとしているが、視線が指先の五寸釘につられ注意が散漫になっている。

「共鳴り」への警戒で身体を強ばらせ足を止めてしまえば、呪力をまとった釘が飛んできて身体を撃ち抜く。

弟の受ける痛みが、飛び散る血が、壊相の焦りを募らせる。

そして、虎杖は生まれた隙を見逃さない。

ひととき強烈な打撃が壊相の脇腹に突き刺さった。衝撃をまろに受け、勢いを殺せず
に壊相は後退する。

その瞬間、虎杖と釘崎はするりと立ち位置を変えた。

虎杖は血塗へ、釘崎は壊相へと攻撃の矛先を向ける。

壊相は選択を迫られる。

蝕爛腐術の術式を解くか、否か。

距離を取られてしまった上に、「朽」の発動中は「翹王」は出せない。「翹王」なしに目の前の釘崎を殺すことができて、虎杖は既に血塗へとその拳を振りあげている。

いま遠距離攻撃で応戦しなければ弟を助けることはできない。

迷ったのはほんのわずかな時間だった。

虎杖と釘崎の身体から術式が消える。それと同時に壊相の背中に現れた血の翹はねが二人へ迫る。

釘崎の瞳にはその光景がスローモーションのように見えていた。

毒は身体に残っているが、術式による痛みが消えたことで釘崎の意識は壊相への一撃ただひとつに集中していく。

「翹王」が到達する前に、振り抜いた金槌が正確に五寸釘を捉える。

虎杖は背後に攻撃の気配を感じながらも、目の前の血塗から目を逸らさない。

「共鳴り」で血塗にとどめを刺すわけにはいかない。血を媒介にせず肉体を叩けばそのダメージは本来の肉体の持ち主に直撃するだろう。それは釘崎も虎杖も分かっていた。

だからこそ、虎杖は絶対に血塗を仕留めなければならない。

二人の攻撃と同時に、黒い火花が散る。

放たれた黒閃は壊相と血塗の肉体で弾けた。

虎杖と釘崎は八十八橋へ戻るため暗い森を歩く。

逃亡を図った壊相を倒し、遺体は血塗とともに置いてきた。

重い沈黙を終わらせたのは釘崎だった。

「……なにモジモジしてんのよ」

「ごめん釘崎」

「なにが。主語を言いなさい主語を」

「釘崎に、ほとんど任せちゃまったの」

天坂の形代を素材とした受肉体。倒すしかなかったと理解していても胸にわだかまったものはすぐに消えない。

「べつに、私は何とも。アンタの方がキツイでしょ」

「……だんだん分かんなくなってきたんだ。俺が巻き込んだくせに何回も目の前で守れなくて、いつつもうどうにもならない。そのくせ、いま釘崎が生きててホッとしてる」

「術師やってて思い通りになることの方が少ないわよ。たとえば身近な人間だったとして

も、今日隣にいるヤツが次の日また会える保証なんてない」

「……」

「ぶつちやけ今回のことは自分の術式を制御しきれなかった天坂にも非があるわ。それに、あそこまで強力な術式を持つてる奴を長期間拘束なんてできない。結局できることなんて限られてる」

「分かつてる。でも」

虎杖は死んだ弟に涙を流す壊相の姿が頭から離れなかった。

「向こうにも譲れないもんがあつて、守りたいって気持ちは同じだったのかなつて。そんだけ」

「……そつか」

「うん」

短く応えて、虎杖は再び口を閉ざした。

八十八橋の結界があつた場所で、血塗れの伏黒と天坂が倒れていた。

二人が恐る恐る覗き込むと、伏黒だけが目を開けた。

「お、良かった。無事だな」

「無事だな、じゃねえよ！」

「びびった！超びびった！死んでるのかと思った！」

「声落としてくれ……」

起き上がったて頭を押さえている伏黒とは対照的に、天坂はピクリとも動かない。

「え、コイツ生きてる？」

「ああ、そこまで重傷じゃない。突然白目剥いて倒れたけどな」

天坂の肩が呼吸で上下しているのを見て、虎杖はほつと安堵の息をつく。

釘崎の言うとおり、できることは限られている。そのなかで自分が最善と考えたものを選択するしかないのだろう。

橋の上から聞こえてくる新田の声に苦笑しながら、寝息を立てる天坂を抱え上げた。

時は少し遡り九相図の受肉前。

天坂は夏油と対峙していた。

取引というものは対等な関係でのみ成立する。

お互いに相手の利益となりえる手札を持ち、それが釣り合うときによく同じ目線で交渉が可能になる。

片方が不利な立場であった場合、それは交渉ではなく『脅迫』であり『命令』に他ならない。

つまり、天坂が目の中の男とまともな取引をすることはほぼ不可能ということだ。

「で、取引つて？内通者とかなら頼む相手を間違えてるぞ」

どうせ自分が情報を渡さずとも、高専側の動きはすでに筒抜けのはずだ。なら、この男は何を目的に接触してきたのか。

相手は自身の目的のために特級呪霊や過去の術師でさえ手玉に取るような人物だ。こちらに得があるように見える条件であっても、あっさりと手のひらを返される可能性は大いにある。

渋谷で夏油の肉体を取り戻せなかったあの双子のように。

「君にはこれから私たちが行う作戦で、ちよつとした役目を引き受けてほしいんだ」

液体の中をゆれる九相図越しに夏油の視線がこちらを向く。

「五条悟が一番力を発揮できるのは一人でいるときだ。顧みるべき弱者がいなければ、いくら特級呪霊とはいえ彼に敵うものは現代に存在しないだろうね。だからこそ、枷が必要なんだ。非術師はもちろん、足手まといとなる術師、とくに顔見知りの生徒なんかは良い材料になる」

「……五条先生を見くびりすぎだろ。あの人が俺を気にして不覚取るなんてそれこそあり得ない」

「たしかに、五条悟は簡単には感情に流されない。いざとなれば生徒であっても『ある程

度の犠牲の一つ』として割り切れるだろうね。だが彼の集中力が数パーセントでも君に割かれればこちらとしては上々なんだ。保険は多いに越したことはない」

つまり、この男は五条の封印の場に非術師のほかに天坂という守るべき対象を増やすことで、より負担を増やそうということなのだろう。

畏というものは成功すること以外にも、そこに存在して相手の思考力を削ぐことに意味がある。

呪霊と閉じ込められた一般人たちでゴった返す渋谷駅の地下ホームに、いるはずのない生徒が突然現れたら、多少なりとも五条は動揺するかもしれない。

特級呪霊との戦闘に天坂が巻き込まれて死んだところで、夏油側が受ける損害はゼロだ。

天坂は非術師と比べて少しだけ利用価値のある使い捨ての駒、といったところなのだろう。

それに、と付け加えながら夏油はとても楽し気に自身の顔の輪郭をなぞる。

「五条悟も、人間なんだよ」

目の前の男の顔が、声が、この男との記憶が、現代最強の術師にとってどれほど弱点になるかを天坂は知っている。

あの五条が数秒もの隙を生んでしまうほどに、夏油傑という人間の存在は大きい。

渋谷事変の封印作戦は無下限呪術に対する対策のみならず、五条が兵器ではなく『感情を持つ人間であること』を前提に練られている。

「受けるならキミを殺さず解放しよう」

「それだけ危ない橋渡らせんのに、報酬がここから逃がすだけか。釣り合わないだろ」

「まさか。逃がすのは君を縛り付けている本体とのしがらみからだよ。君にはとても魅力的な提案じゃないか？」

「……」

「真人から聞いたとき不思議だったんだ。あの真人が本物だと誤認するほどに魂を感じる分身。こうして君を前にしても偽物には見えない。これは私の所見だけど、分身なんじゃなくて君も天坂快里自身なんじゃないかな？」

「だつたらなんだ」

「使役されてる式でもあるまいし、自由になりたいとは思わないか？ 同一存在に縛り付けられる義理もないだろう。私の作戦が成功すれば高専どころか日本自体が機能不全になる。同じ顔の人間がひとりやふたりうろついていたところで騒ぎにすらならない。それから好きに生きればいいさ」

「すごい、考えたことなかった。」

さすがが目的達成のために千年ものあいだ肉体を渡り歩いてまで努力を続けているラ

スボス。倫理観がトチ狂っている。

つまりは高専を裏切って手を貸す代わりに渋谷事変で本体との縛りをうやむやにした後、とんずらこく手助けをするということか。

「いや、断る」

即答だった。

たしかに本体の存在に縛られず好きに生きることができるならとても魅力的だ。しかし、天坂にとっての好き勝手とは結局『虎杖のそばで生きて死ぬ』に行きつくのだ。なら別に自分じゃなくてもいい。

最終的に『俺かもしくはこの俺を引き継いだ俺』が目的を達成できればそれで満足だ。

天坂の即答に少し間を置いてから、夏油はあからさまにため息を吐いた。

これだから大局を見れない人間は、と顔に出ている。

「実は少し前から君が気になっていてね」

「……はあ」

「宿儺に見逃されたのもそうだけど、持っている術式もなかなか興味深い。だから、君のことを調べさせてもらった」

嫌な予感がする。まさか、知らない間に一番厄介な相手に興味を持たれていたとは。

「ずいぶん虎杖悠仁と仲が良いんだね。小学校から高校までずっと同じ。宿儺の受肉現

場に居合わせ、呪いの被害に遭いながらも呪術高専に自ら志願して入学。虎杖悠仁が表向きに行動できなくなっても、術式を使って彼に付き添っていた。美しい友情だね」

端から見れば、とつけ足した夏油は怪しげに嗤う。

「実は協力者を通じて君の動向をしばらく監視していたんだ」

「えっ」

「君の行動原理にはいつだって虎杖悠仁が中心にある。だが『友達』と片付けるには少々歪じゃないかい？」

天坂の本性を見透かしたような言葉に、口元がひきつる。

よりによって見られていた。

天坂の監視が可能な『協力者』。思い当たるのはメカ丸くらいか。一体いつから、どこまで見られていたのだろう。

気持ち悪い笑顔をメカ丸に見させていたかと思うとさすがに申し訳ない。

「宿讎の受肉にはじまり、少年院、里桜高校、今回の花御たちの襲撃。今までの出来事のなかで君の行動のみを抽出すると、私には意図的に虎杖悠仁の前で死のうと動いているように思えてならないんだ。だが、なんの意図をもってわざわざ目の前で死ぬのかだけが分からなかった」

感情の読めない不気味な微笑みで天坂を覗き込む。

「天坂快里。君は虎杖悠仁の前で死ぬことで、何をしようとしてるんだい？」
「……」

これは何かしらを企んでいると勘違いされているのか、特殊性癖を見透かされているのかどっちなのだろう。

普通に考えれば前者なのだが、この男のつかみ所のない態度はどうにも落ち着かない。
い。

見透かされていたところで大した問題はないが、親しくもない他人に性癖を把握されているのは普通に恥ずかしい。

とりあえず前者であると信じて話を進める。

「なにを警戒してるのか分からないけど、俺は大層なことは考えてない。何回か死にかけてるのだから、呪術師やったら珍しいことじゃないだろ」

「最近呪霊が見えるようになった虎杖悠仁と違って君は昔から呪いを見聞きしてきたはずだ。少なくとも彼より呪いの脅威を知っている君が、なんの思惑もなく命を使い捨てるには思えない」

「俺が自分の命より友情を優先する直情バカかもしれないだろ」

「バカにしてはгүйぶん自己分析ができてるじゃないか。まあ宿儻と二人きりになるなんてバカの見当だね」

夏油は鼻で嗤う。誤魔化しも話をそらすことも許さないと言わんばかりだ。

「そうだな、例えば君は何かしらで虎杖悠仁を憎んでいる」

「は？」

「死を見せることは対象の精神的に負荷をかけるし、何よりそれだけで呪詛としても成立する。関係性が近ければ仕掛けやすいしね」

「いやいや、そんなことのためにこんな辛い術式使うわけ」

「相手を苦しめたいという意図があるなら大いに使う価値があるだろう。まあ、かなり常軌を逸していると思うけどね。懐に入り込んで信頼感を深める一方で、罪悪感と憐憫を注ぎ続けて相手の心を折る。なかなか外道なやり口じゃないか」

「とにかく違う。俺が悠仁のことを憎んでるなんてあり得ない」

「じゃあ何？君が死ぬことで生まれるメリツトなんてそれ以外にないだろう？」

「だーもー！根掘り葉掘りしつこいな！俺は悠仁が好きなんだよ！特に苦しんでる姿が一番な！『俺が死ぬこと』でそれが見れるなら何だってしてやる！」

天坂の言葉に夏油はきよんとする。

数秒目を丸くしたまま固まり、やがて肩が震えはじめ、盛大に吹き出した。

「あつはつはつは！き、君、最悪に気持ち悪いな！それ君の趣味かい？変態にも限度があるだろう！さすがにそんな動機で動いてるとは思わなかったよ！」

大口を開けて爆笑する夏油を仏頂面で睨む。

お前にだけは「気持ち悪い」なんて言われたくない。そう心のなかだけで叫んだ。

天坂も変態の部類に入ると自覚しているが、他人の身体を乗っ取ったうえで子供をつくるほど頭のネジは飛んでない。

しかも産ませる側ではなく産む側なのが最高に頭がおかしい。「この男の中身は経産婦」というパワーワードが頭に浮かんでしまう。

ひとしきり笑った夏油は大きく息を吐き、唐突に天坂の顎を掴んだ。

ギチギチと音がなるほど強く掴まれ口を閉じることができない。

「まあ、交渉決裂ならそれもしょうがない。予定通り素材になってもらうだけだ。ああ、脳にも少し細工をしないと。記憶をどこまで共有してるか分からないから、とりあえず全て封印しておこう」

嘔吐反射が起こる口の中にむりやり肉の塊が突っ込まれた。

九相図が喉を通り抜けた瞬間、全身が悲鳴を上げ始める。骨が外れ、筋肉が千切れ、すべてが形を変える。

「縁があつたらまた会おう。生きてたらの話だけどね」

薄れていく意識のなかで、その言葉が最後に聞こえた。

長い、長い夢を見ていた。

どこに居るのか、自分が何なのかも分からない。

自我にも満たないおぼろげな意識だけが芽生えたものだった。

母の胎のなかを揺蕩うように、ただ流れる時間だけを享受するしかない。意識が無ければどれほど良かっただろう。

発狂することすら許されず、ただガラスの向こうの存在を心の寄る辺にする。

血を分けた兄弟。

人でも呪いでもない世界にたった九人の同胞。うち六人は意識すら感じ取れない。

兄と呼べる二人だけを頼りに150年の時を過ごす。

いつかガラスの外に出ることが出来るだろうか。

そのときは、たくさん話をしたい。

存在を感じるだけだった長い空白の時間を埋めるために。兄弟だけで、誰にも邪魔されない世界でたくさん、たくさん話がしたい。

そこには脹相の兄者がいて、壊相の兄者もいて、俺と六人の弟たちと、あともう一人弟と。

あれ。

末席に見覚えのない姿がある。

背中を丸めて深くうつむいていた人影がゆらりと上体を起こした。

顔が見えない、というより分からない。顔面には絵具をぐちゃぐちゃにかき混ぜて雑に塗ったような入り乱れた色彩が張り付いている。

誰だ。

口も目も鼻もない。とうぜん表情もない。

俺の問いに男は心底不思議そうに首をかしげる。

だれだっけ。

どろりと輪郭が溶け落ち、地面に滴った。

20. 一簣之功

びっくりと身体が震えて天坂は飛び起きた。

起き上がった勢いがありすぎたのか、頭から血の気が引いて再びベッドに沈む。

冷や汗でスウェットが肌にはりついて気持ち悪い。

なにか、とんでもなく悪い夢を見ていた気がする。

ぐらぐらと思考がまとまらないせいで、わずかに残っていた夢の記憶が霧散している。

とにかく喉が渴いて仕方がない。よたよたしながら冷蔵庫の扉を開け、水を一気にあおつて噎せた。

八十八橋から帰還した天坂は二日ほど昏睡状態になったらしい。

そのせいなのか橋の下の結界に入ってからからの記憶が曖昧だ。

虎杖と釘崎の黒閃を見るところか、伏黒が領域展開をしたかさえよく覚えていない。

意識が戻ってからこの顛末を聞いて、それはもう落ち込んだ。

また二度とない展開を見逃している。しかも、形代が素材となった血塗にトドメをさしたのは虎杖だというじゃないか。

なぜこんなに都合の良いことが起こりつつも、その時に立ち会っていないのかと自分を殴りたい。邪なことばかり考えていることへの天罰だろうか。

天坂が今回得たものといえれば怪我と記憶が混濁した脳ミソくらいだ。

そして、天坂はおかしな夢をよく見るようになった。

今までも形代の死に際の際の記憶が夢の中でフラッシュバックして飛び起きるなんてことは何度かあったが、今回はそういつた記憶由来のものとはまた別な気がする。

現実味のないくせに妙にリアリティがあり、目が覚めると詳細を思い出せない。

ただ、誰かのもとへ帰らなければという、胸を引っ掻くような焦燥感だけが残っている。

踏んだり蹴ったりだ。

時計を見ると午前5時少し前。

寝直そうにも眠気はすっかり消えてしまっている。しかたなく汗を拭き、制服に着替えて外に出た。

まだ日が上りきっておらず薄暗いなか、あてもなく高専の敷地内をフラフラ歩いて時間をつぶす。

残暑が厳しいが夜明け前は肌寒くなってきた。着実に季節は進み、10月31日が迫ってきていた。

天坂がこうして日常を過ごすのもあと少しだ。そう思うと少し寂しい気もする。足を止めて朝もやが立ちこめる神社を見上げた。

期待はもちろんある。しかし、今回の一件で不安の方が大きくなった。現在進行形で自分の身に何が起こっているのか分からないうえに、形代の運用についても見直さざるを得なくなった。

ここまで来たら意地でも我を通したいところだ。が、現実がそう甘くないことも充分すぎるほどに分からされている。

「どうしたもんか……」

「なにが？」

後ろから聞こえてきた声に飛び上がりそうになった。

いつの間にか隣に虎杖が立っている。

朝のランニングをしていたのか半袖Tシャツにジャージというラフな恰好だ。汗をうっすらかいているものの息は全くあがっていない。

「びっ、くりした……。心配消すなよ」

「いや消さないけど。ビックリしたのはこっちだって。まだ暗いのに快里がフラフラしてんだもん」

「まあ、なんか寝れなくなっくな」

「身体は？」

「もう良くなった」

そう言いながら歩き出すと虎杖もついて来た。もうランニングは良いのかと思いつつも、特に何かを話すわけでもなく二人で散歩する。

そういえば八十八橋の一件以来、怪我で寝ていたこともあったが、あまり虎杖と一対一で話す機会がなかったような気がする。

ちらりと横目で虎杖を窺うと目が合った。

「どうした」

「……快里さ、小学校のときのこと覚えてる？ 給食の虫騒ぎ」

「あー、糸こんにやく。あつたなそんなこと」

空が白んできて、ぼんやりした明るさで照らされる石畳を進み、大きな鳥居をくぐる。

こうして正しい道順を辿るのにもずいぶん慣れた。

なんとなく虎杖の音が強張っているように感じたが、ここで突っ込むのも野暮かと思いい話を続ける。

「遠足で山行ったときとか」

「ガチで毒虫出たやつか。新任の若い先生だったからすげー大騒ぎになって」

「石村先生、虫マジでダメだったらしい」

「なんなら一番叫んでたもんな」

「中学のときも山登りさせられた」

「校外学習なんだからもつと良いとこ連れて行ってほしかったよな。悠仁が他校の生徒と鉢合わせたときはヒヤツとしたぞ」

「べつにそんな時は喧嘩しなかったぞ」

「でも当時はもう有名になってただろ。西中の虎」

「それマジやめて」

「中学といえ、悠仁はわりと女子との接点あったよな。荒れてたのに」

「言うほどあったっけ？」

「あつただろ小沢とか」

「同じクラスだったしそれなりに喋ることはあるだろ」

「はー、そういうことじゃないんだよなー。これで本人はモテないって認識なんかもんなー。やってらんねー」

「そういえば快里って小沢とあんま仲良くなかったよな」

「仲良くないっていうか、避けられてたっていうか」

「なにしたんだよ」

「なんもしてないっつの」

とりとめの無い思ひ出話をしていると、固かった空気が少し緩んできた。

日が昇ってきて虎杖の横顔がオレンジ色の光に照らされる。

軽口を叩く虎杖はどこか安心したような表情で朝日に目を細めていた。

つい小さく笑うと虎杖が不思議そうな目で天坂を見る。

「いや、妙に緊張してる感じだったし、何言われんのかと思つたら昔話だとは思わなくて」

「あー……、そんな風に見えてたか」

「そりゃあんな不安そうな顔してたらな」

マジカー、と言いなながら手の甲で顔を擦っている。

何かを言おうとしてはやめてを数回繰り返して、思い切つたように話を切り出した。

「家入さんに、もしかしたら人格とか記憶に障害が残るかもって聞いてたから」

「……それは俺も聞かされた」

「受肉って本来は魂含めて全身を呪物に乗っ取られるらしい。だから、呪物の記憶だったり魂だったりかがどれだけ影響を与えるか分からないって。家入さんは今回のケースは特殊で受肉に関しては何から分からないこともあるから気にしすぎるなって言つてたけど、快里のクマひどくなってるし、寝れねえって言つてるし。まあ、怖えじゃん」

だんだん言葉が尻すぼみになり、虎杖は居たたまれなさそうな顔で黙り込む。

そこでようやく唐突な思い出話が始まったことに合点がいった。つまりは天坂に記憶の欠落がないか確認していたのだろう。

じわじわと心の空白が埋まっていく感覚。

虎杖の言葉を咀嚼し、飲み込み、悪夢で冷えていた身体の末端が温度を取り戻していく。

虎杖にとって、他者への心遣いは当然のものだ。そんなことずっと前から知っている。

だが、それがこんなにも嬉しい。

「でも記憶に関しては全然平気そうだな」

「そりゃ俺が悠仁との思い出を忘れるわけないだろ」

「大げさだろ。茶化すなっつ」

「悠仁」

「んー？」

「俺、やっぱり悠仁と一緒に高専に来てよかったよ」

天坂は心から、本当にそう思う。

頭からモヤが晴れたような気分だ。この幸福を、前世で得られなかったこの上ない幸福を、永遠にするために立ち止まっている場合ではない。

早足で石段を駆け上がる。虎杖が笑いながらあつさりど追い抜いていくのを横目で見て、足に力を入れて階段を蹴る。

何をしてでもこの呪いを成就させてみせる。己の魂がどう変質しようと、ずっと願いは変わることはない。

ある日の任務終わり。

伏黒は伊地知の車で直帰。虎杖と天坂は映画までの暇つぶしに別行動。

釘崎はと言うとタピオカ片手に街をフラフラしていたら、見知らぬ同い年の女子に声をかけられた。

適当なファミレスに入り、事情を聞きつつ小沢優子と虎杖とのツーショット写真に視線を落とす。

これにピンとこないほど釘崎は鈍感ではない。

「つまり、そういうことね？」

「はい。そういうことです」

これは協力しないわけにはいかない。情報源はまだこの辺のゲーセンにいるはずだ。すぐさま天坂に連絡を取ろうとしたが、小沢に止められた。

「天坂くんは呼ばないでもらえますか」

「なんで？ 同中だし虎杖のこと一番知ってるのアイツでしょ」
「そうなんですけど」

小沢はとても言いにくそうに視線をテーブルに落とす。

「虎杖くんと天坂くんすごく仲が良いじゃないですか」

「そうね。ちよつとキモいくらいね」

「……虎杖くんを見てるときの天坂くん、怖いんです」

「怖い？ へらへらしてて鬱陶しいなら分かるけど」

「私、よく虎杖くんを見てました。だから自然と天坂くんも目に入っていたんです。虎杖くんがふと目をそらしたときとか、誰か別の人と話してるときとか、その……」

「あ、私アイツがどう言われようと興味ないから気にしないで」

「えつと、なんていうか、笑ってるんです。ずっと。他の人なんて見えてないみたいに。その笑顔も友達に向けるものっていうよりは……。とにかく、面と向かって話しにくくて」

そこで小沢は口を閉ざしてしまった。

深刻そうな小沢の顔に釘崎は首を傾げる。

釘崎の知っている天坂は平凡というわけではないが、率先して他人を害するタイプでもない。

しかし、小沢の表情を見るによつほど天坂を敬遠する何かしらがあったのだろう。

「分かったわ。とりあえず天坂は呼ばない。代わりに別の情報源呼ぶから」

天坂の名前の下にある伊地知の番号をタップする。まだ高専に着いてなければ伏黒を送り返して貰えるはずだ。

電話は数コールで繋がり、10分もしないうちに不機嫌そうな伏黒がファミレスに現れた。

「何なんだよ」

「伏黒、いま虎杖って彼女いないよな？」

「いやマジで何の話だ」

帰る途中で突然車がUターンして何事かと思えばこれだ、と伏黒のこめかみに血管が浮かぶ。

かくかく然々で事情を説明すれば伏黒は大人しく釘崎の横に座った。

「ないだろ」

「根拠は？」

「急に東京来るつてなつても困つてなかった。それに部屋にグラビアアイドルのポスターが貼つてある。彼女いたら普通そういうの貼らないだろ」

釘崎はほっと胸を撫で下ろす。小沢も伏黒が断言したことで少し安心した顔になる。

伏黒がはつきり言い切ったのには他にも理由があった。

釘崎がいない場で、しばしば虎杖は天坂と好みの女子の話やら好きなグラビアアイドルの話をしているのだ。特定の相手がいるなら話題はそっちにいくだろう。

なぜ知っているかと言うと、その手の馬鹿な会話をするときは大体伏黒の部屋に来るのだ。同期の性癖事情なんぞ知りたくもないのに、馬鹿二人の会話に伏黒も巻き込まれた。

部屋でエロ本探しをしていた二人の頭をひっぱたいたのは記憶に新しい。

女子のいる手前、そういった下品極振りな事情は伏せる。

こっちまでとぼっちりを食うのは御免だ。

「あの、ちなみに虎杖くんの好きなタイプとか」

「あー、背が高い子って言ってたな」

伏黒の言葉に女子二人の目が輝く。

すぐさま虎杖のアカウントの画面を開きファミレスのURLと「来い」の二文字を送信する。

「あ、たぶん天坂ついて来るかも。言っとく?」

「あ、いえ、そこまででは」

「そう?」

メッセージを送って数分もせずに虎杖は景品の紙袋を片手に現れた。釘崎の予想通り、その後ろに天坂もいた。

そこで釘崎は小沢の事情を虎杖に伝えそびれていたことに気がついた。

「あれ、伏黒もいんじゃないか」

「オマエら二人とも煙草臭くないか」

「悠仁はパチ行つてたからな。俺はそんなでもなくない？いちおう分煙のゲーセンにいたんだけど」

ふい、と虎杖の視線が小沢へと向く。小沢は見せてもらった当時の写真よりもずいぶん痩せていて、おそらく一目では誰だか分からない。

「あーと、虎杖！この子は」

「あれ、小沢じゃん。なにしてんの？」

あまりにも事も無げに、虎杖は小沢に話しかけた。その声色は中学のときと何も変わっていないなくて、小沢の瞳がわずかに潤む。

10点の札を上げる釘崎と伏黒の横で、天坂は無言で10の横に0を一つ付け足す。

小沢の頭に中学時代の記憶が浮かぶ。

べつにこの気持ちを伝えるつもりなんてなかった。それでも、淡い期待があったことも確かだ。今の自分なら、と思つてしまった。

この尺度はかつて自分が嫌っていたもののはずだったのに、いつの間にか自分自身もその尺度で生きていた。

分かっていてははずだ。この気持ちは抱えていくものだった。

ファミレスを出た後、小沢を駅まで見送った。

手を振る虎杖に遠慮がちに手を上げ、その横にいる天坂に少し顔をこわばらせて小沢は改札の向こうに見えなくなっていた。

釘崎のジトつとした視線が天坂に向く。

「で、天坂。アンタ優子になにしたのよ」

「だから何もしてないって……」

既視感のあるやり取りに天坂はため息を吐いた。

真人は脹相が壊した人生ゲームの駒を指先で弾く。夏油に向かって飛んで行ったそれはあっさり避けられた。

「夏油さあ、なんでアイツを受肉体にしたワケ？絶対俺が改造人間にした方が面白かったじゃん」

「真人に聞いたときから考えていたんだ。同一存在を召喚するなんて聞いたことが無く

てね。それで、今回彼と話してみても分かったんだ」

「なにが？」

「あの術式は召喚ではなく、魂の一時的な分割なんじゃないかな」

「……それ、人間ができる芸当？」

「さあね。あれもある種、逸脱した執着の成れの果てなのかもしれない。分割した魂の断片は肉体の死をもって本体へと還るのだとしたら、魂まで侵食する受肉はどんな影響をもたらすんだらうって気になってね」

失敗作に終わった受胎九相図。しかし、それを素材に新たな可能性を示すことはできる。

もし本体に還ることで人と呪物の魂が混ざるのなら、その対象をどのように変質させるのか。

呪霊と人との混血でもなく、だがしかし人でもない別の存在へと進化するのだろうか。

「気になったら、試さずにいられないだろう」

夏油は床に転がる駒を拾い上げる。

人を模していたがひび割れ、折れ曲がり、無残に変形した駒は夏油が軽く力を入れただけでへし折れた。

21. 渋谷事変

教室に入ってきた五条が開口一番に言った。

「混ざってんね」

視線は天坂の怪我也完全に治ってようやく授業に復帰した天坂に向いている。

五条の言葉に虎杖、伏黒、釘崎の目がいつせいに天坂を見る。

「なにがですか」

「快里のとは違う呪力が。悠仁みたいに明確に混ざってるっていうより途中って感じ？
インスタントコーヒーにお湯入れて混ぜないでダメになってる、みたいな。マジで影響
出さないの？」

「いまのところは無いですけど」

「念のため家人さんのところに行かせたけど、とりあえず問題なしって言われてたつす」

虎杖の補足に「ふーん」と納得したのかしてないのか分からない返事をする五条の表情は目隠しのせいで読めない。

「本体はもう死んでるから残りかすって感じかな。でも悠仁と違って快里は耐性があるわけじゃないし、自分の意識を手放さないようにね。意識を乗っ取られる可能性もゼロ

じゃないから」

「それって俺が寝てるときにもあり得るんですか」

「さすがにただ寝てるだけなら無いけど、意識が薄くなつてるときに影響が表出してくることはあるかもね。なんにせよ自我を強く保つこと」

「自我ですか……」

「自我ですか、じゃないわよ。急に乗っ取られたりしたらマジ問答無用で殺すわよ」

「前回は役立たずで申し訳ない」

釘崎に詰められている天坂を横目に伏黒が軽く拳手する。

「そんなあやふやな対策以外に何かないんですか、五条先生」

「そう言われてもね。こればかりは本人の問題もあるし」

そうだなあ、と首をかしげて腕を組む。

「もし精神が生得領域に引きずり込まれたら、何としてでも出てくること。下手したらそのまま取り込まれるかもしれないからね」

「本体は死んでるのに生得領域があるんですか」

「宿儻だって本人は死んでるよ。ま、さすがに呪物としての格が違うけど、警戒に越したことはないし」

影響の表出、と天坂は頭のなかだけで繰り返す。

たしか虎杖は少年院で一度死んだときに宿儺の生得領域に入っていたはず。つまり、そのレベルで意識が無くなれば生得領域に入れるのだろうか。

五条が授業の開始を告げる声をどこか遠くに聞きながらそんなことを考えた。

また、血塗は夢を見ていた。

兄弟たちとの穏やかな理想。変わらず末席には男が俯いている。

じつと見ていて気がついた。男に顔ができています。

ぐちゃぐちゃでのっぺりしていた顔面は、かき集めて固めた絵具で凹凸ができています。

動かなかった男が突然頭だけをぐりんと血塗へ向けた。

「ああ、やっと会えた。寝てるだけじゃどうにもならなかったからな。ちよつと無理して良かった」

色彩が混ざりひび割れた唇が言葉を発する。

とつさに隣の兄へ手を伸ばすが、指は空を切るばかり。

いつの間にか兄弟たちの姿は消え、男と血塗だけがこの空間にとり残されている。「そんな反応するなよ。俺たちは今や兄弟より近い仲間なんだし」

青緑の目蓋を歪ませて男が笑う。

眼球があるはずの空間は血塗と同じで空洞だった。

『なんだ、オマエ』

「先に俺を知ってるって言ったのはそっちの方だろ、血塗」

安穩とした夢に溶けていた思考がだんだんと戻ってくる。

あのとき。壞相と『お遣い』に行ったあのときに、血塗は死んだはずだ。

今にも泣き出しそうな顔の人間の振り下ろした拳と黒い火花が視界を奪い、そこで記憶が途切れた。

さらに記憶を遡る。

母の胎で死んでから呪いとなり、兄の存在を寄る辺に過ごした150年。

そして、目の前の男を魂ごと上塗りして血塗は再び生まれた。

『俺の身体になった奴』

「今はオマエが間借りしてる魂の持ち主だよ」

『俺は生きてんの?』

「生きてはいない。俺の形代が死んだときに混ざった記憶と一緒にいつか来たんだろ。今の血塗は記憶の残滓と強い呪いが合わさってできた人格もどきみたいなモンだろ。さすが特級呪物」

『俺を消しに来たのか』

「いや、ただ間借りさせとくのも思つてな。賃料を取り立てに来た」意味が分からず血塗は首をかしげる。

目の前の男、天坂快里は右手を差し出す。

「俺と手を組もう、血塗。俺に協力してくれたら、オマエのもう一人の兄ちゃんに会わせてやる」

ぽかんと口を開けてしまった。

仮にも取り殺された相手にこんな平然と取引を持ちかけてくる人間がいるのか。

『なに企んでる』

「俺はさあ、前は頭が何も考えらんない状態でただ無意味に、無感情に線路に落つこちたんだ。だから、二回目は最後まで好きなことだけ考えながら必死に一番いい終わり方を目指して最善を尽くしたいわけなんだよ」

血塗は天坂の言いたいことが分からず首をかしげる。

天坂は朗々と語りながら歪で粘着質な笑顔を浮かべる。ニチャつという擬音がしそうなそれは、おおよそ人間が浮かべる笑顔とはかけ離れていた。

「俺は虎杖悠仁に、消えない傷を残して死にたいんだ」

理解ができない、というか意味不明だった。この天坂と言う男が狂人であるということしか分からない。

こんな人間と手を組むのは抵抗がありすぎるが、しかし血塗の脳裏には長兄である脹相の顔が浮かぶ。

自分は兄を二人とも置いて逝ってしまった。三人で一つだと手を重ねたのに、自分が一番早くその手を離してしまった。

もう一度兄のもとへ帰るチャンスがあるなら断る理由がない。

迷うことなく右手をとれば、天坂は楽しそうに肩を揺らした。

『それで俺はどうすれば良いんだあ?』

「まず俺と記憶の共有ってできたりする?」

『できるっていうか俺が取り込まれた時点で共有されてんじゃないの?』

「オマエに受肉されたうえに死んだシヨックで全部飛んでるわ。こちらら普通の人間だぞ」

『普通の人間は記憶だけじゃなくて命も飛ぶんじゃねえかな』

「別に全部共有しなくていい。具体的に言うとな血塗の死に際あたりだけで充分。な、な、頼む」

すごいグイグイくる。あまりの必死さに、さすがの血塗も若干引いた。

共有といってもどうすればいいか分からず、とりあえず具体的に何があったか思い起こしてみる。痛かったし兄を置いて逝ってしまった記憶だから本当は思い出したくは

ないのだが。

『どう?』

天坂は目を閉じてなにも言わずにスツと親指を立てた。

よく分からないが上手くいったらしい。

『で、具体的に俺はこれからどうすれば……。聞いてるかあ?』

「ちよつと待ってくれ。あと五回はこの記憶を反芻したい」

『なんで?』

「趣味、というか生き甲斐」

人間って案外呪いと大差ないのかもしれない。

恍惚とした顔で両拳を天へ突き上げている天坂を眺めながら血塗は思った。

しばらく天坂の奇行を眺めていると、満足したのか深く息を吐いて空虚の広がる目を

血塗へ向ける。

「で、ここからが本題なんだが」

『長かったな』

「とりあえず、俺が知るこれからのことを全部血塗に話す。10月31日の渋谷で誰が

どう動いて何が起ころのか。その上で俺たちはどうするべきか詰めていこう」

『質問』

「はい、血塗くん」

『オマエ、なんでこれから起こること知ってたんだあ？』

「本題には関係ないから却下」

『もう一個聞きたいんだけどさあ』

「なんだ」

『オマエの目的がかなったら、俺はどうなる』

兄に会うだけで終わるつもりなんて毛頭無い。

あわよくばそのまま主導権を奪って脹相とどこかへ逃げてしまえばいい。

「ああ、そのへんについてもちよつと考えはある」

『本当かあ？』

「多少人格とか混じるかもしれないけど、まあなんとかなるだろ」

『オマエはそれでいいのか』

「いいよ。俺はこの願いのために生きてきたんだから」

空洞のはずの天坂の目が輝いているように見えた。

人気がない森の中でパチリと天坂は目を開けた。酷い頭痛とともに目の前がチカチカと点滅する。

深く息を吐き、苦しいほどの動悸をしずめようとす。

これでいまやるべきことはやった。あとは血塗が自分の術式とうまくなじんでくれるかどうか。

冷や汗が引いてきたところで、周囲で何か動いた気がした。

ここは自殺スポットとして有名だ。万が一交渉が失敗したとき形代を処分するためこんな所まで来たが、あまり長時間じつとしてしていると呪いが寄ってくるだろう。さつさと帰った方が良さそうだ。

足元に転がる形代を揺り起こす。ちゃんと起きてくれるだろうか。

必要とはいえ、さうとう強い力でぶん殴ってしまった。それこそ一回死ぬくらいには。

心配とは裏腹に形代は何でもないように起き上がった。

形代の頭からはおびただしい血が流れているが、それが見る見るうちに塞がっていく。

起き上がった形代の目からどろりと血が流れだす。

それを手鏡にしまい込んでからその場を離れた。

2018年10月31日。時刻は19時。

突如として渋谷駅を中心とした半径400メートルに帳が降ろされた。

一般人のみを閉じ込める帳のなか、散り散りに逃げ惑う人々は結界の壁を叩き口々に同じ言葉を叫ぶ。

「五条悟を連れてこい」と。

天坂は日下部、パンダと共に帳の外の渋谷駅新南口で待機していた。

広範囲に高度な結界を張ったことにくわえ、五条悟ピンポイントでの指名。

主犯は交流会の襲撃者と同ーだと日下部は語る。

「お上は被害を最小限に抑えるために五条単独での平定を決定。俺を含め動ける一級術師は五条のおこぼれを拾うってわけだ」

「一般人の被害は計算に入っていないのかよ」

「去年の『百鬼夜行』と違ってもう呪術師側は後手に回ってるからな。これ以上はどうしようもねえだろ。天坂、帳内の様子はどうだ」

「形代が見てる限りでは、一般人がパニックってますけどそこまで大きな変化は今のところ無いです」

「あれ？オマエ形代のことは感知できないんじゃないやなかったか？」

「さすがに痛い目に遭ったのでちよつと工夫しました」

「ほーん」

天坂の左目は充血したように赤くなっている。

左目は形代と交換したものだ。

形代とリアルタイムでの情報共有なんてそもそも必要がなく、やり方すら考えようとしてこなかったから突貫で試行錯誤した。

形代は自分とは別の個体として成立している。だから血塗の力も借りて無理やり縁を作るしかなかった。

瞬きをすると左目の視界は帳内から目の前に戻ってきた。

腕時計で時間を確認する。時刻は20時14分。

五条現着まで約15分。そして、五条封印が通達されるまであと1時間ほど。

背筋を伸ばす。

さて、死に物狂いでいこう。

帳内にいる形代^{天坂}は人を避け、駅の地下に続く階段を見下ろす。

入るのはまだ早い。副都心方面へ降りるのは五条悟が封印されてからだ。

「待ってる、兄者」

ポツリと呟かれた言葉に応えるものはいない。

形代^{天坂}の左目から流れ出た血が頬に伝い、地面にシミをつくった。

2.2. 因果応報

いわゆる「渋谷ハロウィン」という催しが始まったのは2010年頃だ。

ハロウィンはそもそも仮装した子供がお菓子をもらう風習だったはずが、いつの間にか大人たちのどんちゃん騒ぎにすり変わっていた。

かつての天坂にとっては縁のないものであり、連日終電帰りの回らない頭で仮装という名のコスプレ大会を遠巻きに見ていた記憶しかない。

警備が薄いなか一ヶ所にとどまり続ける無防備な人の大群は、人間であれ呪いであれ悪意あるものにとっては格好の獲物だろう。

電波が遮断される帳の中では術師たちも連絡を取ることができない。

戦況の共有は難しく、対応は各々の術師の判断に委ねられる。

つまりは、同じ顔の人間が多少あちこちで出現しても気にも留められないのだ。

「あくまで多少だ。基本的に形代の主導権は血塗のものだが、他の術師に会った場合疑われる可能性もゼロじゃない。いざとなったら俺の意識と交代しろ」

渋谷事変前の血塗との作戦会議。

一度帳が下りた渋谷に入ってしまったえば連絡なんて取りようがない。なにより天坂の

ガワで中身が血塗の形代を使うのだ。

術師に疑われても、脹相に敵だと判定されても詰みだ。

『そんな器用にできんのかあ?』

「主導権持つてる側が引つ込むくらいならできんだろ。そうすれば自然と元の人格が表に出てくる、と思う。たぶん、きつと」

『どんどん自信なくなつてつてるじゃねえか』

「仕方ないだろ。一番近くにいる受肉体が頑丈すぎてあんま参考にならないんだ。あと、地下5階には絶対に降りるなよ。五条先生が封印される副都心ホームには夏油がいる。しばらくはその場を動けないけど、近づけばまず間違いなく殺される」

『夏油かあ……』

「会ったことあるよな。受肉のときにいた額に傷がある袈裟の男だ」

『オマエもあるだろ。血塗術になる前に』

「いや、それについてはマジで覚えてないんだよ」

原作の流れと異なり天坂が受肉体になった。

その場に真人と夏油もとい羅索もいたはずなのだが、受肉のショックのせいなのかそのあたりの記憶がすっぽり抜け落ちてしまっている。

しかし、そこまで気にするものでもないだろう。向こうが受肉体として以外に天坂に

利用価値を見出しているとは考えにくい。

「悠仁が五条先生の封印を通過してから約30分後に、脹相と悠仁の戦闘が始まる。血塗が脹相と合流するならそのタイミングしかないわけだが、そのころには地上にも真人の改造人間がうようよいるし他の術師の目もある。慎重に動けよ」

『おう。オマエはどうすんの?』

「俺は状況を見て23時前には単独で動く」

地上もシヤレにならない地獄絵図になるのだが、地下は地下で特級呪霊とエンカウントする可能性がある。敵からも味方からもほどほどの距離を保ちつつ、一般人の避難が済んだらさっさと移動すべきだろう。

宿儺と漏瑚の戦闘の動線は渋谷で下見してある。頭が痛くなるレベルで戦闘による被害範囲が広い。

正直スケールが大きすぎていまいちピンときてないまでである。だからこそ巻き込まれないことが最優先だ。

「じゃあ、手筈通りにな。絶対に悠仁のこと殺させるんじゃねえぞ」

『分かってるって。俺は兄者に会えればそれでいい』

天坂は内心不安もあるが、それ以上に期待が大きかった。

幸いにもと言えるのか、天坂を変人とは思っていても疑っている人間はいない。混乱

のさなかでどこかにフラツと消えたところで「宿儺に殺されに行つた」なんて斜め上すぎる目的を看破できる人はいないだろう。

それこそ天坂が予想していない何かが起こりさえしなければ、最高の最期へ迷いなく吐き進めると思っていた。

この時、致命的な見落としがあつたことを天坂は後になって知ることになる。

夜の渋谷に虎杖の大音声が響き渡る。

五条悟の封印。

その言葉が指すのはまさしく呪術師側がほぼ詰みであるということだ。

五条がいなくなった盤上をひっくり返すほどの戦力は今の渋谷にいない。術師たちがやらなくてはならないことは呪霊の跋除から五条の奪還に切り替わっている。

とはいっても日下部が率先して地下に行くなんてことはなく、天坂はパンダと共に建物内からわらわらと湧き出す改造人間を処理しつつ一般人の避難誘導に奔走していた。

パンダの拳が大型の改造人間の頭をカチ割つたのと同時に近くの帳が上がった。

「あれ？帳上がった？」

「俺たちが入れなかつたやつですね。一般人を閉じ込めてる帳はまだ残ってます」

ちらりと時計を確認する。ちょうど猪野、伏黒、虎杖がセルリアンタワーでの戦闘を

終えた頃だ。

このあと虎杖はすぐに渋谷駅へ向かうはず。

狗巻が避難誘導を始めるあたりでここからは離れた方が良さそうだ。

早めに動かなければ特級同士の超次元バトルに巻き込まれる。

避難誘導にかこつけて反対方向に抜け、109方面に向かうならそこまで不自然じゃないだろう。

天坂がどう言って日下部たちから離れるかと考え始めたとき、突然背後から腕を掴まれた。

ぎよつとして振り返ると、そこにいるはずのない人物がいた。

「あれ、虎杖じゃん。どうした」

そう、渋谷駅に真っ直ぐ向かっているはずの虎杖が、なぜか渋谷ストリームに近い日下部班のもとに来ている。

天坂は混乱しながら日下部とパンダに視線を向けるが、二人とも急なことに困惑している。というか、日下部は露骨に関わりたくないという顔だ。

ひどく険しい顔をした虎杖はパンダの問いに答えず、天坂の目を覗き込んだ。

「俺に、なにか隠してないか」

「えっ」

「頼む。答えてくれ」

心当たりがありすぎる。どれのことを言っているんだ。

そもそもなんで今その質問なんだ。

「な、なんだよ急に。今はそれどころじゃ……」

言いよどみながら視線を落とすと、虎杖の手に握られているものに気がついた。手の平に収まる大きさのそれにはロボットの顔のような模様がある。

与幸吉が遺したメカ丸の子機だ。

それを見た瞬間、天坂の脳に最悪の可能性が浮かぶ。

今すぐメカ丸を壊さなければ取り返しのことになると脳内で警鐘が鳴る。しかし、ここでそんなことをすれば、今の虎杖の問いを肯定するようなものだ。

判断に迷っていると、無情にもメカ丸はばかりと口を開ける。

『パンダ』

「あ、その声メカ丸か？ ずいぶんちっさいな。前のボディはどうした」

『今は詳しい話をする時間がない。オマエに頼みたいことがある』

待て待て。

「なんだよ改まって」

『天坂快里をオマエの側から離さないようにしろ。渋谷駅に近づけるナ』

頼む待つてくれ。

『そいつは今回の主犯である夏油と接触しているル』

ただ一言、しかし天坂にとって致命的な言葉が放たれた。

虎杖は真つ直ぐ渋谷駅に向かうつもりだった。

セルリアンタワー前で伏黒と別れ、駆け出した虎杖にメカ丸が声をかけた。

『ここに天坂快里は来ているカ』

「うおっ！なんだよ今まで静かだったのに」

『省エネダ。それより、質問に答えろ』

「あー、日下部先生のとこだから帳内にはいると思うけど」

『地下に行く前に天坂を探してくレ。ヤツを渋谷駅に近づけたくない』

「は？なんで」

『ヤツが夏油と接触しているからだ』

ぽかん、と口を開けた虎杖は足を止めた。

耳に取り付けていたメカ丸を外し、揺れる瞳で見下ろす。

「何言ってるんだ……？」

『俺は夏油たちが交流戦で拉致した天坂の分身について話していたのを聞いている。今

回の渋谷での計画を聞いたときにナ。詳しくは分からないが夏油と天坂の間に何かしらがあつたことは確かだ』

「何かつてなんだよ。そもそもアイツは、受肉体にされたアイツはその時のショックで記憶が飛んでる。仮に夏油と会つてたとして、なんだつていうんだよ」

『内通者の可能性がある。記憶の有無なんて本人しか分からないことを信じるの力？ 五条悟奪還の障害になりかねない存在は早めに潰しておきたい』

「根拠もなくそんなこと言つてるわけじゃねえよな？」

虎杖は根拠がないのならこの場で壊してやると言わんばかりに手に力をこめる。握り締めたメカ丸の小さな機体がギチギチと音を立てた。

しかしメカ丸は冷静な声色で話し続ける。

『夏油という男は恐ろしいほどに狡猾だ。相手の何が弱点か見極めて、的確にその弱みを突いてくる。天坂には無いのか？ 己を犠牲にしてもいいと、すべてを投げ出しても構わないと思えるような弱みガ』

ピクリと虎杖の手が震える。

メカ丸を再び耳につけ、走り出す。

『いまは可能な限り高専側のリスクは避けなければならぬ。オマエも五条悟が封印されたいま、何を優先すべきかを分かっているはずだ』

「……」

虎杖は答えなかった。

ただ無言で爪先の方角を変える。

虎杖は天坂を疑っていなかった。

本人にメカ丸の疑念を否定してもらえればそれで充分だと思った。

八十八橋の一件からどこか考え込むようにぼんやりとしていたことが増えたのも、渋谷への招集が決まった時からずっと浮足立ったような様子だったのも、全部自分の思い過ごしであればいい。

自分は今にも覚えていないと、その一言を聞ければ良かった。

ただそれだけだ。

だからこそ、自分の問いに答えを濁す天坂を見て、揺らいでしまった。

メカ丸の放った言葉に、すぐさま目下部とパンダから懐疑的な視線が天坂に向けられる。

ああ、最悪だ。

なぜこのことを忘れていたのか。メカ丸こと与幸吉は呪霊側と取り引きし、高専内部の情報を流していた。

呪霊と高専の両方に通じていたメカ丸ならば、形代天坂が拐われたのもどこかで見ていただろう。

そして、その後の受肉直前の段階で天坂自身すら知らない形代と夏油との間にあったやり取りを知っている可能性だってあるじゃないか。

まずい。非常にまずい。

何がまずいってどんなやり取りがあつたとしても天坂は覚えていないのだ。

メカ丸がどんな証言をしようと、こちらには反論の手札がない。

黒幕と通じていると疑いがかけられた今の時点でほぼ詰みのようなものだ。

それでも何か反論を捻りださなければ。

こんなところで終わってたまるか。

「突然なに言い出すかと思えば何の根拠もなく人を内通者呼ばわりかよ。夏油となんて会ってないぞ。俺は」

『記憶が無い、カ？分かつている。だが、受肉体にされた天坂の分身が夏油に接触しているのは確かだ』

「それだけのことだろ！そもそも俺みたいない奴を内通者にしたところ
で得るもんなんて無い！」

「どうどう、天坂落ち着け。メカ丸も、急にそんな端折られた話されても分かんねえっ

て」

「いや、そのオモチヤの言い分は分かる」

宥めようと割って入ったパンダを日下部の言葉がバツサリと切り捨てる。

「簡単な話だろ？天坂は現状グレーってとこで、俺たちで大人しくさせときゃいいだけの話だ。逃げようとするなら切ればいい。正直いま切つちまった方がリスクが低いだろうが、ただでさえ人手不足だ。今は働かせて、黒かどうか分かってから切つた方があと腐れがない」

「日下部、オモチヤじゃなくてメカ丸だ。京都校の」

そこじゃないだろ。というか日下部は渋谷駅に近づかなくていい口実ができてラツキーくらいに思ってるだろ。

天坂は全力でツツコみたいのを唇を噛んで我慢する。敵を増やしている場合じゃない。

この様子では、メカ丸の説得はできないだろう。日下部も難しい。パンダは中立だが、それゆえにこつちには付いてくれそうにない。

なら説得する対象はひとりだ。

「悠仁、俺は本当に……」

天坂の腕を掴んだまま黙っていた虎杖に呼びかける。

メカ丸はあくまでも情報提供をしているだけだ。虎杖さえ信じてくれれば、不利ではあるが日下部班に首輪をつけられるのだけは回避できるかもしれない。

指が食い込むほど強く掴んでいた天坂の腕をゆっくり離した虎杖は先ほどとうつてかわつて弱々しい。

手にしていたメカ丸をそつとポケットに入れる。

「快里、さっきの質問答えてくれ」

隠していることは無いか。再び問われる。

「ない、そんなもん」

「そうか」

今度こそ迷いのない答えに、虎杖は微笑む。

「ならパンダ先輩たちと一緒にいてくれ」

「……………えっ」

「このまま言い合いで時間を使えないだろ。少なくとも逃げたりしなきゃ殺されない」

「いやいや、なんで悠仁まで」

「夏油は誰かって、聞かないんだな」

天坂にしか聞こえない声量で、ひとり言のように呟く。

数秒その言葉を理解しようと思ひ、今度こそ天坂の顔から血の気が失せた。

「夏油となんて会ってない」と確かに言ってしまった。まぎれもなく失言だ。本当に記憶喪失ならば、「夏油」という名前にまず疑問を抱かなければならなかったのだ。

記憶喪失が虚偽であるか、あるいは前世の記憶なんてものを持っていない限りは、天坂は何を言われようと「覚えていない」と突っぱねなければならなかったのだ。

「パンダ先輩たちは気づいてない。頼む。快里を死なせないために、残ってくれ」
そこから先の言葉は、呆然と立ち尽くす天坂には聞こえていなかった。

天坂はただ、自分の犯したとんでもなく単純で致命的なミスに固まったまま、渋谷駅へ走る虎杖の背中を見送る。

慰めるようにパンダは優しく天坂の背を叩くと、力なく肩がかくりと落ちた。